

乃木若葉は新婚である

夏目ユウリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀四年。高校を卒業した乃木若葉は西暦勇者唯一の生き残りとして四国中の人間の尊敬を集める存在となっていた。

そんな中親友である上里ひなたからある提案を持ちかけられた彼女の人生は思わぬ方向へと向かっていくのだった。

これは乃木若葉は勇者である。のもしかしたらあるかもしれない後日談である。

目次

乃木の血	1
純粹な少女	6
裸の付き合い	14
死してなお	22
15の少女	32
共に願って	40
ある朝	49
心地良い病室	61
もう会えない	71
明日への希望	81
春の芽吹きと……	91
夜更け	104

誰の名を	117
散り桜	128
複雑な心	139
その闇の中	149
その闇の先	162
叫び	174
友達	191
帰還	202
最初の日	211
言葉の意味	222
女神か天使か	232
恋愛小説	243
その意思	253

友達はきつとまだ

ちっぽけな意地

こんな休憩

主人公スキル

苦悩と悪夢

264

275

283

293

304

乃木の血

私こと乃木若葉は西暦勇者唯一の生き残りだ。

まだまだ記憶に新しい西暦という暦の時代人類の存亡をかけた戦いから早四年。天の神と一時的な休戦協定を結んだ人類は平和を手にしていった。

しかしそれはあくまで仮初めのものでありこのままでは人類は数十年、数百年後には
ジリ貧となってしまう。

そう

まだ戦いは終わってなどいない。

今はまだこの世界を奴らから取り戻すすべは無い。しかしいつか近い未来か遠い未来に必ず我々からのバトンを受け継いだ勇者たちがこの世界を取り戻すことを信じて

私たちは今日を、明日を生きるのだ。

くく

「なあ……………ひなた」

「何ですか？若葉ちゃん」

神世紀四年。四国内のゴタゴタがようやく片付き人々が平和を笑顔で謳歌できるようになり私やひなたも少しは落ち着いていた生活が送れるようにやっていた矢先。

私の家である乃木家にて

私にとつて今まで考えたこともなかった議題が持ち上がった。

何を隠そうと私の一番の親友である上里ひなたによつて。

「その…お前が言わんとしていることはなんとなくわからないでもない。だけど……………流石にそういうのはまだ早いんじゃないか？」

私は渋い顔をしながら熱々の緑茶を飲む。うん、うまい。

「何を言うんですか若葉ちゃん。若葉ちゃんももう今年で19歳。高校を卒業したこのタイミングはむしろちょうどいいぐらいです」

うーん……………ひなたのやつ譲る気は毛頭無いという顔だ。長年連れ添ってきたわたしにはわかる。だからこそ厄介なのだが…。

「それに…前々からこの手の話はちよくちよくしていましたよね？若葉ちゃんつたらそ

の度にお茶を濁すんですから」

ひなたがむすつとした顔をする。私としては苦笑いをするぐらいしかできない。

「……………本当は私だって色々と思うところはあります」

「ひなた……」

「ですが若葉ちゃんはこの世界を救った英雄であり勇者の唯一の生き残りなんです。その血は人類が存続する限り決して絶やしてはならないというのが大赦の考えです。もちろんそれは私の考えでもあります」

「私とてこの世界そして人がこの四国という狭い壁の中で生活するために私の身が必要だというなら喜んで差し出す覚悟だ。……………しかし

どうにもわからないんだ。この手の話は」

「若葉ちゃん……」

か……可愛い！

ああ：若葉ちゃんったら相変わらずウブなんですから。でもそれがいい！汚れることなく私が丹精込めて育ててきただけのことはあります！きつと今自分の顔がほのかに赤らめていることも気づいていないのでしょうか。可愛い！やっぱ私の若葉ちゃん最高ですね！

それに、私だつて本来であればこんな話を自分から若葉ちゃんに對してするなんて心がどうにかなつてしまふところですがこればかりはどうしようもありません。

なにせどこぞの馬の骨に若葉ちゃんは渡せませんし大赦も納得しないでしよう。となるとある程度の家柄と神樹様、大赦に對する認識。その人の人柄。要は全てにおいて若葉ちゃんにふさわしいか否か。となるとやはり最も若葉ちゃんに近しい人間である私がその相手を探すというのも道理。

まあ要は大赦が若葉ちゃんの相手を探すというのでそんなこと赤の他人に任せられないということ私が立候補してその役目についたのですが。

そう

ここまで散々引つ張つておいたので多くの人はお気づきでしょう。

これは何事にも耐え難い、おそらく今後の人類の存亡を左右する決め事。神世紀始まつて以来最大の祭事（まだ四年しか経っていませんが）

それは

若葉ちゃんのお婿さんを探すということ!!?!!?!!?

純粋な少女

「うううう………」

獣の唸り声のような声を出しながら台の上にぎつくばらんに置かれた書類とにらめっこしているのは勇者乃木若葉の自他共に認める一番の親友である上里ひなた。

「もちろん簡単にいるとは思いませんでした……実際にやってみるとやはり難しい……」
一枚や二枚どころではない大量の書類。その書類の一枚一枚には大赦やあるいはそれに関連のある男の顔写真とその主な履歴が書いてある。要は履歴書である。

数日前の乃木家でのあの一件以降ひなたは早速集められるだけの数の履歴書を集めその一つ一つと格闘していた。

とどのつまり若葉のお婿さん探しである。

たかが結婚されど結婚。

本来であればこのような大事なことは現在この四国のトップの存在である大赦の偉いさん方が決めるのが普通なのだがひなたは大赦の中でも若葉に次いで特別な存在。

若葉と共に大赦の根本を作りあげ、若葉の思いつきやアイデアをひなたが形にして大赦に提案するということで大赦が少しずつだが確実に形作られていった。

「若葉ちゃんにあれだけのことを言ったのですからこの役目必ず成し遂げなければ！」

「なーにしてんの？」

「ひゃ☒………つてなんだ安芸さんですか」

「なんだとは何よー」

この人は安芸真鈴さん。私と同じ大赦の巫女であり今は私の補佐的な役割を担ってもらっている方です。あといきなり耳に息を吹きかけないでください。それは私の専売特許です！（若葉ちゃんに対して）

「久しぶり〜つて声かけようとしたらなんだか上里ちゃんがウンウン悩んでるみたいだからさ。ちよつと気になつちやつて」

「ごめん、ごめんと手を合わせながら謝る安芸さん。

「全く……安芸さんは大赦でもそれなりの地位にいるのですからその自覚をですな」
「あーわかった。わかった。上里ちゃんその話しだと話長くなるから。そんなことよりほら、何を悩んでたの？おねいさんに話してごらん」

おねいさんといつても一つしか歳の差はありませんが……しかし私だけでは現状行き詰まっているのも確か。それに安芸さんはこれでもなかなかいいサポートをして

くれています。もしかしたら私では気がつかないような観点に気がついてくれるかもしれない。私には書類を見せながらことの詳しい話をする。

ちなみに結婚という二文字を出した途端「けっ結婚☑」と驚いていた安芸さんを見て心の中で軽くほくそ笑んだのは秘密だ。

一通りの説明を私から聞いた安芸さんはため息を軽くつくかのように息を漏らした。

「なるほどねーはあ・結婚・ねえ」

「はい、これからの四国に住む人々のため、何より若葉ちゃんのためにこれは何より大事な案件です」

「まあたしかにそれはそうかもしれないけど、当の乃木ちゃんの方はどうなの？ 反応の方は？」

「……正直あまりピンときていない感じでした」

「あーやつぱり。乃木ちゃん見るからに恋愛だとかの色恋沙汰に対して疎そうだもんね。そりゃそんな反応にもなるわ」

「はい、若葉ちゃんは中学生、いや小学生、いや幼稚園の頃・それこそそれよりも前からその手の話にはとんと疎かったのです」

「うん、そんな前から乃木ちゃんのこと詳しい上里ちゃんもどうかと思うけどそれは

置いといて……それにしても乃木ちゃんも難儀だなあ」

「何がですか？」

「いやあ、別に」

〃

「ふっ……ふっ！」

場所は変わって乃木家。今若葉は小さい頃からの日課である鍛錬の途中であった。

鍛錬は良い。へんなことを考えずにただそれだけに集中できる。

若葉の家である乃木家こと乃木邸はいわゆる武家屋敷のような作りでありその広さは一般家庭や少々古めの木造建築の家と比べても郡を抜いた敷地面積がある。

そこには鍛錬のための道場もあり若葉は幼い頃からここで鍛錬をしていた。最も小学五年生の時のバーテックスの襲撃以降はもっぱら丸亀城でほかの勇者の仲間達と共

に鍛錬をしていたが。

劍を振っていればかつて共に人類を守るために戦いその尊い命を落としていった仲間達のことを思つて泣くこともない。悲しくなることもない。これからのこと。四国、人類、大赦、神樹、バーテックス、天の神考えること悩むことは山ほどある。しかし

今現在若干18歳にしてこれまで一切合切恋愛のれの字も経験がなかった若葉にはある特殊な悩みがあつた。

「結婚……かあ……」

ふと、自分でも気づかぬうちに口から言葉が漏れ出す。

そしてそれに気づいて「わ、私は一体何を考えて……」となるまでがお決まりの流れ。数日前にひなたから聞かされた「結婚」の二文字。

その二文字はピュアでウブで天然培養な若葉（ひなた曰く）には少々いや、かなり刺激の強い話であつた。

くく

ゴクゴクゴクと効果音が聞こえてきそうな勢いでスポーツ飲料水を飲み一息つく。

「……………はぁ」

煩惱を払うために今日は普段に増してつい熱が入ってしまった。やはり私もまだまだ修行不足だな。もう今年で19になるといふのに。

道場の壁にもたれながらタオルで汗を拭う。普段はひなたがよく拭いてくれるのだから、あいに今日は大赦の方に行っている。

「着替えるか…」

悩みの種が尽きることはないがなにはともあれまずは着替えることにする。家のはずれにある道場から渡り廊下を渡って家に入る。洗面所で汗だくになった道着を脱いで着替えを「ー」と思ったがそのまま着替えることはせずむしろそのまま全ての衣類を脱いだ。

そう、風呂だ。乃木若葉は風呂に入る。である。

くくく

REC いや、そうじゃない。

「はあ〜」

シャワーを浴びて浴槽に入る。疲れが体の芯から取れていくのがよくわかる。至福のひとときだ。幼い頃などはひなたと一緒によくお風呂にも入ったが最近は互いに心身ともに成長してそうした機会もなくなってきた。まあそれでもたまに二人で入ったりもするのだが。ちなみにひなたのものはすごい。何がとは言わないが。

…なんとなく謎の悔しさを感じる。

「……………」

膝を自分の両腕で抱え半ば風呂に入る時の癖となった頭にタオルを乗せた状態で黙って湯に浸かる。浸かり始めてからどれほどの時間が経ったのだろうか。10分か20分か30分か。はたまたそれ以上の時間か。自分でもはっきりしない。

中学生の頃よりも少しだけ長くなった髪から雫がポチャッと水面に落ちて響く音だけがこの部屋を包む。不思議とそう大きくもないであろうその音が無性に大きく感じた。

「……私は……どんな人が好きなのだろうか……」

それは普通の少女としての人生を数年の間歩むことなく成長し多感な時期である10代後半を恋をすることなく成長してきた少女の心の声であった。

裸の付き合い

若葉が汗を流し体を癒すなおかつもう一つのちよつとした悩みを抱えながら自宅の風呂に浸かっていたそれと同時刻。

大赦の施設において二人の少女が疲れを癒していた。

くく

「つあくくく生き返るくく」

「おじさんみたいですよ、安芸さん」

「いいじゃん、いいじゃん。どうせ今は私たち二人だけしかないんだからさ」

「まあ…そうですが」

ここは大赦の施設にある大浴場。あくまで公共の施設ではあるのだがあまり使われることはないという。大方自らの自室で済ませる人が多いのだろう。

しかし真鈴、ひなたはよく使っている。

「にしても、結構時間かかっちゃったね」

「はい…それにピンとくる人は結局見つきりませんでしたし…」

「いやあーなんとなく予感はしてただけど上里ちゃんの審査したら厳しいのなんの」

「当たり前です！これは本当に重要な案件なんですから！」

苦笑を浮かべる真鈴。反対に拳をぎゅっと握りしめ湯気に紛れて炎が出ているのではないかと思うほどの熱を持って返答するひなた。

なんでしょう………どの方もそれ相応の経歴の持ち主ではあるのですがこの人が将来若葉ちゃん………と思うとどうにも決められません。結局あれからとりあえず用意できた資料は数時間かけて全てに目を通しましたが成果はイマイチ。…でもそれにどこか安心してしまった自分もいます。

この話を若葉ちゃんに提案しようとする前からそうでした。四国の今を生きる人々のためこれからの未来のため、それはもちろん重々承知ですし、若葉ちゃんもわかってくれています。

でもそのことと私一人としての気持ちはまだ複雑です

顔を上げるとにへらっと気持ちのいい笑顔の安芸さん。その表情につられてたつい

私も笑ってしまおう。

「今日はありがとうございました。安芸さんがいてくれてかなり助かりました」

今一度頭を下げて感謝を言葉にする。感謝を言葉にすることはとても大事なことです。小さい時から若葉ちゃんにも言ってきました。

「いいよーいいよー同じ巫女仲間でかれこれやってきたんだからさ……んでちよつと私思っただけど、上里ちゃん色々と考えすぎなんじゃないの?」

「そ、そんなこと」

「本当に?上里ちゃん乃木ちゃんのこととなるとなにかと考えすぎちゃう傾向があるからね。あとは顔見てなんとなくそう思っただの」

「いえ……考えすぎというのは?」

「うん、乃木ちゃんと上里ちゃんはこの四国の中でももつと深くいうと大赦の中でもかなり特殊な地位にあるわけだし、色々と考えちゃうのもわかるよ。でもなんだか今日の上里ちゃんは普通の考えてる時よりもより深刻そうな顔してたから」

「はい……私はともかくとして若葉ちゃんは正直大変な立場にいます。あの西暦の戦いの最中もあの後も、若葉ちゃんはひたすら自分の普通の女の子としての人生を送らずに生きてきました。私はそれを一番近くで見ってきました」

若葉は四国を生きる人々の象徴だ。それは絶対絶命に追い込まれた人類を救ったと

いう意味もあれば、これから少なくともしばらくは訪れるであろう平和な時代としてのものだ。

若葉自身が表だって世間に顔を出すことは最近は少し少なくなってきた。ちなみにこれはひなたが大赦側に対して要求したことである。これは若葉にはあくまでプライベートな時間をもつと持つて欲しいと思つての行為だ。

ひなたとしては少しでも若葉にはで幸せな日々を送つて欲しいと切に思っている。若葉自身は今の毎日になんら不満は持つていないだろう。ひなたもそれはわかつている。

「だからこそ、それに満足して欲しくないんです」

「……………」

真鈴は黙つてひなたの話を聞く。だがその表情は決して険しいものではなく慈愛に満ちていた。

「だつて……だつて……若葉ちゃんは頑張つてました。今だつてそうです」

「うん、そだね。乃木ちゃんはすごいよ」

「今だつて大赦の要請がある時以外は自分の意思で外を出歩くことさえ自由にできないんです。でも若葉ちゃん一つの文句も言わないんです。「それが四国の人々のためになるならば」つて言うんです。優しく笑うんです」

「ちよつと前に乃木邸がさらにでかくなってたもんね」

乃木若葉という人物はこの狭い壁の中である四国中に知れ渡っており多くの尊敬をお年寄り子供問わず得ている。しかしそれは同時に言い方は悪いかもしれないが若葉自身の自由を奪うものでもあった。一種の祭り上げ状態であろう。

「私は若葉ちゃん的笑顔、大好きです。でもこんなことで笑って欲しくはありませんでした。前に私が大赦に対して若葉ちゃんに相談せずに要求を無理やり通そうとした時は怒られてしまいました。「気持ちには有難い。だが余計なお世話だ」と」

「おお：乃木ちゃんも言う時は言う子だよね」

「その時は少し喧嘩になってしまいました。……久しぶりでした。若葉ちゃんと喧嘩したのは」

「随分長い付き合いなんだから喧嘩の一つや二つぐらいちよくちよくするぐらいの方がいいとアタシは思うけどね」

「で結局私が押し切られてしまいました。最後には泣いてしまって抱きしめられました」

「さすが乃木ちゃん。イケメン」

「そのあとは二人でお風呂に入って一緒のベッドで寝ました」

「仲直り早いね」

ひなたは自分の話のコメントを返されても構わず話続ける。何か栓が抜けたかのようには言葉をつぐ。真鈴もそれにとやかく言わず自分が率直に思った言葉を返す。

「若葉ちゃんは昔から頑張り屋さんで生真面目でもどこか抜けてるところがあつて周りの人に自分が誤解されているのを裏では気にしちゃう子なんです」

「乃木ちゃん小学生の時からそんな感じだったって言つてたっけね」

「今もたまに聞かれます。「町の人々は私のことをどう思っているだろうか。私はちゃんと彼らに安心を、心の安らぎを、平和を、与えられているだろうか」と」

「18歳のセリフじゃないね」

「私が大丈夫ですよって言うのと「ひなたが言つてくれるならそうだろうな。そうだと嬉しい」なんて言つて、時折行うスピーチの原稿を考える時も色々アドバイスを求められます」

「乃木ちゃんのスピーチすごいよね。そっち側のアタシからしても引き込まれちゃうぐらいなもの」

戦いが休戦を迎えた後も時折大赦からの要請で若葉はスピーチを行う。それは香川県に限らず徳島、高知、愛媛四国四県を回って行ったこともあった。スピーチはネット配信もされるシマスコミも取材にくる。いわば行事の一つであった。

「でもきつと不安なんです。これで大丈夫だろうか。正しいだろうか？」

「正しさってのは難しいからね。そりゃ不安にもなるか」

「でも私はそんなことをよりもっと自分の将来のこと、未来のことを不安に思っ
て欲しいです。考えて欲しいです。もつとわがまを言っ
て欲しい。もつと不満を言っ
て欲しい。嫌だとたまには言っ
て欲しい。そう思うのはおか
しなことでしょうか？」

ひなたは大赦、世間、自分の気持ち、若葉の気持ち。その全てを考
えてぐちゃぐちゃになつた表情を浮かべる。

真鈴はこんなひなたの表情は見たことがなかつた。

「おかしなことじゃないよ。うん、おもしろくなんか
ない。上里ちゃんは優しいね」

「安芸さん……」

「あなたが乃木ちゃんのことをすごーすごーく大事に思っ
てるのはまあ知ってはいたけど、なんだか今日でより知れたよ。もう家族
みたいなもんだね。あなたたちは「家族……はい、そう
かもしれません。少なくともそれぐ
らい若葉ちゃんのことを大事に思っ
ている自負はあります」

「……そっか」

「え×……ちよつ！ひゃあ……」

「ごめん、ちよつと我慢してね」

真鈴はひなたを抱きしめる。優しく丁寧に。

「さつきはごめん、軽々しく考えすぎなんて言ったりして」

抱きしめたい状態のまま真鈴はひなたの耳の近くでそっと声をかける。それはその大浴場という限られたスペースの中でも今の二人ぐらい密着しなければ聞こえないほどの音量だった。

ひなたはちらつと真鈴の顔を見る。ほんのりと頬が赤くなっている。そして思った。この先輩はやっぱいい人だと。

ひなたは真鈴を抱きしめ返しながら言う。瞬間真鈴の体がピクツとした。

「気にしてませんよ安芸さん。それとありがとうございます。話を聞いてもらったらだいたい気持ちも楽になりました」

真鈴も少々の沈黙の後口を開く。

「……………全く、この胸の大きい年下は可愛いなあ」

「台無しですよ。安芸さん」

「だって羨ましいんだもん」

神世紀四年。少女たちの迷える時期は続く。

死してなお

突然だがこの家はでかい。いや、まあ私の家なのだが。

乃木家というのは私が生まれてくる前から歴史のある良家なのだと祖母などから聞かされてきた。

だから私はその乃木家の娘なのだという自覚と誇りを持って生きてきた。そしてそれはこれからも変わらない。

……………なのだが

広すぎやしないだろうか……………？

「う……………私としたことが……………のぼせてしまうとは……………」

若葉は馬鹿でかい乃木邸をさまよう幽霊かのような動きで歩いていた。周りに人がいたならさぞギョツとした顔をしていただろう。

ちなみにこの家には今基本的に若葉一人暮らしである。もちろん多くのメイドを

雇ってはいるが、あくまで住んでいるのは若葉だけである。両親は大赦のトップとして働いていて神樹への信仰心もとても暑く娘である若葉に対しても娘として見ることはできないとばかりの対応がここ数年続いている。

普段若葉は両親と会話することは普段ほとんどない。

寝巻きの着物を軽く引きずりながらゆつくりと歩く。それに気づいてずれを直す。普段はひとまとめにしている髪を解いた状態の若葉は乃木邸でしか見られないであろう。

ちなみにひなたはその姿を何度も見てはいるがそのたびに「髪を解いた若葉ちゃん！やはり…可愛いつ!!」とよく言っている。若葉自身は褒められていると思っっているのので悪い気はしていない。

で、肝心ののぼせてしまった理由だが
単純に長風呂である。

普段若葉はそこまで長風呂なわけではない。もちろん風呂に浸かること自体は大好きだが長く入るとのぼせてしまうのだ。

ちなみに幼少期の頃ひなたと二人で入っていてちよくちよくのぼせていた。（ひなたは結構長風呂）大方ひなたの長風呂に付き合おうとしての結果だろう。

そして、なぜ苦手だとわかっていいる長風呂をしてしまったのか。

考え事をしていたら時間を忘れてしまった。ただそれだけ。無論当の若葉本人にしてみたらそう簡単な話でもないのだが。

流石に自宅なので道に迷うことはないが単純に自室までが若干遠い。

水でも飲むか…

一直線に部屋まで戻ろうとも考えたが脱水症状にでもなったら大変なのでとりあえず水分補給。

キッチンを目指す。

広くて綺麗に整理されたキッチンとでかい冷蔵庫から小ペットボトルに入ったミネラルウォーターを取り出す。

「はあ……落ち着いた…」

まだ若干頭がぼーっとするが少し落ち着いた。すると

「若葉様。お夕飯の支度ができております」

「はい、すぐ行きます」

そうだった。もうそんな時間だったか。

キッチンの入り口近くにいつのまにか若いメイドが一人会釈をして状態で佇む。若葉は特に驚くことなく応じる。

メイドと若葉が二人でキッチンを出てリビングへ。そこにはさらに数名のメイドの姿があった。

流れるような動きで長机に備え付けられた椅子をメイドが引き若葉がそこに座る。

「いただきます」

神世紀が始まって以降も変わらず続けられている日本人特有の食事の挨拶。ちよつとしたことだが若葉にとっては大事なことであった。

目を閉じて手を合わせていつもどおり食事を開始する。

うん。美味しい。

一人で食事をとるには少々広すぎるであろう部屋で若葉は黙々と食事をとる。その料理の一つ一つに若葉は表情を変えながら頬張っていく。

だが若葉に対して感想や味の良し悪しを求める意見などは聞こえない。これが若葉の日常の食事風景であった。それをどこか悲しく切なく思う心も今の若葉にはなかった。

西暦の時代。「7・30天災」の発生から3年と数ヶ月。勇者の仲間とともに朝、昼、夜の食事を取っていた時は笑い声や歓談の声が止むことはなかった。

慣れというのは時折どこまでも残酷だ。

くく

『今日は庭に出て絵を描いた。桜の絵だ。もう少しすればあの綺麗な桜も散り散りになってしまおうだろう。だからそうなる前に書いておきたいと思った。だが：ここ最近鍛錬にあまり身が入っていないような気がする。少し前にひなたからあの話を聞いて以来だ。……私もまだまだ修行が足りないのだろう』

描き終える。神世紀に入ってから若葉は個人的に日記をつけるようにしている。西暦の時に書いていた勇者御記とはまた別だ。だがたまに勇者御記を読んだりもしている。

懐かしい仲間たちとの思い出を鮮明に脳裏に思い浮かべることができからだ。

「ふう………寝るか………」

ベッドに身を預けて若葉は天井を何を思うてもなく眺める。不思議と眠気はすぐに来た。

「こんにちは、若葉ちゃん」

「…友奈か…：…そうか。私は寝てしまったのか」

「うん、そうみたいだね。でも今日はちよつと早く若葉ちゃんに会えて嬉しいな！」

「ああ、私もお前とちよつと話をしたいと思っていたところだ」

ここは若葉の夢だ。夢であろう。でなければおかしい。

今若葉の隣で柔らかい笑みを浮かべているのは高嶋友奈という少女でだ。

そう……若葉とともに最後の戦いまで生き残った勇者である。

神世紀が始まって比較的すぐの頃だった。その日はなぜかはつきりと自分が今夢を見ているということがわかった。理由は特にない。ただそこが現実でないのは確かに

よくわかった。

振り返ると、そこには一人の少女がいた。友奈だった。

「ああ……………ああ……………ああ……………」

言葉が出ない。ただひたすら喉からか細い言葉にならない言葉が漏れるだけ。今日の前に広がっている光景が理解できない。この目ではつきりとその光景を捉えているはずなのにどこか虚ろな感じがして自分の目を疑う。

「久しぶりだね、若葉ちゃん。数ヶ月ぶりぐらいかな?」

友奈は前と全く変わらない。私の知っている友奈のままだった。何一つ変わらない。大切な仲間で友達だった。

「ゆ……………ゆうな……………」

「たどたどしく言葉を紡ぐ。話したいこと。言いたいこと。聞きたいこと。いくらでも考えつくはずなのに。何もまとまらない。ただその足をゆっくり、ゆっくり動かしていく。」

「おま……………おまえ……………なんで、いや、そうじゃない……………どうして……………友奈」

「ごめんね、混乱させちゃったよね」

友奈は苦笑しながら言う。

「ち、違うんだ。そうじゃない……………だっておまえは」

「……うん。ごめんね。若葉ちゃん。一緒に浴衣着てお祭り行けなくて。ごめんね」友奈が言っているのは最終決戦の少し前。若葉、ひなた、友奈の三人で出かけた時のことであろう。その時ひなたが言っていたのだ。

『まるがめ婆娑羅まつり』に浴衣着て行こうと、確かに言っていた。

忘れるはずもなかった。いや、彼女、彼女たちとの思い出で若葉が忘れたものなど何もない。今でも鮮明に思い出せる。自分の記憶と勇者御記を照らし合わせて毎日のように思い出す。

若葉の足が止まる。友奈は何もそれ以上何も言わない。ただ、ただ優しく微笑むだけ。

でも

それで十分だった。

「ううう……ううううう、うああああああああああああつ!!」

駆け出す。ただひたすらに目の前の少女に向かって。そしてすぐにたどり着く。抱きしめる。目一杯。最大限の力を込めて。もう自分の知らないところで消えて欲しくないと言っ願いを込めて。

「若葉ちゃん……」

「友奈！友奈！ゆうなあ……!!」

泣きじゃくる。今の自分の身分も。過去のことも。未来のことも。なにもかも忘れてただひたすら泣く。

「ごめんね、本当に。でも、ようやく会えたね」

友奈もそつと若葉を抱きしめ返す。若葉はさらに泣いた。もう会うことは話すことはともに笑い合うことは永遠にないと思っていた相手が今自分の目の前にいて抱きしめていて抱きしめられている。

その事実にただひたすら赤子のように泣いた。

友奈はなにも言わず若葉が泣き止むまで抱きしめ返していた。

くく

どれほど泣いていただろうか。わからない。そもそもこんなところに時間の概念があるのかどうか、だがそれもすぐ隣にいる少女に聞けばわかることだろう。

「すまない……年甲斐もなく泣いてしまった……」

「ううん、私も本当に嬉しいから。いいの。また若葉ちゃんに会えた。それだけでいい。」

それよりどうかな？痛かったりしない？」

「大丈夫だ。むしろ気持ちよくて落ち着く」

「そっか」

「ああ」

若葉は友奈に膝枕をしてもらいながら頭を撫でられていた。ちなみに頼んだのは若葉からだ。な。なお頭を撫でているのは友奈から始めたことだ。

「ひなちゃんほど気持ちよくないかもしれないけど、大丈夫？」

「ああ、確かにひなたの膝枕は天下一品だが友奈も全く負けていないぞ」

「そかな？嬉しいな」

まだ多くを話しているわけでもない。でもわかる。今自分を膝枕しながら頭を撫でてくれているのは友奈だと。人に対して必要以上に気を使うところなんか全く変わっていない。

変わらない。周りの環境が目まぐるしくかわっていく若葉の現実と違う。そのことが何より嬉しかった。

15の少女

不思議な夢を見ている。本来ならありえないことで、あつたらおかしなことで、きつとこれを他人に話したら心配されてしまうかもしれない。いや、ひなたは信じてくれるだろう。

「なあ…友奈」

「なあに？」

「色々と聞きたいことがあるんだ…聞いてもいいか？」

友奈に膝枕された状態で私は多少の迷いを込めながら言った。正直聞くのが少し怖い。友奈が無理と言ってくれればそれでもいい。少なくともまだもう少しはこうして話ができるかもしれないから。

でもこの空間のことを、この状況のことを聞いてしまったら、もう友奈に会えなくなってしまうのではないか。

大切な仲間であり友達を私は二度失ってしまうのではないか。

そんなことを考えてしまう。考えないようにしようとしているのにどうしても考えてしまう。

「うん、いいよ」

「…そうか」

体がピクツと震えたのがわかった。友奈に伝わっていないことを祈る。いや、友奈にはきつとお見通なのもかもしれない。友奈はあの頃からそうだった。抜けているように見えてことの本質をしっかりと捉えていていつでも周りを見て他人に気を使う。そんな優しい少女だったのだ。

この体勢では私から友奈の表情は見えないが彼女はきつと嫌な顔一つせずじり承してくれているのだろう。

私は恐る恐る口を開く。

「ここは…どこなんだ？現実ではないのはわかるが…」

「うん、そうだね。現実じゃない。だって私、高嶋友奈はもういなくなった人間だからね」

優しく語りかけるような言い方のはずなのにもかかわらず私の心には何か重いものが落ちてきて気がした。

「ここはね、若葉ちゃんの夢の中なんだ」

「私の…夢の中……」

なんとなく予感はしていたがいざ口に出してみると現実感がわからない。現実じゃな

いから仕方のないことかもしれないが。

「じゃあ…友奈……おまえは…わたしには……今わたしを膝枕してくれているおまえは…」

「今のわたしはね、神樹様の一部なんだ」

「神樹様の……一部……」

「これはひなたとも話していたことだった。神樹様の結界が強固になったのは、彼女を取り込んだこともあるのでは……と。」

「あの戦いで力を使い果たしてしまった後に気がついたらね、神樹様の中にいたんだ」

「実はひなたとも少し話をしたんだ。友奈はきつと死してなお神にまで…神樹様にまで力を与えるすごいやつだと」

「あ、そうだったんだ。でも全然だよ。私はあくまでほんの少しお手伝いをしただけ。頑張ってくれたのは神樹様だよ」

「それでも…だ。友奈はすごい。尊敬する」

「あ、あははくなんか照れちゃうな」

「謙遜することはない。友奈は四国の人々を最後までいや、今でも守ってくれている。…何もできない私とは違う」

だめだ。私はそんなことを言いたいんじゃない。こんな弱音を吐くことなんてして

はならない。私は四国を生きる人々の希望の象徴なんだ。

なのに、なのに。

「奴らに世界を奪われ…仲間は皆死んだ。六人の巫女を犠牲に天の神と仮初めの和平を結んだ。数年、数十年、数百年たつとえどれだけの時を経ようといつかこの世界を取り戻すため、人々が心の底から笑顔で健やかな生活を送れるように私はひなたと誓った。だけど…それはつまり私が生きている間に世界を取り戻すことはできない。」

止まらない。押し殺してきた心の弱さが。

「時間がかかるもんね。時々神樹様が教えてくれるよ。四国のこと。若葉ちゃんのこと」と

「私は四国の人々に慕われている。それは嬉しい。でも心のどこかで後ろめたさを感じてしまうんだ。私は結局自分の力で世界を取り戻せなかったのにこんな慕われていいいんだらうかと」

「若葉ちゃんはそのさー…さーく頑張ってたよ。もちろん今もだよ」

「皆もそう言ってくれる。ひなたもだ。でもそれではまるで私だけが頑張ったみたいだ。球子が杏が千景が友奈がいたから私は頑張ったこれだ。みんながいたから、みんなと一緒に頑張ってきたから今の暮らしがあるんだ。なのに………みんなまるで忘れてしまったかのようだ……」

四国を守るために戦い命を落とした四人、いや、三人の勇者の名前は一般市民にも知られている。無論良い意味でだ。

だが、世の中は確かにそこにある、形あるものに対してに意識が、記憶が、印象がいつてしまうのだ。

確かにほかの勇者様も頑張った。でもそれ以上に若葉様が頑張ってくれたのはお陰で私たちは生活できていると――

「千景に関しては大赦から名前すらも消された……ひなたが消したんだ……無論それを恨んでなどいない。仕方のないことだ。割り切っている……だけど私の心がずっと納得してくれないんだ」

止まれ。そう思う。これ以上言うな。こんな話されても友奈が困るだけだ。もっと楽しい話を、西暦の頃のみんななどの思い出の話を――

友奈は何も言わない。ただ若葉を手で優しく撫で続ける。そして若葉の溢れ出す言葉も止まらない。

「私はこちらから生き続ける。私の存在が人々の心の拠り所に少しでもなっている限り。おばあさんになっても生きていたいと思う。でもこれから先私が胸を張って初代勇者としていられるか……怖いんだ。たまたまなく怖い」

若葉は強い。肉体的にもメンタル的にもだ。それは間違いない。誰もそれを疑う人

などいやしない。

だが等の若葉本人はいつものように考える。

もう純粋に攻めてくる敵を倒していればそれでいいわけではないのだ。

敵は攻めてこない。これない。しかし戦い続いていく。神世紀を彼女自身が心身ともに一切の乱れなく生きていくことがその戦いだ。

しかしそれは、あまりにも酷な話ではないだろうか。

11歳まで普通と変わらぬごく平凡な少女として育ってきた。それからの勇者として生きた四年間も勇者という身分ではあったがそれでも日常生活で中学生という身分を逸脱することはなかった。

それが今はこれだ。

若葉はかつて友奈のことを現人神のようだと言ったが、皮肉にも今の若葉の状況がそれに近い。

この現実と離れた夢という場所だからか。あるいは友奈というもう二度と会えないと思っていた友に会えたためか。

若葉は明確に弱音を吐いていた。

友奈は少し間をおいた話し出した。声色が先ほどよりも少し強くなっていた。自分の意思を、伝えたいことを率直に語る。

「…私は若葉ちゃんみたいにみんなを導くようなことはできないしヒナちゃんみたいに組織を作り変えたり整えたらなんてできないから、頑張れとか無責任なことは言えない。私はこんな風に話を聞くことしかできない」

その言葉には彼女たちと共に現実世界で助け合うことができない悔しさが滲むようだった。

「だからね、私にできるのは自分の思いを、ありのままに伝えることだけだから。それぐらいでしか若葉ちゃんを手伝えないから。…：ううん、これはただのわがまま。私のわがままなの。でもね、それでも若葉ちゃんにはどうしても伝えたいんだ」

友奈は自分の思いを、言葉を紡ぐ。

いや

これは、そう

願いだ。

「自分だけの幸せを得て欲しい。自分だけの幸福をほかの誰かにあげる幸福じゃない。

自分だけが、得て独占できるような。誰にもあげられないような。それこそヒナちゃんにも」

若葉は「……わからなかった。

「わからない……私は今幸せだ。こうして生きて毎日を送れている。死んでしまったお前とは違う。私は生きている。生き残っている。それだけで幸せなんだ」

若葉の言葉は偽りのない本心であろう。それは今この言葉を間近で聞いている友奈が一番よくわかっている。

「お前の言っている……私だけの幸せ……それがなんなのか、わからない」

「うん。いいの。答えはきつと若葉ちゃんが自分で見つけられる。若葉ちゃんにしか見つけられない。私はそう信じてる。ごめんね。私今すごく無責任なこと言ってる」

「答えを教えてはくれないのか……？」

若葉はどこか懇願するかのように普段の彼女からは想像もできないほど心細さに満ちた声で答えを問う。若葉もおそらく友奈がどのような返答を返すかは自分でも気づかないうちに想像していたかもしれない。しかし、聞かずにはいられなかった。

「うん」

友奈は優しい口調でNOとはつきりという。優しくはあったが、それは若葉を突き放すものだった。

共に願って

友奈は言った。はつきりと。そこに遠慮や迷いはなかった。…少なくとも私にはそう思えた。

あの最終決戦の少し前私とひなたと友奈の三人で出かけたことがあった。その時に友奈は球子や杏、千景に自分のことを何も話せないまま死に別れてしまったことを後悔していると言っていた。

そして私たちに多くのことを語ってくれた。

友奈は自分のことを臆病だと言っていた。気まづくなったり、誰かと言い争うになったりするのが嫌だと言っていた。

だから自分のことを話し出せず相手の話を聞くばかり。そう、言っていた。

「友奈に……まで精神を打ちのめされるとは思わなかったな……」

ボソツと呟く。意図的に。これだけ小さければすぐ近くにいる友奈にも聞かれることはないだろうと思いつながら。

「そうだね。うん。……でぐらい率直な思いを伝えないとバチが当たっちゃうかなって思ったんだ。だから思い切って言っちゃった」

神世紀が始まってから初めてのことだった。こんな風に何か自分の意思を問われたのは。いや、ひなたはよく私を氣遣って色々聞いてくれる。

だが、友奈のこれはまたそれとは少し違う気がした。

色々と反論しようともできたかもしれない。でもしなかった。しようと思わなかった。

何故だろうか。わからない。私は私がわからない。

くく

神世紀四年。若葉今でもちよくちよくこの不思議な夢をみる。この夢に決まった周期のようなものはない。連日みるときもあれが、何日かごと、あるいは数週間に一回。

あくまで不規則なので若葉の方から寝る前に心構えをしておくことはできない。

だから若葉は毎日いつ友奈が夢に出てきても話す内容がないと嘆くことが無いように寝る前に考えるようにしている。

今回は少し間が空いた。ベッドに体を預けたらいつのまにか寝てしまっていたので

話す内容を考えてはいない。

しかし話題に事欠くことはなかった。

「結婚かあ……そつかあへえへえ」

若葉は例の案件を友奈に相談する。この夢の中でのみ会うことができるというなんとも不思議な関係はこの三年でより深まり本来なら恥ずかしさで相談することも憚られるようなことでも気兼ねなく相談できるようになっていた。

友奈がなぜか嬉しそうな声で語尾を若干伸ばしながら話す。ちなみに今日もいつものしてもらっている。(膝枕) あといつかからか耳かきも追加された。

綿棒はどこから持つてくるのだろうか……?

「全く……ひなたにも困ったもんだ。四国の将来や私の将来を案じてくれているのはわかるが……流石に結婚なんてまだ考えられないぞ」

「確かに難しい話だよね。私なんて全然そういうのわかんないや」

「私だつてそうだぞ。考えたこともなかった」

「うー……」

友奈が唸りながら考える。しかし唸りながらも耳かきをする手は緩めず優しく繊細なまま。

「はあふうう……癒される……」

思わず顔が緩む。現実世界では決して（ひなたや真鈴は除く）見せられない表情だ。

「若葉ちゃん。顔がふにやふになっちゃってるよー」

「んんっ……ここには……私と友奈しかいないんだからあ………かにする必要はないだろう……」

あまりの気持ちよさに言葉がつついっつい崩れてしまう。だがこれも致し方ないことだ。耳かき名人のひなた（若葉が命名）にも負けず劣らずの友奈の耳かきの前には逆らうことなど無駄なのだ。

「前の時みたいに誰かが入ってくることもないもんね」

「うっ、そ、そうだな」

そういえば前にひなたに耳かきしてもらっているところを友奈に見られたことがあったな。あれは恥ずかしかった……武士の恥だ……

「あと、ごめんね。やっぱ私もよくわからないや」

「いいんだ。すまない。無理難題だった。じゃあほかの話をしよう。そう
だ……」

会話は続く。時間はあくまで若葉が眠りについての間だけ。この不思議な夢空間（友奈が命名）に果たして時間の定義があるから定かではないが（友奈にもよくわからないな

いらしい) それでも終わるときは何となくわかる。

若葉はきつと自分がここに来て話している時の自分が一つでも多くの話を友奈にしたいと早口になっていっているのに気づいていないだろう。

~~~~~

「そういえば、また明日見舞いに行こうと思ってるよ」

「あ、そうなんだ。……まだ意識戻らない？」

「……ああ」

「……もう三年も経つのにね……一緒にいた女の子のためにも早く目覚めるといいね」

「そうだな。うん。本当に。……そろそろだな」

「あ、もうそんな時間かあ。若葉ちゃんとお話ししていると時間忘れちゃうな。すつごく楽しいもん」

「それは私も同じだ。よくもまあ三年間もこんな他愛もない話を飽きずに聞いてくれるもんだ」



「他愛なくなってるよ。若葉ちゃんのお話し聞けるの私すつごく楽しみにしてるんだよ。」

「じゃあ良かった。…それからな、友奈」

「なに？」

「この夢でお前と再会してからもう三年経つ。でもまだ答えは出ていない」

「そっか。うん」

「すまないな。かなり待たせてしまっている」

「平気だよ。全然平気」

「ありがとう…またな」

「うん。またね」

友奈が笑う。若葉も笑う。時間は経過し、若葉は目覚めなければいけない。でもそこに悲しさや哀愁はない。不規則で不定期でこの二人の会合には確かなことなどないものかもしれない。

でも、それでも若葉はきつとまたすぐに会えると信じて笑う。また二人で楽しく話せるところで、膝枕をしてくれると思つて、耳かきをしてくれると思つて笑う。きつとこの不思議な夢を三年にもわたつて見せてくれる神樹様に『また友奈とこうして話ができますように。いつか自分だけの幸せを友奈に報告できますように』と願つて。

友奈もまた若葉が面白かったり、不思議だったり、大変そうだったり、辛そうだったりする話を。今を確かに自分の足で生きている若葉の話をまた聞けることを信じて笑う。心の中で『また若葉ちゃんに近いうちに会えますように』と願いながら。

世界が終わる。夢という一つの世界が。現実という囲いの外の、人のことわりを超えた世界。さまざまな色とりどりの鮮やかな絵が描かれた画用紙が真っ白な状態に戻るように。でもその記憶は、そこで経た感情は決して消えることなくきつと明日の支えとなる。

今日もまた

乃木若葉は目を覚ます。

くくく

「……………ひなた」

目を覚ます。そして一言ポツンと漏らした。いや、決して朝起きたらひなたの名前を口に出して言おうとかそんな決まりがあるわけではない。

単純に目の前にいた。

すうすうと一定のリズムで小さな呼吸音が聞こえる。

眠る前との妙な違和感に気がついて起き上がる。ゆっくり、慎重にだ。

掛け布団をかぶっていた。おそらくひなたがかぶせてくれたのだろう。まあそのかぶせたであろう本人もその布団の中で眠っているわけだが。

別に珍しい話でもない。ひなたはよくというか用事でもない限りほぼ毎日この家に訪れる。そしてよく泊まっていく。

そんなわけでこうして二人同じベッドで寝ることも珍しくない。

流石に潜りこまれたのは久しぶりだが。(たまにある)

ベッドから降りて窓際のカーテンをそつと開く。

「ん……………いい目覚めだ」

朝日が程よく差し込んでくる。寝起きの体と心をその光がシャキッと覚ましてくれ

る。

でもなんだかそれとは別により深く熟睡できた気がする。いや、本当にそうなのだろう。

これも友奈のおかげかもな、そんなことを思っている

「ん……おはようございます。若葉ちゃん」

「起きたか。ひなた。ああおはよう。起こしてしまったか？」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それよりどうしたんですか？昨日は布団も被らないで寝てしまったましたけど」

「あ、ああ……気にするな。少し疲れていただけだ」

「ならいいですけど。では朝の身支度を始めましょうか」

「だな」

今日も一日が始まる。

## ある朝

「はああ〜〜何度触つても若葉ちゃんの髪は飽きませんねえ」

「そうか？普通の髪だと思っけどな」

「なにを言いますかっ！若葉ちゃんの髪はこの国の宝！そうつまり国宝です！重要歴史遺産です！」

「わたしからしたらひなたの髪の方がさらさらで艶もあつて綺麗だと思うがな」

「まあまあ、若葉ちゃんったら褒め上手なんですから♪」

ひなたが私の髪をセットしてくれている。無論普段は一人でやっているのだがこんな風にひなたが泊まつてつたときはひなたにやつてもらっている。

神世紀も今年で四年になり、私の髪も多少長くなつた。特別伸ばしているとかそういうわけではないのだが、ひなたがちよくちよく髪を弄つてくるので私の髪型はちよくちよく変化している。

最初はちよつと違和感を感じたりもするが新鮮だつたらするのですそれはそれで悪くない。……気がする。

「はい、できましたよ。どうですか？出来栄えの方は」

「ああ、バツチリだ」

くくく

「き、着替えまで手伝うことはないだろう……?」

「いえいえ!これもたまの私に対するご褒美だと思つてどうかされるがままで!いいんですよ!若葉ちゃん!」

「あーわかつた。わかつた」

不思議とひなたは泊まりに来た日やその翌日などはこんな風に甲斐甲斐しく世話を焼いてくる。

特に嫌だつたりするわけでもないのでまあ、いいのだが。

「はああ………若葉ちゃんの寝巻き………甘美な響きです……!。そしてまろやかな匂い。若葉ニウムが出ていますね。間違いありません!」(小声)

「ん?ひなたなにか言つたか?」

「んく?何でもありませんよ!若葉ちゃん!」

そして泊まりにくると大体こんなテンションだ。ひなたとはもうずっと長く連れ添つて来ている私のかけがえのない親友のだが、今でもたまにひなたの行動には『?』と思うことが時々ある。

ひなたが喜んでゐるならそれに越したことはないのだがな。

くく

「おはようございます。若葉様。ひなた様」

「はい、おはようございます」

「おはようございます」

自室をひなたと出て朝食をとる前にある場所に向かう。その道中でこの屋敷に仕えているメイドの人たちと多く出くわす。

会釈を返しながらひなたと長い廊下を歩く。

朝のさわやかな風と鳥のさえずりが心地よい。庭の方に視線を向けると色とりどりの花が咲いている。私は花や植物には詳しくないが、それでもやはりこの光景は綺麗で心落ち着くものだ。

しばらく歩くと屋敷の離れに着く。

そう。今日もまずは鍛錬からだ。

「ふっ！はっ！」

一心不乱に刀を振るう。心の乱れはなかった。友奈やひなたのおかげだろう。ひなたはなにも言わずにただ若葉を慈愛の眼差しで見つめていた。

くくく

「ふう……………」

一通りの鍛錬を終わらせる。壁掛けの時計をチラッと見てみるとちようど朝食が用意されている時間になろうとしている。

「お疲れ様です。どうぞぞ」

「ありがとうございます」

ひなたから特性のスポーツ飲料水をもらってグツとあおる。

鍛錬後はやはりこれに限る。素晴らしいものだ。

「ほら、汗を拭きますよ」

「んっ……………」



ひなたが濡れタオルを私の顔に軽く押し当てて。優しく当てているのにしつかりと汗が吸収されているのがわかる。見事は技だ。

「お背中もやりますよ」

「ああ、頼む」

~~~~~

「ほら、若葉ちゃん。あーん」

「ひ、一人で食べられるぞ……／＼／＼」

「♪」

「……………あーん」

「はい♪あーんです」

「…うん、美味しい。ひなたと食べるとより一層うまいな」

「あら、若葉ちゃんつたら。ふふ、嬉しいことを言ってくれますから。ではこれも

はい、あーん」

「あ、あーん」

~~~~~

「若葉ちゃんは歯も綺麗ですねぇ」

「そうか？普通に歯磨きをしているだけだな？」

「いえいえ、真つ白でちよこんとしてとても可愛らしいです」

「それは褒めてるのか…？」

~~~~~

自室に戻ってきた。そして至福の時間を迎えている。（膝枕アンド耳かき）

「はぁ…たまらない……………」

「若葉ちゃん。お顔がゆるゆるですよ」

「それは…ん…………仕方…あ…ない……………ひなたと友奈の耳かきはやはり素晴らしいものだ。人はこれを至福の時間というのだろう」

「大袈裟なんですから。あ、そういうえば若葉ちゃん昨夜友奈さんに会ったんじゃないですか？」

「ん…そうだぞ。ひなたはすごいな。何でそんなことまでわかるんだ？」

昨夜夢の中で友奈と会ったことは今日まだ話していないのだが、いや、今日に限らず友奈に会った後にひなたに会おうと『友奈さんと今回はどんな話をしたんですか?』と聞かれる。

ひなたはもしかして超能力者なのではないか?むしろ超能力というよりは巫女の力?つまり神託?…まさかな。神樹様とてそんなことをいちいち神託することもあるまいか。

「何となくですよ。何となく。……実は神樹様が神託で教えてくれたりして」

「ええ☒そ、そうなのか☒」

「さあ、どうでしょうか?」

「……………ひなたは時々意地悪だ」

「ふふふ」

くくく

「昨日はずっと大赦の方にいたのか?」

「はい。本当ならそのまま家に帰ればよかったですけど…どうしても若葉ちゃんの顔が見たくなってしまう。若葉ちゃん分の補充が急遽必要になってしまったのかもしれません」

「お風呂や夕飯はどうしたんだ?」

「それは大赦の方で真鈴さんと」

「真鈴とか」

若葉と真鈴は西暦の時代の頃は互いに名前はひなたを通して知っていたし、どんな人物なのかもひなたから聞いていたが、神世紀に入って初めて面識を持った。

若葉としては真鈴の気持ちのいい性格はとても好意的に思えたし、真鈴からしてもちよつと生真面目で軽くめんどくさそうだけど、いい人だなと思った。

そこから二人は友としてちよくちよく顔を合わせている。ひなたなしで二人であったりもしている。

「真鈴さんにはまた色々お手伝ってもらっています。本当に感謝です」

「手伝いというのは…例の案件のことか？」

「ええ、……でも若葉ちゃん」

「なんだ？」

「この話のことは今はそう考えないでください」

「…どうしたんだ？急に」

というのもこの案件を若葉に持ちかけたのはあくまでひなたであり（元々は大赦の考えでも会ったのだが）ひなたは若葉にふさわしい殿方を探すと軽く躍起になっていたのだ。

付けのようなものです。ごめんなさい。若葉ちゃん」

「ま、まてまてまて！」

少しまくし立てるように謝罪の言葉を並べるひなた。若葉としてはたしかに悩みの種の一つではあったが、それで謝罪されるようなことは決してない。そう思っている。

「ひなたが何か謝ることじゃない。これはあくまで私の問題なんだ。だから気にするな」

「若葉ちゃん……はい。そうしますね。わかりました」

ひなたが笑った。先ほどまで自分を責めるような表情をしていたのがなくなつて若葉も安心した。

「大赦の方には私や真鈴さんから話しておきますね。きつと真剣に、これでもかといふポートを並べればきつと大赦の偉い方々も納得してくれるはずですよ」

「すまない。私はもう18だというのに恋愛や恋に関してあまりにも無知だ。これからそういう面に関しても勉強していこうと思つている」

若葉の生真面目さはこんなところにも現れている。(そもそも恋愛や恋を勉強していくというのなんだか変な話な気もするが)

ひなたに言わせれば

『可愛いっっ！』（心の声）

となる。

くくく

「二人で行くのは久しぶりか？」

「そうですね。だいたい交代交代で行っていますし」

時と少し流れて、場所は変わり、今二人は車で移動中であつた。

目的地は大赦の運営する大型の総合病院だ。

なお車もまあでかい。

「あの入院してから三年経つんだな」

「ええ、ですがあの状態で生きていたのは正直奇跡としか言いようがありませんし……これでも運は良かったのかもしれない」

「そう……なんだよな。うん」

「お墓まいりの方もそろそろ行きましようか」

「ああ、みんなに会いに行かなきゃな。あの子にも」

車が目的地の総合病院に到着する。

桜が見えるある一室でその少年は眠っている。

心地良い病室

病院の総合窓口で面会の許可を取り目的の人物がいる病室を目指す。

エレベーターに乗って上の階を目指す。途中何人かの人に気づかれ会釈をされた。その一つ一つにこちらも会釈を返しながら進んでいく。

私もひなたも静かにゆっくり歩いていく。病院内では静かに、だ。

程なくして目的の病室にたどり着く。

その病室の前には警備員と思わしき男の人が二人。おそらく大赦が雇っているひとたちだろう。

こちらに気づくと何も言わず病室の扉を開けてくれた。小さく会釈しながら中に入る。

中はなんてことはないごく普通の病室だ。その病室のネームプレートにはこう書いてある。『古木暦様』

「桜がここからだと綺麗に見えるな」

「ええ……遅咲きなのかもしれないね」

「私の家の庭にあるのも遅咲きなんだろうか？」

「というか今年は全体的に咲くのが早かったらしいですからね。その分散してしまうのも早いのかもかもしれません」

「なるほど…それは少し悲しいな」

備え付けられた二つの小さめの椅子に座る。

「すまない。くるのが少し遅れてしまった。でも久しぶりにひなたと二人でこれだからそこは許してほしい」

目の前に横たわる少年…いや、少し日本人の平均身長と比べて小さいだけで実際どれぐらいの年齢なのかはわからないが…おそらく私やひなたと同じぐらいの歳だろうと考えている。じゃあ青年になるのだろうか？

「お見舞い品はここに置いておきましょうか」

ひなたが林檎を取り出す。おそらく後で看護婦さんが回収してくれるだろう。

「三年………経つんだな」

「…はっ」

車の中でも話したことではあるが、何度口にしてもなんだか現実味が無い。

いついかなる時。どんな天気でどんな気温、どんな季節に來ても目の前の彼は何を言わずただ眠っている。

しかし、これでもまだ良くなった方なのだ。

入院したての頃は集中治療室にしばらくこもりつきりだったし、一命をとりとめたと聞いて初めて病室を訪れた時はひどく驚いた。

体中包帯と管だらけ。人口呼吸器が妙に痛々しく見るに耐えなかった。

医者の話では完全に元どおりに治る保証はできないと言っていた。何か後遺症などが残るかもしれない。つまり目が覚めないことにはわからないと。いや、そもそも目がさめるかどうかもわからないと。

それを初めて聞いた時は複雑だった。とても重い気持ちになったし、もうだめなのではないかと一瞬思ってしまった。

でも生きていて欲しい、同時に強くそう思った。

だつて――

そうじやなきや彼女との、自分が死ぬ間際にまで少年のことを思い私に託した彼女が報われない。私は彼女に約束したのだ。必ずこの少年のことを助けると。死なせないと。この乃木の名に誓った。

しかし現実是非情だ。私に何かできることはない。せいぜいこうやって定期的に見舞いに来るぐらいしかできない。

でも、そんなことでも何もやらないよりはマシなんじゃないか、そう思っている。いや、信じている。

「だから……早く目を覚ませ。寝坊助」

「ふふ、そうですね。とびきり級の寝坊助さんです」

少年の手を握る。暖かい。もう三年……普通ではなかなか考えられないほど長い時間彼は眠り続けている。

第三者からしたら彼は死んでしまっているのではないか？そんな風に疑われても仕方ない。それほどまでに彼は微動打にしない。

しかしその手には確かな熱が宿っている。暖かな人の生の証。彼の脈をほのかに感じる。一定のリズムでゆつくりではあるが感じる。

私はここに来て彼の手を握りこの暖かさと脈を感じてようやく彼の命を感じる事ができる。

額をその握った手に軽く押し当てる。

『目を覚ましてくれ』そんな願いを込めて。

「窓開けてみましょうか？気持ちいい風が吹いていますし」

「そうだな、そうしてみよう」

ひなたが窓を開ける。ふわつとした心地よい風が病室を包む。その風に揺られて桜の花びらが宙を舞う。

「桜……」

毎年桜を見るたびにあの日のこの少年と少女の姿を思い出す。

くくく

どれほど時間が経つただろう。時計を見る。一時間ほどが経っていた。不思議だ。そんなに経っていたか。

「若葉ちゃん、申し訳ありません……私そろそろ」

「ん……ああ、大赦だな。すまない。一時間も付き合わせてしまった」

「大丈夫です。私も久しぶりに若葉ちゃんとお見舞いに来てよかったですか
ら」

「そうか。うん、そうだな」

くくく

ひなたは帰っていった。あくまで象徴として存在している私と違いひなたは大赦の巫女のまとめとして大赦内の大きな一勢力として多忙な日々を追われている。ふと私
が気付いたり思いついたことを丁寧にわかりやすくまとめて話を大赦に持ちかけたり

もしてくれている。

ひなたには頭が上がらない。いや、親友なのだしあげてもいいのだろうか、まあいいか。

それにしても本当に心地いい。日差しが程よく差し込み風の循環を促す。こんな環境のせいも彼も前に来た時よりも心地よきそうに眠っているように見えてきた。流石に目の錯覚だろうが、いや、単に私が勝手にそう思っただけなのだろうが。

目のせいにはいけない。私は至って健康体だ。(ひなたのお墨付き。若葉に言わせればどんな医者に言われるよりも説得力があるという)

ああ……………うん……………いかん

唐突に意識が遠のいてきた。だめだ、だめだ。私は今見舞いに来ているのだ。それが患者の目の前でついうっかり寝てしまうなんて……そんなことあつてはならない。

絶対にあつてはならないのだ………

「おーい。おーい」

どこからともなく声が聞こえる。どこからだろう？ いや、そんなことはどうでもいい

か。今私はとても心地よいのだ。この心地よさを手放してまでそのどこからともなく聴こえてくる声に対応することもあるまい。

「ちよつとー乃木ちゃん？」

うろうう……………

「あら、こりやなかなか深く落ちてますな」

全くどこのどいつだ。私は今こんなにも心地いいのにそれをあろうかとか妨げようとするなんて。

「つたく、お見舞いに来た方が寝ちやつてどうするの」

はへえ？なんのことだ。私は寝てなどいない。

「スウスウ寝息なんて立てちやつて。こりや上里ちゃんいたら連写嵐だったろうなあ」

ふむ、たしかに本当にそんな状況が訪れたらひなたならそうするかもな。するだろう

(確定事項)

「なーんかこんな風に寝てるの見てると乃木ちゃんってやつぱり美少女なんだなあって改めて再認識するわ」

何をいうか。私が？美少女？。どこの誰だか知らんがきつと人違いをしているのだろう。(名前呼ばれてたの気付いてない)

「ふむ、どれどれ」

むにゆ。そんな音がした気がした。

「ほほおくもちもち。こりやたまりませんなあ」

にやにをふる。はなふえ。

「んでもってツルツル。なるほどこれが穢れを知らない純粹天然培養か。お——これは役得役得。あー大赦の巫女でよかった」

謎の人物はこれでもかと若葉の肌を触りまくる。撫でてみたり軽くつねってみたりこれでもかと堪能する。

そして、1分ほど堪能していると

「ふへえ？」

そんな訳のわからない擬音とともに若葉は目を覚ました。

「あ、起きた」

ううう、私は一体何を……？変だぞ。記憶が曖昧だ。私は今日ひなたとともに病院の見舞いに来ていてしばらくしてひなたが帰っていつて……………えーつと……………あれ

？

「ありや、まだ完全に覚醒したわけではないのかな？おい、こら。寝坊助若葉ちゃん。おきんしやい。真昼間ですよー」

ふわりふわりしていると意識をなんとかかき集めて状況を分析する。

目という名のレンズがようやくやく仕事を再開する。

顔を上げてみると

真鈴がいた。

.....

え？

「やっと覚醒して真のお目覚めかな」

首をくるっと回転させ声のする方向に視線を向けると真鈴がいた（本日二度目）

「にしても、その彼はこれまでずっと眠り続けているからあんまり関係ないかも知れないけど、そろそろどいたげたら？」

どく？はて、なんのことだ？

ん…？これは…私は…寝そべっている？どこに…というか誰に？

.....

「うおつ、すごい俊敏さで起き上がったね。あとその手はいいの？」
へ？て……手？

………!!?

「パツと離れたね。パツと」

「ま、ま、真鈴……どうして……ここに…☒」

「ども、久しぶりに会いにきたよ。少年」

無視するなあ————————————————————!!!
(心の声)

病院でうるさくしてはいけません。

もう会えない

「真鈴！質問に答えろ！どうしてお前が……」

「いや、どうしても何も、普通にお見舞いに来ただけなだけけど」

「……………そうか……………そりや……………そうか」

「そうだ。何も変なことはない。真鈴も大赦の人間なのだから見舞いにぐらいい来よう。……だいが私は寝ぼけているらしい。」

「まだちよつと寝ぼけてる？だいいじよぶ？」

「あ……………ああ。大丈夫だ。うん……………もうだいが意識も覚醒した」

「そう？んじや未だに意識が覚醒しない彼を見舞おうかね」

安芸真鈴。歳は私やひなたの一つ上で大赦の巫女の一人だ。ひなたを中心に勢力を築き上げてい巫女たちの中でもひなたのサポートなどをしている人だ。西暦の頃は面識はなかった……………いや……………あるにはあったがあれはとてもそんないものではなかった。あの時の真鈴のことは今でも覚えている。ひなたに聞いていたのでイメージなど微塵も感じさせなかった。ただ悲しみにくれ、後悔し、涙を流していた。

互いに会話どころか挨拶もなかった。私もそうではあったが、とてもそんな空気では

なかった。

静かな葬儀場に彼女の泣き声がとても大きく聞こえていたたまれなくなって仕方がなかった。

だからあれを面識があるとは言えないだろう。私はそう思う。

—————

「はじめまして、ひなたからよく話は聞いています。乃木若葉です」

「おおーはじめまして。安芸真鈴ですつと。こつちも上里ちゃんからよく、そりゃーよくあなたの話を聞いてるよ。乃木ちゃん」

「そ、そうですか………あの、ひなたのやつ変なことを言ったりしていないでしょうか……？」

「んーいんやあ別に」

「ほ……それなら良かったです」

「上里ちゃんから聞かされる乃木ちゃんの話って言ったら『ああ……若葉ちゃんはかっこよくて可愛くて優しくくてウブでちよつと天然なところがあつて、普段はとても真面目でシャキツとしていてまるで隙がないようですが、二人きりの時などはこつそり悩みや不

安を相談してくれるんですよ！しかも膝枕で耳かきされながら！猫などで声で！そんな若葉ちゃん……！最高だと思いませんか……！』とかそんなもんだから安心していいよ

」

「ひなたあああああああ❏❏❏❏❏❏」

「あはは、いい反応。乃木ちゃんがあまりにも聞いてた通りの子だったからついついからかいたくなっちゃった。ごめんね？」

「はあ……なんだよかった。じゃあ今のはただだから良かっただけでしたか」

「上里ちゃんが言ってたのは本当のことなんだけどねー」

「……ええ❏」

と、まあ始めて会った時からこんな感じで私は真鈴にそれはもうからかわれまくっていた。でもこんな風に同世代の人と対等な立場で話すことができたのは本当に久しぶりでなんだか嬉しかった（ひなたは除く）

それに私は昔から同世代の人にも年下の人にも言ってしまえば年上の人にも話すときは萎縮されてしまうことが多かった。ひなたがいてくれなかったら私は友達なんてものは得られなかったかもしれない。

それを考えるとひなたには感謝してましたりない。真鈴に私のことをそれこそ恥ず

かしい話まで暴露していたことは審議案件なのだが……裏を返せばそれほどひなたも真鈴のことを信頼しているということなのかもしれない。

「あ、あとアタシのことは真鈴でいいよ。敬語もなし。堅苦しいしね」

「むう……まあそういうことなら」

「物分かりがいい子で助かるねーあーでも上里ちゃんの話聞く限り頑固だつて話だからなあ。でもそんなところも可愛いってね」

「か……からかわないでくれ……からかわないでくれ……／＼／＼」

自己紹介をすませると私たちはすぐに打ち解けた。ちなみに互いの間に入る存在である肝心のひなたいない。

なぜかというところ――

「一緒にあつてはくれないのか☒」

「はい。大赦の方で会議がありました。ですが心配はありませんよ。安芸さんは歳は一

つ上ですがそれを全く感じさせないフレンドリーさですから。それに若葉ちゃんのことともよく知っている人ですし、きつと仲良しになれますよ」

「その安芸さんがとてもいい人なのはよくお前から聞かされるからそれを疑うようなことはしないが……私が人付き合いが苦手なのはお前だつて知っているだろう……？」

「それはもちろんです」

「……………それに正確には私と安芸さんは初対面ではない。球子と杏の葬式で一度会ったことがある。あれを会ったことがあるとは言いたくないが……私にはその時の彼女のイメージが脳裏に焼き付いてしまったんだ。そのイメージを持ったまま彼女と二人きりで会ってしまったえば私は彼女に嫌な思いをさせてしまうかもしれない」

それに加えて若葉はもう会えないと思っていた友奈と再会した。しかしそれは友奈が神樹様に取り込まれたということと若葉が神樹様の力をお借りしていた勇者だったからだろう。

真鈴はあくまでただの巫女であり、何より球子と杏は大社が英霊として弔った。

真鈴が再び球子や杏と会うことはない。そんな奇跡はこの残酷な現実には訪れない。神樹様は神ではあるが、万能ではない。あくまで人類同様敗者なのだ。

若葉にはその罪悪感もあった。しかしひなたは

「そんなことはありません」

はつきりと言い切ったのだった。

「……………どうしてそこまで言い切れるんだ」

「たしかにあの時の記憶は若葉ちゃんにとつても私にとつても安芸さんにとつても辛く悲しい記憶です。ですが若葉ちゃんも安芸さんも立ち止まらず進み続けています。それが何よりの証拠じゃないですか。二人なら大丈夫だという」

「ひなた……………お前はすごいな」

いくらでも反論はできたかもしれない。言い返すことができたかもしれない。でも——不思議とひなたにそうはつきりと断言されるとそんな気がしてきてしまった。

「私は若葉ちゃんのことはもちろん安芸さんのことも詳しいですからね」

「全く…かなわないな」

たしかにひなたの言う通りだった。真鈴とはすぐに打ち解けることができた。しかし……………やはりひなたは超能力者か何かではないだろうか？それか…もしや神託…？

真鈴とはそれからいろんな話をした。最初は神世紀になってからの話をした。大赦の話。ひなたの話。お互いの身分の話。互いに日々の苦勞や楽しさを分かち合った。

そのあとは——

西暦の頃の話をした。私のかつての仲間たちの話をした。球子や杏の話をした。

「そっかあ………最後まで土居ちゃんは伊予島ちゃんのことを守ろうとしたんだね……伊予島ちゃんもそんな土居ちゃんのために後ろから逃げることもせずにか………初めて会った時はそれはもうブルブルに震えてたあの子がなあ。強くなってたんだね」

終始楽しそうに私の話を聞いていた真鈴もこの話をし始めると表情が変わった。でも、決してそれは絶望や悲しみにくれていたあの時の葬式の時の表情ではなかった。

私は球子と杏が戦死した時の話をした。進化体のバーテックスに。蠍座、スコープオインバーテックスに球子と杏が二人揃って胴体を貫かれ体中から血を流して死んでいった話をした。

この話はどうやらひなたも深く話したことはなかったらしい。そもそもひなたはその場にいなかった………いらなかったのだから無理もないだろう。

ならば私が話さなければいけない。そう決めた。勇者のリーダーとして、目の前で仲間を守れずに死なせてしまった。何もできなかった。彼女たちの最後の言葉を聞くことすらできなかった。その事実を包み隠さず話した。

ひなたはそれで私が恨まれたり嫌われたりするのではないと言っていた。それを疑うわけではない。

でも覚悟はしていた。何を言われてもいい覚悟は。

「手を繋いで見つめ合いながら……………うん……………うん。最後の最後まで互いを思いやっていたんだね……………すごいなあ本当に大好きだったんだなあ。……………全くなんて死んぢやうんだらうなあ……………また会おうねって言ったのに……………約束破りやがって……………」

真鈴の声が次第に震えていく。真鈴は顔を伏せる。若葉に見られないようにするためか、あるいは無意識なのか。

「実際過ごした時間なんてさ……………全然少なかったのにさ……………どうして、どうしてこんなに悲しくなっちゃやうんだらうなあ、あの時もう散々泣いて涙なんて全部使い尽くしたと思ったのに、おかしいなあ」

次第に言葉の一つ一つが涙声になっていく。それを必死に耐えながら言葉を紡いでいるのが若葉にも痛いほどわかった。

「あの子たちの写真どれも笑顔が眩しいものばかりでね、二人セットで写ってるのばつかなの。でもその中にもほかの勇者の子達、高嶋ちゃんとか郡ちゃんとかと一緒に楽しそうに写ってるのみてね、すつごく幸せな気持ちになったんだ。でもね、同時にすつごい嫉妬した。私も勇者だったら、あるいは上里ちゃんみたいに勇者専属の巫女だったらこんな風はこの輪の中に入れたのかなって思うとね悲しい気分になっちゃってたんだ」

「でもあの子たちよく手紙送ってくれたんだ。土居ちゃんも伊予島ちゃんも全然性格は違うのに書いてることはなんだか似ててね。文面とか字の特徴とかそういうのは全然違うのに……不思議でしょ?」

それは若葉も初耳なことだった。球子と杏、真鈴の交流は決して途絶えてなどいなかった。細々と対面して会うことはできなくともその友情は続いていた。

「毎日手紙届いてないか楽しみにしてたんだ。来てなかったらなんとなく落ち込んで、来てたら心の中でそれはもう喜んで」

「でも、葬式のあと次の日になってもう二度とあの子たちから手紙が来ないと思ったら散々泣いたはずなのにまた悲しくなってきたりまた泣いちゃった」

「でもね来たんだ。手紙」

「えっ……」

「うん、私も乃木ちゃんみたいな反応してたよ。大社の人を持つて来てくれたの。上里ちゃんが二人の自室を整理していた時に見つけたんだって」

「それですぐ読んだ。何も考えずにすぐ読んだ」

「内容はね、お花見の誘いだっただ」

その瞬間、いや真鈴の話を書き始めてからずっとではあるがそれ以上に重く苦しいものが若葉の胸を突き刺した。

つい表情を苦くする。拳に勝手に力が入る。

言っていた。球子と杏が言い出したことだった。丸亀城にある丸亀公園で桜の花見をしよう。祝賀会も兼ねてやろうと。

忘れるはずがーなかつた。

「二人ともね、揃って『一緒にお花見行きませんか?』『一緒にお花見するぞ!このまま花が散ったらタマらん!』ってね書いてあつたんだ」

若葉が悲壮な表情をより強めると同時に

真鈴の瞳から雫が一粒垂れて彼女の膝を濡らした。

明日への希望

場所は杏の自室。杏と球子は二人で定期的に書いている真鈴への手紙を書いていた。

「なあなあ杏〜」

「なに？タマっち先輩」

「今日さ、みんなでお花見するって話でたる？」

「うん、今ちょうど満開だもんね」

「それでな、どうせならさ…真鈴も誘いたいなーって」

「真鈴さんも？」

「うん、ここ最近会えてないし久しぶりに顔見たいなーってな」

「でも、私たちはともかく大社の巫女である真鈴さんはどうだろう……この間ひなたさんに新しい神託が降ったばかりだし忙しいんじゃないかな？」

「あー……………」

「あ、でもすぐいい考えだと思うよ。私も久しぶりに真鈴さんに空きたいし」

「おお！だよなだよな！会いたいよな！」

「うん、みんなにも真鈴さんのことちゃんと紹介したいしね」

「だな。たしかにみんな知ってはいるけど会ったことないしな。あ、ひなたはちよくちよく会ってるか」

「ひなたさんも教えてくれるもんね。真鈴さんのこと」

「にしても大社の巫女ってのは大変なんだな。自由に外出もできないんだろ？」

「それは私たちも同じだけど……たしかに勇者と巫女だと自由度も違うんだろうね」

「前にあつた時も言ってたもんな。勇者と一緒に生活できるひなたが羨ましいって」

「ひなたさんは巫女の中でも特に優秀らしいからね。若葉さんとも幼馴染だし」

「なーんかなあ」

「もつと真鈴さんに会いたい？」

「そんな風に聞かれると……ちよつと恥ずかしいけどな」

「そんなことないよ。私も同じ気持ちだもん。……私たちを導いてくれた恩人だもんね」

「あの日も真鈴が居なかつたらタマたち危なかつたかもしれないしなあー」

「タマつち先輩なら大丈夫だつたと思うよ？でも私は本当に危なかつたと思う。あの時

真鈴さんから私が近くにいることをタマつち先輩が聞かされてなかつたら……」

「……そう気にすんな！杏だつてもう立派に戦ってるだら？だつたらいいんだよ」

「タマつち先輩……うん……ありがとう」

「あ、こういうのはどうだ？この際タマたちから大社の方に提案してみるってのは！」

「提案つて……どんな提案？」

「真鈴を勇者専属の巫女にしてくれって頼んでみるんだよ！どうだ？名案だと思わないか？」

「……タマつち先輩は優しいね。うん。本当に優しい」

「へえ？な……なんだよいきなり」

「今の提案、真鈴さんのことを思つて言つてるんでしょ？」

「う……ま、まあそうだな。……うん、まあ」

「あ、照れたタマつち先輩可愛い」

「か、からかうなよ！全く……全く杏はまだまだ子供だなあ」

「えーそんなこと言つたつて歳は同じだしなあ」

「それでも学年は球の方が上だからいいんだ！先輩なんだぞ」

「でもタマつち先輩が留年してくれたら学年も同じになれるよ」

「おおーその手があったか！つて違う！なにちやつかりタマのこと留年させてるんだ！いくらタマでも留年なんてしないぞ！それにだ……ふふ、タマは知ってるんだぞ。中学は義務教育だから留年なんてしないつてことはなあ！はっはあー！」

「これはこれで結構いい提案だと思つたけどなあ。でもタマつち先輩。それは名案かもしれないね」

「なんか適当に流された感がすごいけど…ま、いつか。よし、そうと決まったら早速」
「じゃあ私も書こうかな。どうせならお花見の方も外出がダメそうなら私たちから大社に言ってみるのはどう？勇者のメンタルケアのためとか言ってみて」

「おおー杏ーお前もなかなか悪よのお〜」

「えへへ」

「だがいい提案だ。じゃあそれも書いてつと…」

「私書けたよ」

「おう！タマもだ。ふふつ…真鈴のやつこれを見たら喜ぶぞ〜」

「お花見楽しみだね」

「だな。そうだ、明日みんなにも提案しないか？」

「そうだね、みんなどんな反応するかな？」

「あー若葉だったら『いい息抜きになるだろうし、悪くないかもな』

って言いそうだ」

「それ若葉さんのマネ？」

「お、正解だ。じゃあこれは誰でしょう『ええ、いいですね。丸亀城にいてお花見をしないというのはもったいないです』」

「ひなたさん？」

「じゃあじゃあ〜『楽しそうだね！やろう、やろう！』」

「友奈さん？」

「『でも…いつバーテックスが来るかわからない状況なのよ…そんなことしていて…いいのかしら…？』」

「千景さん？」

「全問正解だ！ちなみに千景は何だかんだ友奈に言われて『高嶋さんが言うなら…』ってなるな。タマにはわかる」

「というかどれも言いそうではあるけど、タマっち先輩のモノマネだいぶ似てないね」
「うーん。まだまだ修行が足りんか」

「じゃあまた修行したら見せてね？」

「おう、なんならお花見の宴会芸でやるのもいいな」

「それ面白そう。じゃあ私はお弁当作ろうかな」

「杏の料理…ぐふふ。今から楽しみだ」

「そんなに自信ないけど…でも頑張って作るよ…うん…みんなでお花見…早くしたいね…」

「眠くなってきたか？」

「…うん…結構…」

「じゃあ寝るか！タマも眠そうな杏見てたらなんだかんだ眠くなってきたぞ！」
「寝ることをそんなに元気に言うのはタマっち先輩ぐらいだよ」

二人は揃ってベッドに入ってからなんだかんだ寝ずにずっと話をしていた。私たちは本物の姉妹みたいだと。いっそ姉妹になってしまうかと。姉妹だったら球子が姉で杏が妹。世界一の仲よし姉妹だと。

でも

もしそこに真鈴がいるとしたら

「真鈴さんは長女じゃないかな？」

「あーたしかにそんな感じあるな。だがしかし！長女の座は譲らんぞ！」

「じゃあ次女かな。どっちにしても私は妹かな？」

「杏はベストオブ妹だからな」

「そこはシスターって言おうよ」

夜は更けていく。話は移りこれからのバーテックスとの戦いの話。先のひなたの新たな神託で『予期せぬ事態が起こるだろうと』そんな神託が伝えられた。

そのせいか千景はいつも以上にピリピリしていて若葉も少し気を張っているようだった。

だったらーっつぎの戦いが終わったらやろうと。

二人はそう話した。

ただし

その手紙は彼女たちの生前に出されることはなく、真鈴の手元には、全てが終わってしまった後に届いたのだった。

ただしそれが運んできたのは、決して悪いものではなかった筈だ。

「嬉しかったな。お花見の誘いはもちろん、二人がそんな提案してくれるなんて…思ってもみなかったから」

「二人が…そんなことを…」

思わず若葉も言葉を漏らした。まさか球子と杏が大社に真鈴を勇者専属巫女になれるようにお願いしようとしていたなんて、思ってもみなかった。

二人の真鈴という恩人を思いやる気持ちと同時にどうしようもなく遣る瀬無い気持ちが出てきた。それでもかかと拳を握る。いや、拳は先程からずっと握りっぱなしだ。

涙は出ない。悲しくないはずがない。

ただ——彼女の、真鈴の隣で泣くことはしたくなかった。自分はいくまで彼女の話を書くことに徹しなければならぬ。

悲壮なまでに若葉はそう感じていた。

「普通に考えてみたらバカな話だよ。私は特別巫女として優秀だったわけでもないし、上里ちゃんみたいに勇者と長く連れ添ってきたわけでもない」

ひなたの勇者専属巫女という扱いは巫女という特殊な立場の中でも特に特殊であり、申請すればなれるなんてものではない。

いくら勇者である二人からの願いだとしてもそんなことはそうそう許されない。

わかっている。その大社の巫女である自分が一番よくわかっている。

ただ

人間というのはどうにも不思議で、頭ではわかっているけど心はそれを受け入れてくれない。あるいはそれを許してはくれないものなのだ。

別にそれはおかしいことではなく人間として当たり前のことであり、同時に人間がほかの動物と比べて極めて異質な部分であろう。

「でもそんなの関係なかったんだ。ただ嬉しかった。二人はそんなにアタシのことを思ってくれてるんだ。もつと私と居たいと思ってくれてるんだ。ってね」

「球子……………杏……………」

若葉の口から二人の名が溢れる。

「私もそう思った。ずっと思ってたんだらうね。でもそれを頭の中でできるわけがないって自己解決して満足した気でした。でもあの子たちからの手紙読んでああ、アタシはずっと言いたかったんだらうなって。あの子たちから言われる前にもつと前に会った時から……………二人ともつと一緒にいたいって。同じ時を過ごしたいって」

それは後悔であり、その後悔は悲しみを生んだ。

でもそれは、決して絶望ではなかった。

「ありがとね、乃木ちゃん。あの子たちのこと、私の知らないあの子たちのことをたくさん教えてくれて。改めて自分の思いを再認識できたよ。……………ありがと」

真鈴は微笑む。もう涙はなかった。流れ出た涙は一粒だけであった。

その顔には——過去ではない、未来が映し出されていた。

明日への希望で満ちていた。

春の芽吹きと……

「にしても相変わらずスヤスヤ眠っちゃってまあまあ」

「ああ、こうやってみるととても三年もの間眠り続けているようには見えないな」

真鈴と若葉は揃って目の前のベッドに横たわるやせ細った青年を見つめる。

お世辞にも身長は大きいとは言えない。だいたい日本人男性の平均身長が170ちよつとぐらいなのに対してこの少年はせいぜい165ちよつとぐらいしかない。

「桜綺麗だね」

「この病室からだ」と庭の桜がよく見えるな。うん、綺麗だ」

桜をみていると綺麗だと思ふのと同時にまたこうして新しい春を迎えることができたとことへの喜びを感じる。ひなたや真鈴とまたお花見ができる。

「でも乃木ちゃんの家にもあんぐらい立派な桜あるし見慣れてるもんなんじゃないの？」

「自分の家の庭にあるものとそうでないものでは大きな違いがあるんだ。なんとなくだけどな」

「へえ〜〜〜というか上里ちゃんと話しした？」

「話というのは……例のあの件か……？」

「こそ」

真鈴は話をよくぶっ込んでくる。そこに遠慮やら配慮やらは見受けられない。……いや、私のことやひなたのことをよく考えてくれているのはまあわかるのだが。（普段のからかい癖で帳消し）

「それだつたらひなたから言われた。一度忘れてくれと」

「そか、まあいいんじゃない？ うん、そんなもんだよ」

「そんなもん……そんなもんか」

「特にその点のことには一切合切耐性というか経験というかそんなんが皆無の乃木ちゃんなじじゃあ難しいってもんよ」

真鈴がニヤツと嫌な笑いをする。くっ！真鈴め！また私をからかう気だな☒

「そ、そうは言うがな……私だつてこれでももういい歳なんだ。これでも前と比べたら少しは成長もしている………答だ」

「最後すつごい小声だったけど」

地獄耳め！ある意味ひなた以上に厄介なところがある気がするぞ。

「ふーん。成長ねえ？」

「なんだ……疑つてるのか？」

「うん」

「即答だな…」

私はそこまでなのか……………

「じゃあ聞くけど乃木ちゃんキスしたことある？」

「へえ？き…キス…………？」

「そんな間抜けな声の乃木ちゃんがみれるのはこの話題だけだねえ。いやしたことないのは知ってるから言わなくてもいいよ」

「う……………ひ…ひなたとならあるぞ！」

どうだー！これぞまさに起死回生の一手！

「いやあ上里ちゃんは家族粹みたいなもんだからノーカンだよ」

「な☒だ…ダメなのか…」

「それにほっぺとかそんなんでしょ？」

「ほっぺでもキスはキスだろう☒」

私は思わず立ち上がって言う。その反動で座っていた椅子が高めの音を立てて倒れる。

「こーら、病院では静かに」

「う…すまん……………でも今のは真鈴が悪いと思うぞ…」

「ごめん、ごめん。悪かったからそういじけないですよ？ね？ほらお団子でも食べて」

そう言って真鈴は自らが買ってきた三食団子を手渡してくる。

「ふん…私はそんな団子ごときには釣られないぞ」

「じゃあこの新作のうどん出汁味の団子もいららないかな」

なっ☒うどん出汁…味………！だと………！

「貰っておこう」

「うん、貰うというか今明らかに奪っていったよね。目にも留まらぬ速さで。というか

三食団子の方も奪っていったよね」

「これは……食べたことのない味ではあるが、悪くないな……！」

「聞いてないねえ。ま、いいけど。………あんまり美味しくない………」

—————

「んじゃ、私はそろそろ大赦の方に戻らないといけないから帰るけど……乃木ちゃんはどうする？」

それから真鈴と雑談を交わしながら時間を過ごしていると思っていたよりも時間が過ぎていた。

「そうだな……これ以上長居しても仕方がないし私も帰ることにする」

「そか。んじゃあ今日もお別れだ。青年。いや古木君か」

真鈴が青年の方を見て別れの挨拶を告げる。

「またくる。……またな。古木さん」

かろうじてわかっているのはそれだけ。あの日あの時あの瞬間、残り火が消えてなくなるほんの少しの間に伝えられた彼の情報はその名だけ。

いや

違うか。

これは伝えられたことではないし、もちろんのこと彼の口から聞いたわけではない。

でもこの四国に彼がこんな風にボロボロになり三年もの間目を覚まさない状態になりながらも、それでも生きていたのは

その身に宿る勇者の力に他ならないのだろう。

『ごめんね……………ごめんね』

『ありがと……………うん……………だいすき』

違う

違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う
う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う

こんな、こんな、こんな。俺は何のために、俺は…俺は何で。

そんな言葉を聞くために、俺はお前たちと……生きてきたわけじゃない。

俺は

俺はお前らが

お前らがいたから、いてくれたから

なのに

何も、何も残らない。

意味はなく。希望はなく。夢はない。

なのになぜ————

俺は――――

どうして――――

――――

「乃木ちゃん」

「ん、なんだ？」

場所は乃木邸。の食堂。夕飯を取っているのは家主である若葉とその友人である真鈴。

「うんまい」

「そうか、うん。うんまいな」

「お、乃木ちゃん乗ってくるね」

「伊達に長めの付き合いじゃないからな」

「上里ちゃんには負けるけどね」

「ひなたは例外だ」

「ですよね、あ、これもうんまい」

〃〃〃

夕飯後

「さて、では本日の大本命と行きますか」

「大本命って…普通にお風呂に入るだけだろ？」

「ははっ、わかっていないな。乃木ちゃん」

「？」

「ま、いいからいいから。そそスパッと服を脱いでお風呂に入りましょー」

「わかった！わかったから押すなって！」

乃木邸。大浴場。

「乃木ちゃんの髪はツヤツヤですべすべだねえ。触りがいがあるよ」

「私はどうだか知らないが、それをいうなら真鈴だつてそうだろう？」

「おお嬉しいことを言ってくれるじゃない。ごしごし〜」

「わっ〜く、くすぐりたい……………! ややめ…!」

「あ、なんかエロい。乃木ちゃんエツチだなあ〜」

「エツチじゃない……………ここ……………これは……………不可抗力で……………ああああ〜〜どつどこ触って、こら。やめ…!」

「あー目覚めそう」

何にとは言わないが。

「何で……………お風呂に入っているだけでこんなに疲れるんだ……………お風呂というのは本来疲れを取る場所のはず…」

「あはっは。すまんの我慢できんかった」

「いいいいのかっ〜『攻撃されたら報復を』それが乃木の流儀であり教えだぞ!」

「ふむ、つまり?」

「私もやり返すということだ!」

「お、いいね〜いいね〜オツケーバツチカモン。ハイ!」

「え、ほ……………本気で言ってるのか……………?」

「本気かどうかというか、私は普通に乃木ちゃんのこと好きだから別に何をどうこうされたとしてもそれはそれで責任取ってもらうだけだし」

「責任って…一体何を言ってる…」

「さてそろそろ湯船に浸かろうかね」

「…そうだな」

若葉は真鈴とのやりとりをかれこれ三年続けて学んでいる。彼女には敵わないと。(ひなたに敵わないというのはもっと小さい頃から学んでいる)

まあこんな風に接してくれる友人が二人もいるのは本当に有難いことなのだがな。

「あ~~~~~」

二人で揃って湯船に浸かる。乃木邸の浴槽は若葉と真鈴が二人揃って浸かっている。もまだ場所が余る程度には広い。まあ広い。

「乃木ちゃん、親父くさいぞ」

「真鈴こそ」

お湯に浸かっているせいか二人の語尾が変に伸びる。

そもそも日本のようにこうして浴槽がある程度の大きさでじっくり湯に浸かるといふのは世界にはなかなか見られない風習なのだ。

最も今世界というのはこの日本の四国のみなのだ。

しかし日本人は古来より浴槽の湯に浸かることを至福の時として過ごしてきた。要するにお風呂最高。ついでに檜風呂はもつと最高ということ。

「ところでさー」

「ん〜なんだあ〜」

「乃木ちゃん育ったー?」

「何がだあ〜?」

「おっばい〜」

「対して変わっていな……………いこともないかもしれないこともなくないかもしれない
い」

「どっちかよくわかんないねえー」

「とうかだな。真鈴よ」

「んー?」

「ここで若葉が唐突に真剣な顔をしてトロンとした顔をしている真鈴の目を見つめて
話す。」

「胸のサイズってそんなに大事なもの……………なんだろうか…?」

「乃木ちゃん……………それはね…」

「あ、ああ」

「分らん」

今宵も夜は更けていく。二人の少女を湯気に包んで。

夜更け

乃木邸のとある大浴場

第三者が見ればこの光景はそれはそれは魅惑の光景なのだろう。

無論この二人は100人に聞いたら100人が美少女だというであろう二人だ。

しかも一人は西暦勇者唯一の生き残りといわれている乃木若葉と

巫女のトツプに立つ西暦勇者の導き手上里ひなたをサポートし一部の界限からは巫女界の影のトツプと言われている安芸真鈴

しかも神世紀が始まってから四年たち西暦の頃まだあどけなさが残っていた少女たちも成長した。あくまでまだ未成年ではあるがそれ故に一年一年で得ていくものもそれはそれは多く、さまざまな経験と知識を兼ね備えた女子トーク。

それは実に魅惑的で魅力的なものなのだろう。

「分からん」

「分からん…のか…」

「いやね、この話をしちゃうと長くなっちゃいそうであれだけど、本当に難しい話なんだよ？ 乃木ちゃん」

変に妙な顔つきで語る真鈴。若葉は訝しむように首をひねった。

「そうなのか？ こういうのは…なんだ…大きい方がやはりいいんじゃないのか…？」
若葉が自分の胸を下目に見ながらいう。

「うーん、たしかに基本的にはそうなのかもしれないね。この四国全部の男の人の統計を取ったらおそらく大多数が巨乳派だよ。たぶん」

「なのに分からないのか？」

「乃木ちゃん。私はあくまで大多数はと言ったんだよ。全員じゃない。全員じゃないということとは例外やらなんやらのそうじゃないひとたちもいるってことだよ」

指を一本立てて得意げに語る真鈴。得意げに語るには少々、いやかなりアホっぽい会話にもかかわらず若葉はどこか真剣に聞いているようだった。

『ああ…こんなバカみたいな話題にも真剣になつて話を聞いちゃう若葉ちゃん！ 可愛いですねぇ!!』なんて幻聴が聞こえてきてもおかしくない。

「つまり……………貧乳派ということだよ」

「……………そんな人本当にいるのか……………」

「いるいる。むしろここ最近はふえてるんじゃないかな。貧乳好き」

「にわかには信じがたいな」

若葉は頑固な態度で答える。というのも西暦の時代。懐かしの丸亀城でよく見られた出来事に球子がひなたの胸の話に興奮気味でよくしていたのを覚えている。

球子は自分の胸とひなたの胸を比べて自分を卑下しひなたの胸を心底羨ましがっていた。

球子ほどではないにせよ杏や友奈、あまつさえ千景ですらチラチラとひなたの胸を見て

『……………ねえ、高嶋さん……………』

『どしたの、ぐんちゃん？』

『その……………ね…上里さんの……………胸ってそんなに良いかしら…』

『そりやそうだよ！やっぱり女の子だったら大きいには憧れを抱いちゃうよ！』

『そ、そう……………そうよね……………うん…良いの……………ありがとうね。高嶋さん』

『?うん!』

『くっ……………!』

なんてこともあった。ちなみにその話を私から千景にも振ってみた。より親睦を深めて同じ勇者仲間として連携を深めていくためにもこういううちよつとした日常会話が大切だと考えたからだ。

なお『デリカシーのない人……信じられないわ』そう言っただけで怒られてしまった。何故だ。

まあそれはいいとして、そんなわけで私は今真鈴がしている話を安易に信じることはできないし頷くこともできない。

そうだ、球子私の胸を見て『ふむ、高尾山と言ったところか』なんて言ったこともあった。あれは明らかに私をバカにしていた。というか球子にだけは言われたくなかったぞ！

「まあアタシ自身も特別大きなわけでもないから、というかせいぜい中くらいだからね」「でも真鈴は少なくとも私よりは大きいじゃないか……」

「でも乃木ちゃんはもともと身長高めだし運動とかはよくできるけど細身だし、貧乳がなおかつそれを引き立ててる気もするけどね」

「身長は成長はもうほとんど止まってしまったがな。……………ふむ」

若葉は腕を組んで考える姿勢をとる。

「それにいろんな服を可愛く着こなせるし」

「ほうほう」

「んーとあとは……………ま、とにかく要はその人の好みってことだよ」

「なんだか投げやりじゃないか…?」

「だってそうでもないよこの話題永久に終わらない戦争案件でしょ。到底決着なんてつきっこないって。というか乃木ちゃん、そんなこと気にする子だったっけ?」

「いや、最近ひなたの胸がまた少し成長したらしくてな……………ふと思ってしまった」

「あらー」

ちなみに等の本人であるひなたに言わせてみれば『素晴らしいことも多くありませんよ? 着れる服が限られちゃいますし、下着だって…あと肩も凝りやすいですし……………何より体重が……………』らしい。なんというか、同じ話題でも立ち位置一つ違うだけでこんなにも違ってくるものなのか。

「というか……………いい、今になって思ったが……………私はとても破廉恥な話をしてしまったのではないか☒」

「上里ちゃん風に言うなら……………破廉恥若葉ちゃんかな」

「やめてくれ! 今までひなたから多くてなにに若葉ちゃんと言われてきたが圧倒的にそれが一番嫌だ!」

「えーでもでもこの話を振ってきたのはあくまで乃木ちゃんだしー」

「忘れろ~~~~~!!!」

結局まだまだ若葉はどこか抜けてるウブなポンコツ若葉ちゃんでしたとさ。

「泊まっていかないのか？」

「嬉しいお誘いだけど、今日は帰るよ。全部世話になるのも悪いしね。もう晩御飯とお風呂もらっちゃったあとだけど」

にはは、と真鈴が笑う。若葉はこの真鈴の笑顔が好きだった。ひなたの慈愛のこもった笑みとはまた違う。言葉で表現するのは難しいが、なんだかこちらにも自然と笑顔になってしまう。そんな気がしていた。

「そうか。それじゃあ気をつけてな」

「うん、まあこちらに控えている大赦の方々に安心安全な快適ドライブで送って行って

もらうよ」

「ああ、じゃあな」

「ほい、おやすみ」

真鈴を乗せた車は躊躇なく走り去っていった。どこかに一抹の悲しさを若葉は自分でも知らないうちに瞬間感じていたが、車の中で笑顔で手を振る真鈴を見て手を振り返した。

「さて、寝るか」

明日も早い。

若葉は今でもあの丸亀城の一部を改築した教室にひなたとともに通っている。それは高校を卒業しても変わらず大学生という身分になったとしても変わることはない。今は春休みで学校はないがそれでもなるべく朝早く起きて朝鍛錬をする時間をとるようになってきているのだ。

自室で日記を書いてベッドに入る。その状態で軽く今日の総括的なことを脳内で行う。

こんなことがあった。あんなことがあった。一日一日の平和のありがたみを忘れていたために毎日町の人が笑顔でいられることの喜びを噛みしめるように、ひなたや真鈴と面白おかしく話したりお風呂に入ったたりしたことを思い出してちよつと笑ったり。

毎日毎日同じことばかりが人生ではない。どんな些細なことでも自分や周りに変化はある。

いや、少なくともこの三年変わらないものがあつた。

「古木暦……………」

その名をつぶやく。もしかしたらいや、きつと自分と同じ立場であろう青年の名を。

彼のことを心のどこかで考えながら目を瞑る。

そして明日もまたいい日でありますようにと願いながら。

—————

深夜

明日が来る前にそれは起こった。

起こったといってもなんて事は無い。普通に携帯電話が鳴っただけ。

しかし時間が時間だった。普段にはありえない違和感に目を覚まして、それが携帯の着信音だとわかりなにかと思いつきながら見てみると

ひなたからだった。

こんな時間に何かあったのかと少々不安になる。

しかし躊躇していても仕方がないのですぐに通話ボタンを押す。

結果だけいうと特にひなたに何か起こったとかそんな事はなかった。

ただひなたは普段の落ち着きのある彼女らしくない口調で言った。

彼が目を覚ましたと。

ある少年がある少女を俗に言うお姫様抱っこしながら歩いている。そこは田舎道だった。川があり、森がある。どこか遠くには鳥のさえずり声が聞こえてくる。とてものどかでいいところだった。

唯一その風景に違和感があるとすればそれはその少年と少女であろう。

「ねえねえ暦」

「……………」

「今日の晩御飯何？」

「……………カレー」

「やた！ 暦の作ったカレー大好き。てかあんたの作ったものはみんな美味しいから好きだけどね！」

少女は元気にはつらつと話す。対して暦と呼ばれた少年の反応はひどく淡白なものだった。

無理もない。

誰だつて傷だらけであちこちから血が出ている少女が元気そうに笑顔で話していたらそんな反応にもなるであろう。

少年は一呼吸置いて言う。

「無理すんな。バカ」

唐突な言葉。会話のバトンがうまく回っていない。

キラーパスにもほどがあるう。周りに人がいたならそう思うだろう。

だが幸い、違う。ここら一帯にはその少年と少女。あともう一人の少女がいるだけ。

だからここはあくまで今現在だけ二人だけの世界といつても過言ではなかった。他者に見られることのないそんな空間。

「……………」

先ほどまではつらつと話していた少女の口が止まる。

「怖いよ……………」

そして再び話し出す。奥底にあるものを引っ張り出すかのように絞り出すかのように。
に。

「痛いよ……………」

少女が少年の服を指で強く掴む。どこかに行つてしまふのを防ぐがごとくに。

「苦しいよ……………」

少女が弱音をこぼす。一つまた一つと。

少女の体が震えて唇が震えて顔から涙が溢れでてくる。止まることなくこれでもかと。
と。

そしてその少女のすすり泣く声が少年に聞こえてくる。

少女が少年に顔をうずめてなを、話す。

少年はなおも何も言わない。嫌ともやめろとも。

「唇……………あたし守れないよ……………唇を桜を……………どうしよう。どうすれば、
わかんない……………わかんないよ……………」

涙を流し声を震わせながら途切れ途切れに話す。

「嫌だ………死にたくない！二人を残して死にたくないっ……！」

そう言うすとすすり泣く声が泣き声に変わった。

少年の胸の中で少女が泣く。苦しいと。辛いと。痛いと。怖いと。不安だと。嫌だと。助けてと。あたしを、あたしたちを誰か救ってくれと。

少年の胸の中で泣き続ける。

ただ

その少年には

少女を抱きしめる力を強くすることしかできなかった。

誰の名を

一人の少女が——勇者である千寺春という少女が眠っている。

スヤスヤとテンポよく寝息をたてながら深く眠っている。

しかし、その目元には泣き腫らした痕がありその様子から少女が泣き疲れて眠ってしまったことが容易に想像できる。

そして——その少女の近くで見守るように長机に備え付けられた椅子に座っている巫女の少女千字桜

さらに近くの台所で料理をしている一般人の少年古木暦が居た。

「ごめんね、暦さん。疲れてるだろうに」

「別に。気にすんな。ほら、お前も何も食べてないんだろ？」

「えへへ、実はお腹ペコペコ」

少年は作り途中だったカレーを仕上げて少女の目の前に置く。

「暦さんは食べないの？」

「いいから、ほらもう夜も遅くなってきたんだからさっさと食べちまえ」

「ん——わかった！速攻で食べちゃう！」

「だがよく噛んで焦らず食べ。飯はしっかり味わって食べてこそだ」

「いやどつちやねん！」

「強いて言えば後者を大事に」

「わかつた〜いただきます」

少女は手を合わせて食事を始める。対して少年は何も食べず何もせずただ少女が食事をする様子をぼーっと見つめていた。

「食べないの？」

ただ見つめているだけの少年に疑問を持ったのか少女が問う。

「俺はこうやって桜がそれはそれはうまそうに飯食べてくれるのを見ることが楽しいからいいよ」

「あれ？もしかしてわたし顔にまたでてる？」

「おう、そりやもう」

「だ〜最近顔に出ないようにしようとしたのになあー」

「何でだよ」

「だってポーカーフエイズ？って言うんだっけ。それができた方が便利かなと思って。お姉ちゃんに色々イタズラとかできるかもだし」

「春は単純なやつだからな。ひっかかるだろうけどそもそもお前が、というかお前ら姉

妹揃ってポーカーフェイスとか無理だから諦めろ」

「んー曆さんが言うならそうする。てことで食事再開。もぐもぐ」

口いっばいに頬張って再び美味しそうに逐一顔に出しながら食べていく少女を見て今度は少年の顔に笑顔が浮かんだ。

そして横目に深く眠っている少女を見る。家に運んできたときは傷もそれなりにひどかったのだが勇者としての力でそれをある程度癒すことができ、手当も出来る限りしたこともあり今は落ち着いた。

呼吸も安定しているし、顔色も悪くない。

一つ懸念があるとしたら起きた時にお腹を多分、いや確実に空かせているだろうからまた何かしら用意しておかなければいけないということ。

でも、それも今の少年にとっては大したことではなくむしろそれぐらいのことができなかったら少女に対して申し訳が立たない思いだった。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様」

少年は少女の皿を台所まで持って行って洗って洗い始める。

「お姉ちゃんのこと、ありがとね。曆さん」

「いや、むしろ俺が勝手に飛び出していったからお前に余計な心配かけた。悪かったな」

「それはもういいよ……でももうしないでね……？」

「ああ」

「…嘘ついてる」

「ええ、何で？」

「だって曆さんまたお姉ちゃんが帰ってくるの遅くなったら絶対飛び出して行っちゃうもん」

「俺だって流石に今日ので懲りてるぞ。……もうしねえよ」

「じゃあ今一呼吸あつたのは何で？」

「……………」

「…ごめんわがまま言ってるよね。……………わたしね、怖かったんだ」

「……………」

「このままお姉ちゃん帰ってこないんじゃないかって。怖くてたまらなかった。しかも曆さんも飛び出して行っちゃうし、もうわたしは一人じゃないかって……二人が帰ってこなかったらどうしようってずっと考えてた。でも怖くて曆さんの後を追う事も出来なくて……」

「……………」

「こんなんじや巫女失格だなあ。勇者がピンチかもしれないのに足が震えて仕方なくて

膝抱えてただけなんて」

「ちよつと黙れ」

「いてっ☒」

少年が少女のおでこにきつめのデコピンをかます。少女は想定していなかった突然の痛みに対応しきれず床で悶えている。

少年はそんな少女に目線を合わせるかのようにしやがんで優しく頭を撫でる。先程のデコピンとは打って変わって優しく丁寧に割れ物を扱うかのように。

「お前には俺もー何より春が一番感謝してるし助かってる。巫女として妹としてあいつのことをサポートしてくれてるのは俺がよく分かっている。お前は自分が思っているよりもすげーやつだし。強いやつだ。だからーー大丈夫だ」

「……………バカ」

「はいはい、…てか何でちよつと顔赤いんだよ。やだな、惚れたのか?」

「……………アホドジマヌケ。すつとこどっこい」

「へいへい。つてかお前の髪相変わらずサラサラだな。姉妹揃って撫でがいがあつてもんだ」

「……………もう少しやっていいよ」

そう言つて顔をさらに赤くする少女となおも丁寧に撫で続ける少年。

それは滅びゆく世界の安らかな一ページであった。

あの青年が目を覚ましてから一週間が経った。

私は今日も病院に向かっている。少なくともこの一週間はずっと通い続けている。病院に到着して青年が——古木さんが入院している病室を指す。

ただ心のどこかが重かった。

本来なら目を覚ましたことにもっと喜ぶべきなのだろうし感動するべきなのだろう。当然嬉しく感じているし、よかったとも思っている。

しかしこんな目覚めを予想はしていなかった。

私は上の階に向かうエレベーターの中で一週間前のことを脳裏に浮かべる。

言葉が出てこない。

ひなたと病院で合流して彼の病室まで行くと病室の周りには大赦職員と思われる人や病院職員の人たちが大勢いた。

私やひなたに気がつくとも揃って頭を下げてくるが正直今はそんなこと気にしていら
れなかった。

興奮気味のままだに扉を開く。

そこには

目を瞑って眠っている姿しか見たことない古木暦という青年が起き上がってた姿が
たしかにあった。

しかし

その青年の目には

こちらが身震いするほどまでに

光がなかった。

「若葉ちゃん……」

「……………あ…ああ」

しばらく固まってしまっていたようだった。ひなたに促されてようやく入口から中に入る。

彼のベッドの周りの医者や看護婦、さらには大赦の職員が私が近づいて行くと離れていく。

彼のベッドの真横。いつもお見舞いに来るときに座っている場所まで来る。

彼は未だに一切動くことなくその漆黒の瞳は闇を写したまま。

「……………」

何を言えればいいのだろうか。わからない。散々彼が目を覚ましたら色々話さなければいけないことがあると思っていたのに何も出てこない。

喉元まで出かかった言葉が拒否反応を起こしたかのように逆流していく。隣にいるひなたも何も言わずただ彼を私と同じように見つめるまま。

「あ……………あ……………あ……………あ……………」

少年が動いた。

到底普通の言葉とは思えないが言葉を発した。苦しそうにそれでも必死にもがき、その先に何かを見つけ、まるでそれに救いを見出すようにしてか細い声を漏らす。

首を若葉の方に向けて見上げるようにして若葉の目をその漆黒の瞳で見つめる。

「……………あー……………あー……………あ……………は……………る……………は……………は……………」

それは知らない名だった。

青年はか細く苦しそうに今にも途切れてしまいそうではあったが、たしかにその名を呼んだ。

ただひたすらにその名を持つ人を求めるかのごとくに、若葉の顔を見つめてその名を呼び続ける。

明らかに私に対して言ってる。しかしそれは私を呼んでいるのではない。

彼は私の影に幻影を見ている。私が知らないその人を。

私は彼のことを何も知らない。その名の人を彼の前に連れて来る事も出来ない。

しかし何もしないというのはできなかつた。

なんでもいい。私にできることなら。少しでもいい。どうか——どうか彼に安らぎを与えてやりたかつた。

自然に体が動いていた。

自然に口が動いていた。

「大丈夫、大丈夫だ。私はここにいる。どこにも行つたりしない。………お帰り
曆」

私は古木さんを、曆を抱きしめながらそう言った。

散り桜

「調子はどうだ？どこか悪かったりしないか？」

コクツ

暦は何も言わない。私に対して目も合わせない。それでも——小さくはあるがたしかに頷いてくれる。

今はこうして反応があるだけでも嬉しい。そう感じてしまう。

「りんごを持ってきたんだ。……食べないか？」

コクツ

また頷いた。

「少し待ってくれ。最近練習しているんだ。昨日はあまりうまくいかなかったが今日こそ……！」

いや、まあ正確には昨日もなのだが。ちなみに今までは桂剥きをやろうとしていたのだがひなたに止められてしまった。……やはり料理というのは難しい。

代わりにくし形切りというのを教わった。なんでも一番基本の切り方らしい。

これぐらいなら私にだって……できるはずだ。

病室に備え付けてある小さなキッチンを借りて切り始める。落ち着いて丁寧にこれ以上指を切らないように。これ以上絆創膏を貼るのは流石に嫌だ。

「で……できた……」

何事も基本が大事だということだな。料理も居合道もそこは一緒ということか。

何はともあれようやくやく暦にちゃんとした形のものを食べさせることができる。別に形がどうであろうと味は変わらないのだろうがこいうのは気持ちの問題だからな。

やるからにはしつかりとしたものを出さなければならぬ。

「……………あ…あーん……………」

「……………」

少し気恥ずかしいが手渡しで暦の口まで運ぶ。まだ食事を自力で取れないらしい。

「美味しいか？」

コクッ

「そうか……！ほら、まだあるぞ。あーん、だ」

「……………」

「外に出てみないか？」

「……………」

深い意図はない。ただこうして一週間毎日この病室に通っているが彼が病室の外に出ているのを私はみたことがない。

でもずっとこのままこの病室にいるだけではなんだかダメなきがする。

何よりもうすぐ散ってしまう桜を今のうちにちゃんと見せたいという思いがあった。

……………はるといふ人はこんな時一体どうするのだろうか。

聞くとところによると、彼は——暦は私以外の人に話しかけられても全く反応を返さないらしい。私にだけ小さくはあるが話しかけると反応がある。

それはやはり、そういうことなのだろう。

でもそれでも——これから少しずつでも良くなっていってくれるのなら私はこの人の前では乃木若葉ではなく——はるといふ人になろう。

たとえその人のことを何も分からなくても、それでもこうして私が彼に接してこうして話しかけることが私にできることなのなら、それを戸惑うことはない。

「寒くないか？」

コクッ

「そうか。……今日は少し風が吹いてるな」

「……………」

総合病院の庭は広く、周りにも何人かの患者さんたちがいる。

暦には春の季節ではあるがマフラーを巻いて薄めのコートを着せている。

今日の気温が春にしては少し寒いというのもあるが未だにやせ細った体のまま外に出るのは良くないと思った。

庭には少しずつ散ってはいるがまだ綺麗に桜が咲いていた。散っている桜の花びらが風に優しくやられてこれはこれで綺麗だ。

ゆつくりと車椅子を押しながら散歩する。特に目的はない。ただの散歩。

チラツと目の前の車椅子に座っている暦の方を見る。そこには力なく彼の髪や瞳と同じ色をした片手剣が抱かれている。

忘れもしない、彼が巫女である千寺桜という少女とともに神樹様の結界ギリギリのところで発見した時に一緒に置かれていた剣だ。

そしてその剣が今ここにあるのは他でもない暦の要望だ。

目が覚めてすぐに剣を必死に求める彼を見て私から大赦に頼み込んだ。大赦は難色を示していたが大赦からしたら私からの個人的な頼みはある意味なかなか断りづらいのだろう。

それでもなんとか納得してくれて剣は今、彼の手元にある。もちろん何か間違いが起らないためにも鞘から抜けないようにしてはある。

私はその剣を見ていると不安に襲われる。全てを塗りつぶす漆黒の黒を持ったその剣を抱いているのを見るとまるでその剣が彼を飲み込んでしまったかのように見えてならない。

「そろそろ戻るか。長い時間外に出すぎるのもよくないしな」

一通りコースを回り終え病室に戻ろうときびしを返す。

「……………は……………る」

病室に向かっていた足を止める。その名が呼ばれた瞬間ビクツとした。

しかし—————そうだ。これは私に対して呼び変えているのだ。

「どうした？」

「あ……………ありが……………あ……………」

紡いでいた言葉が途切れる。しかし何を言いたいのかはわかった。あくまで憶測ではあるが、それでも私は嬉しかった。

「ううん、気にするな。さ、戻ろう」

……………コクツ

「うん、いいんだ。今はそれで—————いいんだ」

風がまた吹いた。地面に落ちていた花びらが再び舞幻的な開始が景色が生まれる。

来年、また桜がこんな風に見える頃は彼や私は、その頃には私は『はる』ではない乃木若葉なのだろうか。

それとも—————

「上里ちゃんさ、彼のことどう思う?」

「何ですか? 唐突に」

「なんとなく個人的にどう思ってるのか知りたくなってね。大赦とか巫女とか勇者とかそういうのは抜きで」

「……………そうですね」

「うん」

「よくわからないです」

「…だよねえ」

大赦にて、巫女のトップであるひなたと真鈴は彼の処遇をめぐる話をしていた。

「はい。なにせあの人には——古木暦さんには現在ほとんどいいほど情報がありませんから」

ひなたは目の前に広げられた古気暦という青年の情報がまとめられたプリントを険

しい表情で見つめる。

ようやく目を覚ましたはいいものの、この一週間彼は何も語っていない。

語るも何もそもそも今の彼には普通に意思疎通をすることさえ不可能なのかもしれないが。

しかし、それで『はい、そうですか』で済むほど甘い考えはしていない。

少なくとも現段階で何かしら害があるなどのことはないが、『わからない』というのは人間が最も恐れるものであり、畏怖するものだ。

それは何より大赦内部に深く関わっているひなたがよくわかっていた。

大赦は今——彼の処遇を決めかねている。

大赦も皮一枚じゃない。根っこの部分では神樹様を祀る組織として共通しているかもしれないが、何事にも細かい考えの違いやなどから派閥というものができているのが組織の道理でありその組織を発展にも破滅にも両方向に向かわせる可能性を持っている。

そんな状態の中

大赦として巫女としての上里ひなたは彼に関しては正直まだ保留というのが現在の考えであった。

何より情報である。大赦は改めて彼が発見時に身に纏っていた勇者服らしきものやその武器を調べ直そうとしているが、芳しい結果が出るとは思えない。

そして、あくまで一個人としての上里ひなたとしては

先ほども真鈴に対して言った、よくわからないが偽りのない心根であった。

「そういう真鈴さんはどうなんですか？」

「うーっ、なんか……なんとなくだけど怖い……かなあ」

「怖い、ですか？」

「うん。てのおおぼけとか幽霊とかそういう怖いとかじゃなくてね、得体の知れない怖さ、あとこれからどうなっていくだろうって怖さかな」

「そう……ですか」

「でもなんか乃木ちゃんは結構気になってるみたいだけどね」

「若葉ちゃんは………また私たちとは違って色々と思うこともあるんでしょう。何しろ自分以外はもういないと思っていた勇者にまた出会えたんですから」

「そうなのかねえ…………というか彼の目が覚めたつてことは『あの子』のところに連れてってあげるのは？」

「連れていけるのなら何よりですが………今の状態だと難しいかも知れません。そもそも彼は彼女のことを認識できるのでしようか」

「あー………難儀だなあ」

「上里様、安芸様そろそろお時間です。会議室の方にお越しく下さい」

「お、お呼ばれらしいね」

「行きましょうか」

ひなたは真鈴はとともに神官に連れられて会議室を目指す。

その道中でひなたはともに長年連れ添ってきた親友の姿を脳裏に思い浮かべる。

強くて凛々しくてカッコよくて、美しく可愛くてちよつと抜けてたりポンコツなところがあつて、そんな親友のことを思い浮かべる。

現状、わからないことだらけではあるが――

ただ一つ。

親友の幸せを望む心だけは何かあろうと変わることはないのだろう。

複雑な心

閃光が走る。

拳と刀が重い音を立ててぶつかり合う。人の速さとは思えないほどの速さで拳が繰り出される。しかし刀はその一つ一つをしつかりとさばいていく。

拳に吹き飛ばされないよう刀により力を込める。

かわしてさばいて反撃のチャンス伺う。

焦らずにただその瞬間を見定める。

なおも拳の怒涛の連打は止まらない。その衝撃の多さについて刀が弾かれる――――

ことはなかった。

「うわっ!?」

拳がこちらに新しく繰り出されるそのわずかな瞬間に合わせるようにして刀を払い上げる。

拳は宙に舞う、しかし刀もその衝撃で払い上げられすぐに次の攻撃に移ることはできない。

「ふんっ！」

手元に残る鞆を振るう者の胴に叩き込む。

「あー！また負けちゃったかあ」

「いや、払い上げのタイミングに少しでもミスをしていたらむしろ私が負けていた。五分五分だ」

「よーし！次は勝つからね！」

「ああ、何度でも受けて立とう」

夢の世界にて、若葉は友奈と再び合間見えていた。

「それにしても若葉ちゃんは大きくなっても昔みたい強いまんまだね。ううん。むしろどんどん強くなってる」

「これでも毎日の鍛錬は欠かしてないからな。あとは……やはりここでの友奈との模擬戦のおかげだ」

若葉は生者として生きているため当然ながら歳を重ね成長しその分変化もする。

しかしー友奈はすでに死した身。あの頃から何も変わっていない。この数年の間で若葉と友奈は何度もこの世界で顔を合わせているが友奈はその声も、その姿も、何も変わらない。

「それにしても……………」

「ー?どうした?」

友奈は若葉の顔をじーつと覗き込んで黙り込む。

「……………」

「友奈?私の顔に何かついてるのか?」

「この世界でそんなこと有り得ないとは思うが……」

「……………えつとね」

「……ああ」

友奈は彼女らしくない、歯切れの悪い様子で言葉を濁す。

「若葉ちゃんー」

「……………ゴクツ」

「すつごく綺麗になってるよね！」

「……………へ？」

「若葉ちゃん、もともと綺麗だったけど大人になってより綺麗になったよ！なんというか、うん！大人の美人って感じ！でも可愛いところも沢山ある！」

「なっ☒」

「でもそうだよね。若葉ちゃんももう今年で19歳になるんだもんね。うんうん」

「か、かわ…」

「髪もちよつと伸びた？すごく綺麗な金髪だもんね。一つに結んでももちろん似合ってるけどおろしてるのも雰囲気違って素敵だよ」

「かわ…かわわ…………」

「若葉ちゃんって普段着物とか着てるんだっけ？すつごく似合ってるだろうなあ。街中とか歩いてたら思わず振り返っちゃうよ！」

「かわわ…かわわわわ…………」

くくく

「えへへ、ごめんね？ちよつと興奮しちゃった」

「いや、いいんだ。私も、うん…取り乱しすぎたな」

互いに触りあつて並んで話す。未だにほんのり若葉の顔が赤い。

友奈は若葉の変わつていないところを改めて発見できた気がして少し嬉しかった。

「あ、そうだ。暦君の方はどう？」

友奈にはここで再開した時から暦の話はしていた。そして一週間前に目が覚めてその日のうちに話したらとても友奈は喜んでくれた。

あつたこともない、たとえそんな人でも心の底から喜んでくれる友奈の懐の深さを改めて実感してなんだかこちらまでつられて嬉しくなる。

もちろん、暦の意識が覚めた後の状態のことも全て話した。ひなたと友奈には隠し事や嘘は通用しない。…真鈴にもか。

「ん……そう…だな。意識が覚醒してから一週間経つが様子はあまり変わらないな」
「じゃあ、まだ自分で歩いたり喋ったりはできないんだね」

「ああ………だがな、この一週間であんなに歩いたりできるようになったんだ。それに今日病院の庭を散歩したら『ありがとう』って言ったんだ」

「そっか……じゃあ確実に回復してはいるんだね」

「まだまだ先は長いだろうけどな。……でも、少しずつでもいい。それでも回復してくれるなら、彼女との約束を守るためにも」

「……うん、そうだね」

友奈は若葉を表情を見る。約束のため、そう若葉は言った。

その真剣な顔つきからは本気で若葉が彼のため、もしくは彼女のためにやれることをやろうとするその決意が読み取れた。

友奈はそんな友人を誇りに思う。成長しても変わらない、若葉のいいところだ。

しかし同時に———そんな若葉が友奈にはどうしても悲痛に見えて仕方がなかった。理由は自分でもよくわからない。しかし、辛く苦しい道を若葉が進んでいるように思えて胸がざわつく。

一時的とはいえ戦いは終わったのだ。穏やかな生活を送っている若葉の人生にこれ以上辛く苦しいことが起きて欲しくない。

若葉は強く立派だ。でも若葉だって人間であり、何よりひとりの女の子なのだ。ウブなところも照れ屋さんなところも変わっていない。

「それでな、明日は街を案内しようと思うんだ。もちろん暦が了承してくれたらの話だが」

「お出かけ？」

「まだ病院の庭を一度散歩したただけなのだがな。車椅子に關しては扱い方を少々勉強したんだ。問題は無いと思う」

「そっかあ……うん。いいと思うよ。見たことのない景色ばかりだろうし、回復のためにもなるんじゃないかな？」

「友奈にそう言ってもらえろとなんだか安心するな。自信を持てるよ」

「えへへ、じゃあ今度はお出かけの話聞かせてね？」

「もちろんだ………了承してくれたららの話なんだがな」

若葉は少し不安そうな顔をする。

しかし——それは友奈が先ほど懸念していたようなものではないドキドキとちよつぴりの不安でできた女の子の顔だった。

「今日はお前にこの街を案内しようと思うんだが、どうだ？」

「……………」

表情は変わらずその瞳は闇を写したまま。でも、初めて見た一週間前に比べると不思議と違和感というか虚無感というか、そんな感じはしなくなっていた。

「……………」

沈黙が続く。目がさめる前ならこの病室では当たり前で少し悲しかった雰囲気も今はこうして、こんな状態でも意思疎通ができる。今どうしようか考えているのだろうか？などと考えると嫌な気分にはならなかった。

……………コクッ

数十秒ほど経つと、こちらの顔を見ながらうなずいた。

思わず顔が緩む。

そしてようやく自覚した。

そうか……私は不安だったのか。この話を受けてくれるか。断られるんじゃないかと不安だったのだ。

だから友奈にもこの話をしたのかもしれない。

「……はあ。友奈には頭が上がらないな」

いや、正確にはひなたと真鈴と友奈には、かもしれないが。

天気は晴れ。風も昨日よりも落ち着いていて心地よい。

この分ならマフラーもいらぬか。

そんなことを思いつつも出かける用意をする。

「ほら、掴まれ」

患者服から暦を着替えさせて腕を掴ませて車椅子に乗せる。

暦はまだ歩けない。

彼の体にはこの精神喪失状態以外は特に問題ないとのことだが、三年もの間眠り続けていた弊害は大きく何より自分の力でまともに歩けないのは大変だろうと、病院側でリハビリを施そうとしているのだが

どうやらリハビリすることを拒否しているようだった。

それどころか私以外の人に対しては目を合わせることもすらしないう。

私としても何か強制してやらせることはしたくないが——私から言えばあるいは違う反応を見せてくれるかもしれない。

いや、きっと「私」ではない。『はる』が言えばだろう。

だからだろうか。なんだか妙に言い出しづらかった。「私」ではない『はる』という顔も知らない人として提案するのを心のどこかで拒否してしまっているのかもしれない。

一週間前の決意がこうも簡単に揺らぐとは思わなかった。

私はこんなにも弱い人間だったのか。そう思う。あの戦いを通して私は精神的にも強くなったとそうどこかで思っていた。

事実四国を生きる象徴としてこの三年生きていた。これからもそう生きていくことを変えようとは思わないし変える気はない。

なのに――――私はなぜこうも不安なのだろう。

「……………は……………」

自分でも知らないうちに難しい顔でもしていたのだろうか。暦がこちらの顔を見て名を呼ぶ。

「…行こうか暦」

私は私ではない誰かとしてその名を呼ぶ。

その闇の中

「ねえ、暦」

「あ？」

「なんで私なのかな？」

「何が」

「なんで私が勇者に選ばれたんだろうなって」

日照りが強く蝉の鳴き声がうるさく感じる季節。『あの日』世界が終わった日からすでに二年が経っていた。

日本中、又は世界中がその日天より降りし災害によって崩壊した。

そんな中ごく一部の小さな土地を一人守るひとりの勇者

千寺春は唐突に、まるでなんでもないことを問うかのように隣で釣竿を垂らす一般人の少年古木暦に目も合わさずに言った。

「はあ？」

「いやはあって何よ。はあって」

「こんなバカ暑いなかそれでも晩飯のために釣りやってるって時に何言い出すんだこい

つって思ってる」

「たしかに暑いけどさあ………ちよつとは真剣に聞いてくれたっていいじゃん」
春は不貞腐れたようにしてそっぽを向く。手に持つ釣竿に動きはない。

「へいへい」

暦は適当にあしらいながら言う。するとその釣竿の浮きがピクツと動いた。

「おつと。ふう………三匹めつと」

手際よく釣った魚を針から外してカゴに入れると再び餌をつけて放り込む。

遠すぎず近すぎず、いい位置に糸がほちやんと落ちる。

ちなみに隣の少女はまだ一匹も釣れていない。

こつそり悔しそうな顔をする春。ちなみに隠しているつもりだが暦にはバレバレである。

「んで、あれか。なんで自分が勇者に選ばれたのか、だったか」

「うん、不思議だと思わない？」

「なんで？」

「私は勇者なんて大層な存在になれるほど高潔な人生を送ってきたつもりなんてないし、特別優等生とかそんな感じで生きていたつもりもない。普通に………生きていただけ」

「そうだな。お前は多少がめつかったり少し食い意地張ってたり負けず嫌いだったりするところ以外は基本的に普通だろうな」

「でしょ?」

「でしょ?じゃねえよ。ツツコメよ。こりや天然も追加でいいかもな」

「あれ。あ、そつか。今のはたしかにツツコミどころ満載だ。おいコラ」

「おいおい、お前大丈夫か」

「あはは、ごめん。最近というか勇者になって初めて戦った時からずっと考えてることだね。どうせ考えても仕方のないことだからなるべく考えないようにしようとはしてるんだけど……ね」

その時春の釣竿の浮きがピクツと動いた。しかし——

「あ…逃げられちゃった」

釣り上げようとして竿をあげると魚は針から抜けて逃げてしまった。

「なあ、春」

「んー………?」

「俺は勇者じゃないしましてや巫女でもない。だからお前のその悩みをどうこうすることはできない」

「……………うん、そうだよね」

「でもな――」

あれ……………俺は……………俺は……………あの時、何を……………あいつ
に……………あいつ…?

…あいつって…誰のこと……………いや…はる……………春……………せんじ……………千寺
…春

そうだー千寺春だ。俺がずっと憧れ続けている勇者であり俺の大切な人。

おかしな話だ。どうして俺はそんな大切な人のことを忘れそうになってたんだかー

今だってー

こんなにすぐ近くにー

俺の近くにあいつは居てくれてるっていうのにー

「……こーみーこみー……」

声が聞こえる。あいつの声だ。近くにいる。すぐ近くに。

「大丈夫か？……もしかしてそんないらなかったか？」

目の前に心配そうにこちらを伺うひとりの少女がいる。

春……春が俺の目の前にいる。

口元に何かを差し出している………気がする。

わからない。よくわからない。

視界がにじむ。視点が定まらず、目の前の風景が、光景が、よくわからない。

それでも、目の前にいるのは――少女であり――春だ。

春――俺は――春に迷惑をかけてしまっているのか。

それは、だめだ。――いや、だめなのか――？

だって――目の前にいる彼女は

幸せそうで

苦しいこと

悲しいこと

辛いこと

そんなものが無いように見えて

そんな春を見たのは久しぶりで

春の笑顔を、曇りのない、影のない、作り物ではない穏やかな表情を

俺の目の前で見せている。

だったら――

いいのかもしれない。

このままで

ずっと

ど……………どうしたのだろうか。

街の案内を一通り終えて昼の時間になったので

せっかくにとうどん屋に連れて行ってみた。やはり香川にいてうどんを食べないと
いうのは何かが違うと思っただけだ。

正直食べてくれるかどうか不安にもなったが、うーうーうーうーなら大丈夫じゃないかと
いうどこか無責任な自信もあったにはあったが

普通に食べてくれてるようではなかったと思っただけ

いきなりなんの反応も示さなくなってしまった。

フルフル……………

暦が首を横に降る。これは、大丈夫ということだろうか？

「えっ……………」

唐突なことに言葉が詰まる。

彼が、手を伸ばして私の頭を撫でている。

ゆつくりと優しく、まるで割れ物を扱うかのように。

自分の方がずっと不安定な状態にもかかわらず

まるでこちらを安心させるかのように

そしてー私の頭を撫でる彼の表情はどこか微笑んでいる気がした。

病院にいる。

それはわかる。

視界として風景としてそれを認識しているわけではない。

ただ俺はずつとそこにいた。

俺はずつとそこにいたのだ。

なぜ？

わからない

知らない

おかしい？

おかしくない。

首が動いた、気がする。

外は暗闇に包まれており時間はわからないが、それが夜であることを俺に教えてくれる。

単に俺の視界が歪みに歪んでいるからそう見えるだけかもしれないが。

俺はあの後どうしたのだろうか。

俺は、俺は春とどこかに行っていて

あとは

「ひびく顔ね」

声が出た。春ーいや違う。あいつの声はこんなに冷たくなかった。暖かいーいや、暖かいというのがそもそもなんなのか。今の俺は果たして理解しているのだろうか。

「まるで昔の自分を見ているようだよ」

俺は窓ガラスを眺めていたはずだ。きつと。

でもそこには何もーいやなかつた。

いや、黒が闇が、何も無いことになるのならの話だが。

自分は今どのような状態なのか。

俺は今、自分の足で立っているのか。暗闇に足をつけているのか。

でも、なんだかその闇は心地よいものな気がして、嫌な意味じゃなく、自然に体に馴染む気がして

本来俺の足は動かないはずなのに

なぜか、不思議と体が勝手に動いていて、でもなんで動いているのかわからなくて、それでも、少しずつでも、歩いている感覚が一切なくても

ただ、ただ先ほど聞こえてきた声を探して、求めてなんとかそこにたどり着けないかと、理由もなしに浮遊感を頼りに歩く。

「早くきなさい。ずっと待っているのも疲れるから」

その闇の先

「遅い」

「……………」

怒られている。なんでもかかは知らない。

あれ——俺は確か——あの暗闇を——歩いてきた。

どこまでも続くかのように見えた暗闇を無我夢中で必死に、その理由もわからずに、それが、いつのまに。

いや、いつから。

どのタイミングで

「結構な時間を待っていたのだから謝罪に一言ぐらい欲しいのだけれど」

「……………」

目の前に人がいる。

この声に聞き覚えがある。というかついさつき、あの闇の中で聞いていたはずだ。そうだ。俺はそれを頼りに歩いてきた。

「あんたは……………誰だ…？」

初めて言葉が出た。何を言おうか考える前に口が動いていた。とても弱々しいものではあったが自分口から言葉を発した。

「人に名を聞く前にまずは自分から言うのが筋じゃないかしら？」

「む……まあそうか。俺の名前は——」

あれ……………いや、え……………？

「……いいわ、無理しなくて」

「え……………でも、なんで、俺……」

「いいから、大丈夫だから——少し意地悪したわね。悪かったわ」

そういうと、目の前の彼女は少しだけ笑う。

目の前にいる彼女——郡千景は黒髪ロングにその髪と同じ真っ黒の瞳を持つ女の子。

「あれ——」

なぜ今まで気がつかなかったのか。その声の主を見つける事ばかりに意識が回っていて周りが全く見えていなかったのか。

いずれにせよ、到底俺の理解が追いつかない状況が広がっていた。

「驚くわよね、当然だわ」

彼女は——郡千景と名乗る少女は全く表情崩さずにまるで言いすてるようにして

言った。

暗闇だった世界はいつのまにかその姿を変えていた。闇は取り払われ目の前には一台の丸いテーブルとイスが二つ置かれている。

片方のイスにはすでに彼女が座っており、もう一台が空いている状況だった。

周りを見渡す。一面花だらけだった。お花畑なのだろうか、しかし花の名前は俺にはよくわからない。

上を見上げてみる。空——そう呼べるものにはそこにはなかった。月はなく、星はない。

ただ、だからといって闇がそこを支配しているわけではない。

花びら——なんの？わからない。

俺にわかるのはそれが綺麗だと言うことだけ。

しかしどういうわけか、不思議と心落ち着く気がした。

「座つたらどうかしら。立ちっぱなしもなんでしょうから」

「……………」

躊躇はあった。でも今は彼女にすがるしかない。

「千景」

「…え」

「郡千景。それが私の名前」

「郡……郡さんか」

この世界に突如として迷い込んで初めて得た情報。何もわからないそんな状況がずっと続いてきたから、そんな些細な情報でもなんだか嬉しかった。

郡——千景

「いい名前だな」

思わずそう言ってしまった。

「……………そう」

彼女は、郡さんはそう返すだけだった。でもなんだかほんのり顔が赤い気がしたからそれで満足しようと思う。

ざわついていた心が少し落ち着いてきた。無論この状況のことはまだ何もわかっていないが、それでもなんとか落ち着いて話を聞くぐらいはできそうだ。

「それで……あなたとしては色々知りたいことが多いと思うけど、どうする?」

「……………郡さんが知っていることを全部教えてくれるとありがたい」

「なら、まずあなたが自分自身のこと、何が覚えていることをある?」

「……………すまん、何もわからない。自分がどこでどうしてここにいるのかも。郡さんなら知ってるんじゃないのか?」

「——ごめんなさい。私も多くは知らない。今すぐに教えてあげられることがあるといえ、せいぜいあなたの名前ぐらい」

「……………そう……………か」

正直落胆した。俺は勝手に、誠に待つてながらきつと郡さんは全てを知っているのだとばかり思っていたから。

しかし、どうして俺はそう思ったのだろうか。

彼女の口ぶりからだろうか。佇まいからだろうか。

それとも

彼女がなんだか、どうしようもなく魅力的に見えてしまったためだろうか。

「でも……じゃあ、せめて俺の名前を教えてくださいませんか？名前がわかればもしかしたら他にも何が思えますかもしれないし」

これはただの希望論に過ぎない。しかしそんな希望と郡さんにすがくらいいしかできることはない。

千景の表情は動かない。重々しくも言葉を紡ぐ。

「古木暦、それがあなたの名前。古いに木と書いて、時間の流れを示す暦と書いて古木

古木曆———そうか、俺はそんな名前だったのか。

どこか拍子抜けする思いだった。

ついさつきまで密かに思っていた願いがまとめてぶち壊された。そんな気分だ。

だって

あまりにもその名前に対して何も感じられないのだ。

思い出す感覚も、わからないという絶望も、何も無い。

無しかそこにはない。

まるで他人の名前を聞いているようだった。

きっと、きっとどこかの誰かが、それこそ今この瞬間にも、この名前を呼んでいるかもしれないのに、大切な誰かが、名も知らぬ誰かが、俺のことを心配してくれている誰かが

この名を呼んでくれているはずなのに

それを思っ
て悲しくなることも辛くなることもできない、俺はなんて最低なやつなん
だろう。

どこまで、バカなのだろう。

「あなたは………今のあなたは少し私に似ている」

私の目の前にいるひとりの男の子。来ることはわかっていた。でも私に何かできることがあるのか。

答えは否だ。

私はこの世の存在ではなく、かといってあの世の存在でもない。

なのに、なぜ？

なぜ私は古木君と今こうして話しているのか。

なぜ——

答えは簡単だ。私のようになってほしくないから。

絶望の果てに大切なもの、大事だったはずのもの、近くにあったはずの希望や未来を自ら手放してしまった私のようになってほしくないから。

そしてもう一つ

乃木さんに幸せになってほしいから。

乃木さんの悲しむ顔を見たくないから。

「あなたは頑張った。苦しくても辛くてもそれでも最後の最後まで頑張った」

先ほど私は彼に嘘をついた。

私は彼の素性を彼がこの世界に来るときに知ってしまった。

彼の勇者としてのあまりにも辛い戦いを

彼の勇者としての結末を

「だから、だから私は、あなたを救うことはできない。私にできるのは――あなた

たに現実を見せることだけ。思い出させることだけ」

千景は曆の手を握る。強く、なにかを願うように。

世界が崩れる

周りのものがまるで塵とかすかのように音も立てず、その闇に飲まれていく。

黒く、暗く、闇が体を、脳を、心の全てを再構築していく。

「あなたを救うのは——」

そんな状況でもなおも決して握った手を離さない千景。自我がもう保てなくなる。

視界が霞み発声もできない。

聴覚が薄れていくのがわかる。

「乃木さんに任せるわ」

叫び

剣を振っている。

ひたすらに

無我夢中で

何も考えず

何も感じず

一匹

二匹

三匹

いや、元から数えてなどいないから正確な数などわからない。

殺す

殺す

殺す

殺して殺して殺して

また殺す

ああ……もしこの世に地獄があるのなら、きつとこういうことを地獄、又は地獄絵図と
言うのだろう。

いつからか

剣を振るわなくなった。

その分走る速度を上げている。

目が霞む

意識が朦朧とする

周りの景色がうまく目に入っていない

体中から血が溢れている

ボロボロでグチャグチャで今にも崩れて崩壊しそうな

肉体と精神だった。

でも

それでも

意識がある限り

肉体がある限り

歩みを止めることは許されない

でなければ

あいつが死んでも守った意味がないじゃないか

大切だった人の妹一人守れないようでは

『勇者』失格だ。

生きている意味だってない。わからない。見つからない。

だって——こいつらだけが俺の心の支えだったのだから。

—

「……………ごめんね……………こよみ…さ……………ごめ…ん」

いつぶりだろうか。

他者の声を聞いたのは

もう何時間も、何日も俺には何も聞こえなかった。

未だに目は霞むし意識は朦朧とする。

体中が痛くて痛くてたまらない。

この『勇者』の力がなければ俺はとっくに死んでいただろう。

むしろその方が楽だったのかもしれない。

でもそれはできなかつた。

俺の腕の中にはまだ希望があつたから。

勇者―千寺春の妹千寺桜がいる。

傷だらけの俺よりもひどい

致命傷を負つた女の子がいる。

「か……………らだ、こ…なに……………」

春が手を伸ばして俺の頬を触る。

俺も春も血まみれでその小さい手に付着している血もどちらのものかもわからない。

にもかかわらず、そう手はとても優しくとても暖かい。

そこには命があつた。

まだまだ先の未来があり希望があり夢がある。

希望も夢も何もない俺とは違う。

「てあて……………は……く……」

違う

「こ……な……………に……くるし……………」

違う

「そう………なが………いで」

あれ——

なんで

俺は泣いている。

こいつは、桜は

曲がりなりににも勇者の力を持つ俺とは違って、巫女であつてもあくまで肉体は普通の一般人と同じで

こんなひどいけどを——致命傷を負っている。

こうやって声を出すことも

手を伸ばして俺に触れることも

にこやかに微笑むことも

苦しくて苦しくてたまらないはずなのだ。

「いよみ……さん………あり………と……う」

もう呂律が回らなくなってきている。口の動きが明らかにできなくなってきている。

死が死が死が死が死が

迫ってきている。

言うべきだ。無理に喋るなど、大人しくしていると、傷がひどくなると、すぐに助けを呼んでくると。

でも、何も言わない。何も言えない。何も言いたくない。

言葉を発してしまえば、全てを、この現実を、あの過去を受け入れてしまいそうだから。

受け入れたくないから。

何も感じたくないし、知りたくない。

真実ほど人に残酷なものもない。

そんな真実はいらない。

「わたし……の……こ……と……おね……ちや……んのこと………
………いつぱい……ありがとう………
………いつぱい」

涙がこぼれた。誰の？俺のだ。

誰に？春に。

一度始めると、遮られることなくとめどなく流れて落ちる。

血まみれの春の顔を濡らす。

その瞬間

世界は

闇を取り戻した。

「また……あつたわね」

人がいる。目の前に。

郡さんだ。いつぶりだろうか。あれからどれだけ経った。わからない。いや、そもそも何があつた。

なんでまた意識を俺は失つて——

「あ……………あ……………あ……………ああああああああ」

思い出すのは一瞬だった。

「ああああああああああ——！」

叫ぶ。叫んで叫んで叫んで

あの光景を思い出す。

希望が未来が、光が消えていく瞬間を、それすら知ることができなかったあの日のことを。

悔やみ憎しみ悲しみ苦しみ痛み何もかも込めて叫ぶ。

「情けない」

千景はうずくまるように叫び続ける唇に冷たく語りかける。

「彼女を救えなかった自分が憎い」

反応を求めているのではないのかもしれない。
ただ、氷のように冷気込めて語りかける。

「自分だけ生き残ってしまったのを後悔している」

そして

その言葉が絶望に苛まれる少年の心に触れた。

「黙れ」

「……………」

立ち上がって一言。千景は何も反応を返さない。

ただ彼を見つめるだけ。

「黙れ黙れ黙れ黙れ……………黙れええ——!!!」

駆け出す。いつのまにかその手には漆黒の片手剣が握られていた。
すぐ近くにポツンと立っている彼女に向けて剣を振り下ろす。

キン!

甲高い金属音が聞こえた。

千景を今にも切り裂かんとした漆黒の剣を同じく漆黒の大鎌が間に入って防ぐ。

「つあああ!!」

攻撃の手を止めない。左右上下あらゆる方向から剣を繰り出す。

しかしその全ての攻撃を防ぐ、又は受け流されてしまう。

「愚かよ、とても愚かなことをしているわ。古木君」

「うるさい……………!だま——れえ!」

何が愚かだ……………そんなの……………そんなの……………

「本当に、イライラするわ。あの時のわたしにそっくり。何も見えていないし、見ようともしていない」

「黙れ!見るも何も……もう俺に残されたものなんてない!唯一の希望も、俺がこの手で殺したんだ!」

「殺したのはあなたじゃない。パーテックスよ」

「違う！俺が弱いから！俺があいつを守るだけの力がなかったから！俺が殺したも同然だ！」

俺は弱い。勇者として戦う技術もなければ強い精神もない。それを補うだけの願ひもない。志もない。

人類を救いたいとか、奴らを倒したいとか、そんなものも一切ない。

それでも唯一その力を使って何が何でも助けてやりたかった、生きていて欲しかった女の子を、目の前で立ったまま生き絶えていた、大切だった人の残した形見を――

「――だったら」

千景は防御にしか使っていなかった大鎌を始めて振りかざす。

「生きなさいよ！！？」

「っ！！？」

めちやくちやに型も何もあつたもんじやない、そこらにある棒を振る回すように振つていた漆黒の剣を少年の手から弾く。

「あなたが殺した。たしかにそうかもしれない。あなたにはその女の子を守りきる力が

なかった。それはとても辛く苦しいことだわ。今のあなたには何も縋るものも生きていく意味、理由も見つからない」

千景は突きつける。現実を。そこには慰めはないし同情もない。

「でも…違う。違うのよ！それは新しく見つけなければならぬ！死んでしまった人を思うのなら前に進まなければならぬ！新しい自分の、誰にも予想のつかないそれでも楽しい自分だけの幸せを探し出してそれを掴み取らなければならぬ！死んでしまった人のことを思って泣くのもいい。思い出すのも、懐かしむのもいい。でも後悔だけはしちやダメ。自分で自分を滅ぼすのだけは——絶対にダメなの!!？」

それは、かつて人々からただ嫌われたくない、愛して欲しい、ただそれだけを願ひ、裏切られた、希望を見失ひ

最後の——最後にその希望を取り戻した少女の

魂の叫びだった。

友達

郡千景。俺を呼んだ女の子。

どうして、なんの理由で、どんな意味がある――

彼女は今俺を叱ってくれている。

叱ってくれている――？

俺は、俺は誰かに叱って欲しかったのか。叱責して欲しかったのか。

どうだろう。

ただ一つわかるのは、彼女がとても必死だったことだけ。

どこか苦しように、そして悲壮にも見えてならなかった。

「俺……俺は………ごめん……」

依然として郡さんの大鎌と重なっていた剣を下ろす。

甲高い金属音が聞こえてきた。下ろした手に力が入らず剣を手から離してしまふ。

「……………」

俺のつつさに出てしまった謝罪の言葉に彼女はすぐに返答をすることは無い。

いつのまにかその手に握られていた大鎌が消えて無くなっていた。

「っ……………」

とつさに後ずさってしまった。

郡さんは何も言わずに近づいてくる。

臆することなく、怖がることもなく。

さつきまで自分に対してめちやくちやに剣を振り回していた相手に対して何も警戒することなく

「っあ……………」

「……………」

捕まえられた。腕を掴まれた。

結構な力で。でも不思議と痛いとは感じなかった。

暖かかった。人の本来の暖かき、その暖かさをどこか懐かしく愛おしく俺は求めていたのかもしれない。

そうでなきや、こんな穏やかな気持ちになることもない。

「わたしはあなたの大切なひとたちじゃない」

「……………ああ」

「わたしもあなたのことをよく知らないし、あなたもわたしのことをよく知らない」
「…そうだね」

「でも…あなたもわたしはどこか似ている………勝手なことを言っているのは重々承知
だけど、それでもそう思わずにはいられないから、気持ちは言葉にしてはつきり伝えな
いと、ずっと後悔することになるから」

「…うん」

俺もそうだ、あの勇ましい姿をそれでいて穏やかな笑顔で生き絶えたあいつの姿を見
る前に、『好きだ』と伝えたかった。

最後の最後まであんな状態でありながら自分でなく俺を氣遣うあいつには沢山の『感
謝』を伝えたかった。

だから言おう。

何も知らず、何もわからない彼女に対してだけど、率直に思ったのだから。

「ありがとう——」

ああ………ようやく、ようやく言えた。

罪滅ぼしや償いではない。『春』や『桜』じゃない、それでも、俺のことを思っ

ず知らずのバカで愚かでもう取り返しのつかないことをした俺を救ってくれた彼女に
対して。

あの二人にはずっと言えなかった、感謝の言葉が。

なにかも吹っ切れた、決してそんなことはない。俺は生涯あの二人のことを考える
だろうし忘れることもない。

でももう歩かなきゃ。歩き出さなきゃ。

ずつと立ち止まっついてはそれこそあいつらに申し訳が立たない。

こんな俺に——郡さんが言うような俺だけの幸せがあるのかわからないが、それでも
探してみようと思う。見つけてみようと思う。

「郡さん」

「……………」

郡さんはなにも言わない。俺の問いかけにも応じようとせず俺の腕を握っているだ
け。

「俺はまだとても大切なことを忘れてる」

「……………」

「『乃木さん』」

「郡さんが言つてたこの人、どんな人が教えてくれないか？」

この世界崩れたあの瞬間、あの時も郡さんは俺の腕を握つてくれていた。

その時言つていた。

『あなたを救うのは乃木さんに任せるわ』

「…乃木若葉さん。初代勇者。私たち四国の勇者たちのリーダー。頑固だったり融通がきかないところもあるけど——とても仲間のことを思いやつていて考えていて、強く優しい女の子。西暦勇者ただ一人の生き残り……いや、あなたがいるわね。あなたが

乃木若葉

聞き覚えはない。でもきつと——

「ありがとう、郡さん。乃木若葉……俺は早く会いに行かなきゃな。その人に」

「ええ、あなたはなにかと心配を彼女にかけているだろうから、それがいいわ」

「それで伝える。感謝を。はつきり言葉にして」

「そうしなさい。いいえ、そうしてあげて」

「あと…手」

「あ……………ご、ごめんなさい」

郡さんが握り続けていた俺の腕を離す。

「いや、ありがとう。とても暖かかった」

「わたしは生者じゃないのよ」

「そんなの関係ない。…………郡さんは俺のことを救うことはできないって言ってたけど——俺はそうは思っていない。あなたも俺の恩人だ」

「……………」

「だから、また会おう。恩返しをしたい」

「……………」

「俺にやれることなんてたかが知れてるけど…それでもまた会いたい」

もう俺は帰らなければならない。現実には、日常に。これから新しく作っていくのだ。その日常を。

どんな風に、誰と、それはこれからいくらでも考えていこう。

それもきつと楽しいだろうから。

「…こんな風に死者が生者であるあなたとこうして話しているだけでもそれは普通ならありえない」

「そしてあなたという貴重な勇者の生き残りをみすみす廃人化されるのを避けようとしただけ。そこにちようどわたしのよう都合のいい素材がいたから使っただけのこと」

死者と生者

そこにある隔たりはなによりも大きい。だからまた会いたいなどいうことは不可能であり荒唐無稽なのだ

でも思ってしまったからには、言いたい、伝えたいと思ってしまったからには止めることはできなかつた。

だから俺は何度でも言う。

「それでも、きつと。いいや、絶対だ」

「…無茶苦茶ね」

「ああ、本来の俺はこんな感じだ」

「そう—それは乃木さんも大変そうね。……………でも、うん。そうね。また——」

「会おう」「会いましょう」

二人の言葉が重なる。互いに少し笑う。

そして千景がどこか恥ずかしそうに、あるいは意を決したように。

「……………これ」

「ん？」

「持ってて…」

「え」

「いいから…」

自らの髪を結んでいた赤のリボンを手渡す。

結んでいた部分の髪が解けてもともと長く見えた髪型がさらに長く見える。

「それから、名前」

「名前？」

「今度会った時は、下の名前でもいい…………」

リボンを渡したことで赤みがかかっていた千景の顔がさらに赤に染まる。

よく見てみれば耳まで真っ赤だった。

とっさに何個かのいたずらが思い浮かんでしまったのだがここでそれをやるとさっきの大鎌で殺される気がしたのでやめておいた。代わりに

「分かったよ、千景」

「…今度会った時って言ったでしよ…」

「悪い、我慢できなかった。いい名前だからな」

「……………バカ…」

「ええ、何で」

「じゃあ俺のことも下の名前でもいいよ」

「それは…嫌よ…」

「ありや」

「だって…恥ずかしいもの…」

「そか。うん、分かった」

「…助かるわ」

「でもいつか呼ばせてやるからな。はは」

「……………好きにしなさい」

「おう、好きにする」

「そのかわり」

「？」

「乃木さんを泣かせるようなことがあつたら許さないから」

「あ、はい」

即答で敬語がでちゃうぐらいには怖かった。あと冗談で言っているようにも見えなかった。つまり怖い（二度目）

それから俺と千景はいくつか話をした。そ

俺の大切だった人、千景の大切だった人。

高嶋友奈。千景が大好きだった人。多くの思い出を話してくれた。だから俺も話した。春と桜と過ごした思い出を。

どれだけの時間かはわからない。短くもないし長くもない。でも互いに話したいことを話した。

なんだろう。こういうのを『友達』っていうんだろうか。

そうであつたならいいなと思う。

「じゃあ」

「ええ」

湿っぽいのはいらぬ。なにも今生の別れつてわけでもないのだ。千景はもう死んでしまった人ではあるが、そんなことは些細な問題だ。

きつと、また。

互いにそう思つて、それを信じているから

そう長い時間を過ごしたわけじゃないし、まだまだ互いに知らないことも多くある。

それでも

千景とのここでの出会いを糧に向かうでも頑張れると思うから。

だから

俺はまた——生きていく。

幸せを探して。

帰還

「曆」

名前を呼ばれた。何度も聞いた声で、聴き慣れた声で。

何度も聴きたかった声。もう聞けない声。

それはとても辛く悲しい。

でも今の俺なら、千景のお陰でようやく前を向き始めることができたから

「よう、久しぶり」

振り返ると春がいた。自然と声が出ていた。

「よっす」

挨拶はそれだけ、それだけで十分。こうやって互いに笑顔で話せているだけで十分だった。

「お前には——心配かけたな。悪かった」

「——うん、まあ許す」

「軽いな」

「ありや、そかな」

「いや、そうか。そうだったよな」

「じゃああたしからも、ごめん。二人を置いてっちゃって」

「お前がいたから俺はまだ生きてる。それだけで十分だろ。それに俺は桜を守れなかったんだ。お前に謝られる資格なんてないよ」

「そっか…そうだよ。これは私が言っておきたかったただだから、もう忘れ——るのも無理な話だよ」

「勿論だ、俺はお前らのことなにも忘れないよ。絶対に」

「そっかーじゃあ私の勇ましい活躍も後世に残してくれちゃったり？」

「当然」

「桜の巫女としての能力の高さも伝えてくれたり？」

「確実に」

「言われるまでもない。お前らのことをなかつたものとして生きてくことなんて出来やしない。」

「そかそか、うん。ありがと」

「俺も——ありがとう。色々とたくさん、本当に——ありがとう」

「——うんうん、やっぱり笑顔が一番だよ。辛気臭いのも湿っぽいのもよくない。」

「……………よし、言うことは言った。ほらほら行った行った」

「おう、行くよ。行ってくる。俺の幸せ、探してくるよ」

沈黙が流れる。ほんの数秒の間俺と春は互いに見つめあった。

「バイバイ」

「じゃあな」

別れの言葉はこんなもんでよかった。これが一番だと俺も思った。

再び背を向ける。もうなにも言うことはないし、言おうとも思わない。

感謝をしっかりと伝えられた。さよならを伝えられた。幸せになると誓うことができた。

なら——もう

初めはかすかな音が聞こえた。そこから段々と五感を取り戻していく不思議な感覚があった。

「ん……」

ゆつくりと目を開く。

視界が歪んでうまく焦点が定まらない。

しかし、ちらつと視界の端に人が映るのがわかった。

未だに戻りきらない感覚を動かして首だけで向きを変える。

女の子だった。

その子はなんだかとても驚いたような顔をしていた。

ああ—そうか。

確証はない。でもわかる。彼女が誰であるのか。

そして覚えている。千景を。郡千景という女の子のことも。

唐突なことにとっさに反応ができなかった。反射神経には多少自信があったのだが何故かすぐに反応ができなかった。

彼に、古木曆に街を案内した次の日に、彼は突如昏睡状態になってしまったと病院の方から連絡があった。

原因はわからない。怪我もすでにほとんど完治し、ようやく意識を取り戻したというのに、またも深い眠りについてしまった彼を見て

とても胸が痛くなった。もしかしたら私が何かしてしまったのだろうか、そうも考えた。

だからといって私に特別できることなどなくただ見舞いに通うぐらいだった。

三年もの間眠っていたせいなのか、彼の意識は安定していなかった。しかしそれでも、たとえ自分で言葉をうまく話せなくとも、私のことを私の知らない人と見ていたとしても、それでも意識があれば、会話ができ、どこかに出かけることができる。美味しいものを食べることもできる。

それがまた、下手をすれば永遠にできなくなるのではないかと思った。

そんな不安な気持ちを隠すように病室では面会時間のギリギリまで本を読んでいた。

私はもともとそこまで本を読む人間ではなかったが、あの戦い以外読むようになった。ジャンルは問わず色々。おそらく杏や千景の影響だろう。

今日もそのつもりだった。

学校に行き授業を受けその足で病院に来た。

今日は昼頃に来ることができたので病室には心地よい日差しが差し込んでいた。

「風が…気持ちいいな」

窓を開けてみると強すぎないちょうど良い風が吹き思わず感想が漏れた。それからすぐのことだった。幾分も立っていないかった。

「はじめまして——は違うか。久しぶり？つてのもなんかおかしいか」

自分が寝ているベッドのすぐ隣で驚いている彼女に対して何か言おうと思ったのだが、どうにもうまく言葉が出ない。

だから難しく考えるのをやめた。

まず一番大事なのは

「ありがとう」

感謝だと思おうから。

体をなんとか起こしてまずはそれだけを。痛みはないのだがいかんせん違和感が拭えない。

あと足が全然動かん。手に力が入らない。要はひよろひよろ。

あーしんどい。

「目が、覚めたのか…?」

「おかげさまで」

「——よかった」

乃木さんはとても安心したように言った。その反応だけで彼女がとてもいい人なのが、千景が言っていた通りの人なのがわかった。

普通はまともに話したこともない男のことでここまで安堵の表情を表すことなどできやしない。

思わず笑みがこぼれる。

「あれ……というか、なんで——私のことを」

「あーうん。色々と迷惑かけてたよね」

「いや…違うんだ…：…そうじゃない、そうじゃないが、どうやって—」

乃木さんがなにも言いたいのか、一体これまでにながあつてこんな反応になつていいのか、彼女はこれまでどんな思いでこの病室に足を運んでいたのか。

ずっとどこか深い闇の中をさまよっていた俺を見捨てずにとどめておいてくれた人。待つていてくれた人。これから俺が恩を返していきたい人。

そんな人に対した今すぐ俺ができるなど先ほど言った感謝の言葉と

あと一つ

唐突で、いきなり意味がわからないことを言っていると思われるかもしれないけど、それが正解なのかもわからないけど、

間違いではないはずだから。

「ただいま」

人が人に対して帰ってきた時に言う言葉。

自分は今たしかにここにいると伝える言葉。

それを俺は口にした。

ただいま

そう言われた。それは帰還の言葉だ。待っていた人に対して待たせていた人が言う言葉。

待っていた？

私は待っていたのかー？ そうだ、待っていたはずだ。

だからこうしてお見舞いにもきているし心配もしていたのだ。

それが果たしてあの時の彼女との約束のためなのか、自分自信が純粹にそう思ってい

たのか、

いや、今はいい――

とにかく、まずは

「おかえりなさい」

ただいま。と言われたのだ。そう返さなければな。

最初の日

乃木さん改め若葉との本当の対面を果たした俺はそのあとすぐに焦ったように入ってきた医者や看護婦に囲まれてすぐに検診が行われた。

まあ俺はかなり長い時間眠っていたらしいから色々と面倒なことになりそうだなとは思っていたが……………

「長かった……俺一応病人だよな？」

ベッドの上で思わず一人愚痴る。体の状態から精神状態、それから一般常識の確認、言語能力の確認までそれはそれは様々な検診をした。

健康の確認のためにやっていることで不健康になるかと思った。結構まじで。

いや、せめてこれで終わるならまだよかった。もうなんかこのままぐっすり眠りたかった。

しかし俺にそんな安息の時は訪れなかった。

今度はえーっと大…赦って言ったか。そのよくわからん組織の人たちに俺がどうなって今ここにいるか、世界の現状。怪物どものこと、勇者のこと。巫女のこと。それ

はもう多量の情報を一気に得た。

『終末戦争』

そう大赦では呼称することになっていくらしい。『終末』——なんとも嫌な言葉だ。

しかし現に今人類は首の皮一枚繋がった状態で存続し、この四国という小さな生活圏で暮らしている。

四人の勇者。

乃木若葉

高嶋友奈

土居球子

伊予島杏

一人の巫女

上里ひなた

彼女たちによって世界は守られたんだと。そう教えられた。

そして四国意外にも——春が守り桜が導いていた地域意外にも勇者と巫女によって守られていた長野県の『諏訪』という地域があった。

あった。それはもう過去の話であり今は違うということを表していた。

バーテックスの大侵攻によって結果が破られ諏訪は壊滅。そこにいた勇者や巫女とも連絡が途絶え大赦は諏訪に生き残っていた人類を全滅とした。

北の大地と南西諸島の方から微かに人類の生存反応が確認されたがそれを確かめるすべもなく『この四国の外は炎に包まれた世界』であると。

ひどい話だ。そう思った。それはこの世界や人類の現状のことを言っているんじゃない。

もちろんそれも大変な話だとは思う。

壮絶な消耗戦の末に全滅した諏訪の勇者と巫女、そして戦いの末に命を落とした三人の勇者。天の神の怒りを鎮めて和平を結ぶために行つたという奉火祭で炎の中に消えて巫女たち。

彼女たちを大赦の人間は英雄だと。我々人類を守り救つた偉人だと。そう言った。彼女たちの犠牲を尊いものに見ている。立派に役目を果たしたと。

俺はただの人間で人類のためにか平和のためにかそんなことを第一で考えられるほど立派な人間じゃない。

だからだろうか。

ふざけるな。

ただ一言そう思った。思わず口に出して叫びそうになつた。

でも必死に我慢した。そして今度は俺が大赦に対して自分の経緯を話した。あまり

自分から話したい話でもないし、こいつらのことは現段階であまりいい印象を持っていない。

でもそれはできない。彼女たちの戦いを埋もれさすことなんてできない。俺は確かに約束したんだから。だからなんとか言葉を紡いだ。

それに対して大赦は特に何も言わずただ俺の言葉をパソコンに書き留めるだけだった。

やがて大赦は言いたいことだけ言ってさっさと部屋を後にした。

『勇者様。我々をお守りくださり心から感謝いたします』

まるで定型文を言うかのようにこの言葉を口にして。

なんだか妙に寝付けなかった。

この比較的広い病室に一人になってどれだけの時間が経っただろう。時計はある。時間は確認できる。

しかし不思議とそんな気にはならなかった。

体は疲れているはずなのにそれに心が反発しているようだった。

頭の整理がなかなか追いついてこない。三年も眠った状態から目覚めていきなりあれだけのことを聞かされたのだ。

正直若干パニックっている自分がいる。

今もこうして香川の病院のベッドに寝そべっている俺は本当に現実の俺なのか、そもそもここは本当に現実なのか。

要は色々と不安定だ。ここに俺を知っている人はいない。俺が知っている人はいない。

乃木若葉——彼女に関しては俺が一方的に知っているだけ、俺が勝手に恩を感じているだけ。

それで十分なのだ。その恩を少しでも返していければ、それが今の俺の生きる意味。理由、その全て。

でもひとつだけ、たったひとつだけブレずにそこにある、確かなものがあつた。ちらつと横目で右腕に付けられた赤い紐を見る。

覚えている。忘れてなんかいない。

俺の罪を認めてもなお、生きる——そう言ってくれた彼女を、不器用ながらも優しく微笑んでくれた彼女を、再会の約束をした彼女を確かに覚えている。

郡千景。若葉やほかの勇者たちとともに四国を守った勇者、そのはずだ。いや、確か

にそうだ。

だったら、どうして大赦から千景の名前は出なかったのか——

それがひどく心に重くのしかかっていた。大赦の説明にはまるでそんな人は元からいなかった、そんな説明だった。

一言たりとも千景の名前は出てこなかった。

聞こうとも思った。でも聞けなかった。聞かなかった。

どちらなのか自分でもよくわからない。

「……………はあ」

ため息の一つもつきたくなる気分だった。

「おはようございます」

翌朝早く一人の女の子が訪ねてきた。物腰柔らかそうな綺麗な女の子だった。

「あ、おはようございます」

そのせいかつい敬語で返事してしまった。

「敬語じゃなくてもいいですよ。年齢はあなたの方が上みたいですから」

言いながら椅子にゆっくりと座る女の子。

「あーじゃあ聞くけど…君は誰？」

これを聞くのは少し勇気が必要だった。でも聞かねばならなかった。

それがけじめだと思うから。

一瞬ためらいながらもそれでも言った。朝の気持ちのいい空気感の病室を静寂が包む。

数秒して

「上里ひなた。それが私の名前です」

優しく言い聞かせるように言った。

「上里……ひなた……」

知っている名前だ。昨日初めて知った名前だ。大赦の人間が言うには『初代勇者の導き手』となった巫女であるらしい。

だが俺自身を知っている人ではない。

「見覚えは、ありませんかー？」

「えっと、うん。……ごめんなさい」

「頭をあげてください。私のことはいいですから。大事なのは若葉ちゃんのことをしっかり認識していてくれたということですから」

「…若葉……………」

彼女の言葉にとっさに反応していた。昨日、俺が目覚めて目の前にいたあの子、ああ大丈夫だ。忘れてない。しっかりと認識している。

『おかえり』

そう言ってもらったんだ。

その『おかえり』はきつと俺に合わせて無理に言わせてしまった物だと思うが、それでも俺にとつては嬉しかった。

「ああ、うん大丈夫。すっかり覚えてる。思い出させてくれた——上里さん」

「ひなたで構いませんよ」

「じゃあひなた。郡千景って人…知ってるか……？」

あつたばかりの、しかもあつた覚えもない人いきなり聞くことじゃないとは思う。でもこうして俺に会いに来ているということは、少なくとも大赦、巫女、勇者、その誰かには関わっている。

そして昨日の大赦とは違ってひなたには人間らしさがちゃんとある、そう感じた。まともに取り合ってもらえる。

表情を見てそう思ったのだ。

だから、聞かずにはいられなかった。

「……………」

俺のこの質問は予想外だったのか黙ったまま少し驚いたようなひなた。

ということとは——

「知ってるのか!?」

体を動かして詰め寄ろうとするが、そもそも体が思うように動かない。危うくベッドから落ちそうになる。

「あ…わ、わるい…」

ひなたがとっさに助けてくれた。彼女はどこか意味ありげに、そして少し悲しげに微笑みだけでそれ以上は何も言わない。

なぜかその微笑みが妙にチクつときた。

「あなたは…古木さんは…知っているんですね。千景さんのことを」

「知っている…うん。そうだな。俺のもう一人の恩人なんだ。千景は」

「恩人——」

「ああ、腐りかけて自暴自棄になってた俺の心を引き止めて、『生きろ』って言ってくれたんだ。自分だけの幸せを見つけてほしいって。そう言ってくれたんだ」

「そう…ですか。千景さんが、そんなことを。そんな—ことを…」

胸が締め付けられる思いだった。いや、だって—いきなり目の前で涙を流されちゃ何も言えなくなってしまう。

「す…すいま…っせん……いきなりこんな…」

なぜだろう。ひなたの流す涙の量は増える一方なのに、それは悲しい涙に見えなくて、でも嬉しい涙にも見えなくて、いろんな感情がごちゃ混ぜになったそんなもの。

でもきつと、それはとても尊いものなのだ。

俺は黙ってひなたが泣き止むのを待っていた。しばらくしてひなたは泣き止んだ。目の周りが少し赤くなっていたが、もうひなたは笑っていた。

「もしよろしければ聞かせてくれませんか。あなたと千景さんのこと」

「そんな大した話はできないよ？俺だって千景と現実で出会ったことはないんだ」

あの空間でどれほどの時間をしていたのか、正確な時間など分からないが、俺はもつと話したいことがあった。千景もそうだったのかもしれない。

「それでも構いません。聞かせてほしいんです。会ったばかりの私がこんなことを言うのもおかしいことかもしれませんが、お願いします」

昨日の大赦の説明で、彼女、上里ひなたのことは一通り聞いている。でも千景の名前が一切出てこなかったからひなたと千景がどんな関係だったのか、俺には見当もつかない。

どんな別れかたしたのかも——俺は知らない。

正直少し怖くはある。大赦が千景の名前を一切出さなかったのには俺が知らない理由があり、その理由がおそらく、あつてほしいことではないが、いい理由ではないのだろう。

でも俺は、知ることから始めなければいけない。

彼女のことを——彼女たちのことを知って一つずつでも、少しずつでも恩返しをしていくのだ。

それが俺の——俺だけの幸せを見つけてることにつながると信じて。

言葉の意味

「よ、ちよつと久しぶりかな？元氣してた？」

「いや、誰だよ」

とっさにつつこんでしまった。初対面の人に対して。∴単に俺が一方的に知らないだけかもしれないけど。

「その様子だと大丈夫そうだね。あとアタシは安芸真鈴。上里ちゃんと同じ大赦の巫女。よろしくね」

大赦の巫女。その言葉に一瞬息を飲む。

つまりこのフランクな彼女も色々と事情を知っている人間ということ。

さきの上里じゃなくてひなたとはだいぶ違うテンションでこられたから敬語どころかタメ口になってしまった。

「俺は古木曆。よろしく」

まあそのおかげか特に気をはることもなく話し出すことができたんだが。ぶっちゃけひなたと話してるとなんだか男としての価値を凶られているような気がした。もちろん気がしただけ（深い意味はない）。

「ふむ……変な名前ね」

「俺に罪はない」

そういうことは親に言うべきだ。……まあ俺が子供の頃に亡くなっているんだが。

「でもいい名前じゃない。うん。綺麗な名前」

勝手に理解して勝手に頷く茶髪の彼女。

「それ男に対して言うのはどうなんだ？」

「褒めてる、褒めてる」

まあ、名前弄りは正直それなりに慣れてる。

正直男につける名前じゃないよな。そもそも女でもこの名前を自分以外見たことない。

「で、その真鈴は俺にどんな要件だ」

「つれないなあーこれでもアタシもちよくちよく見舞い来てたんだからね。いつ来ても

それはもう気持ちよさそうに寝てるからここぞとばかりに、愚痴やらなんやらを聞いてもらってたけど」

「俺は寝てる間に何も聞かされたんだ…」

「暦君も相手にしたんならわかるんじゃない？「大赦」の人間たちがどんな人たちなのか」

「……………」

真鈴の意図するところはわかる。

「そう…だな。たしかに違和感は色々あった」

違和感というのは少々表現をぼやしている。より正確には『異常』というのが一番感じたことだった。

まるで一瞬のカルト教団のような。「神樹」「勇者」この二つの単語を大赦の人間と話しているとそれはもう多く聞いた。

そして奴らがその二つを深く、俺には異常なまでに崇拜しているのは嫌ほどわかった。

「まあそれは大赦だけの話しじゃないんだけどね。この四国全体がある意味異常——つて言ってもいいのかも」

「……みんながみんな大赦の人間みたいって…ことか」

「大赦側のアタシがそれを言うのもなんなんだけどね。あはは」

「いや、あははって」

「でもね、それでもアタシは人間が、人が生き残ってよかった思ってる。そうじゃなきや今こうして暦君と初めてあった時から三年間経ってようやく話せてる今の状況もあり得なかつたわけだからね。まことに勝手な話だと思っけどね。自分でもさ」

真鈴という人がどんな人なのか、結局俺にはイマイチ理解できなかつた。

ひなたにしたってそうだ。

千景にしたって

若葉にしたって

みんながみんな多くの思いを抱えて、それでも生きてる。生きていることがよかつたと思つている。

少なくとも俺にはそう感じられた。無論それは俺が勝手に思っているだけであり、そこには証拠も確証も実証もない。

くくく

「気分はどうだ？」

「おう、体が思うように動かないこと以外は大丈夫だな。多分」

「なんだ□どこか違和感があるところがあるのか?!? だったらすぐに医者をも！」

「おお待ち待って待って！落ち着け！冗談だから！」

「……本当か……？」

「うん、本当」

「そうか……なら——いいんだ」

心なしか胸をなでおろしたようにしてパイプ椅子に座る若葉。からかい甲斐はありそうだけどあんまりたちの悪いことしたら冗談で済まなくなりそうさ。

あとひなたが怖い。

千景も怖い。(どこで嗅ぎつけてくるかわからない)

真鈴は……むしろのつてきそうである意味たちが悪いかもしれない。

「若葉は心配性だなあ」

「……三年も眠っていたんだ。それにようやく目が覚めたと思つたらまたいきなり意識を失つて、それでいきなり今度はピンピンしてるんだ。心配もする。……もう仲間を失い

たくないしな」

仲間。若葉はそう言った。

「いや、俺はただお前に恩をもらっただけの人間でそんな大層なものじゃないぞ」

「お前がそう思っていないくとも、私はそう思ってるんだ。……私以外に勇者の生き残りがいたなんて思いもしなかったからな」

「……………」

ああ——なるほど。少し納得いった。

だから若葉は俺のことを、俺が曲がりなりにも『勇者』だからこうして話してくれてるわけだ。

でも

「若葉」

「どうした？」

「俺は勇者なんて存在じゃないよ」

ほんの少し前まで柔らかな雰囲気だったのが嘘かのように瞬間空間が凍った。

若葉は一体俺が何を言っているのかわからないといったような、面を食らった顔をしている。

「俺は、そんなんじゃないよ。ただ助けたい人がいて、ある人から力を借り受けて、それ

ただだ」

「だ、だが……それは勇者としては……当然のことだろう……」

「違うよ。俺は勇者としてとか、人類を守るためとか、バケモノを倒すためとか、そんなもの微塵もなかった。今もない」

この気持ちはあいつらが生きていた時からずっと変わらない気持ちだった。

むしろ今は大赦という存在を嫌な意味で強く認識してしまったせいにより強くなっている。

「若葉が勇者としてこの四国を守ったのは聞いたよ。それは素直にすごいことだと思し、今の立場のことも聞いた。『勇者』としてはそれは正しいんだろうけど。俺はそういうんじゃない」

横目に若葉の顔色を伺う。何か言い返したいのに、言葉が見つからない。そんな感じだ。

あー………これはあんま言わない方が良かったかな。

少なくとも若葉はいい思いをしていないだろう。

「若葉聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「え……あ……ああ………」

多少、若干、いやかなり無理があると思うが話題を変える。

…あー何してんだが。

相手は初代勇者なんだぞ。しかも唯一の生き残りで英雄扱い。

そりゃこんなこと言ったら困惑するに決まってる。

……ダメだなあ。俺。

「……………」

自室のベッドに寝転がって天井を見上げる。

特に意味はない。いや、意味はあるのかもしれない。

ただその内容がいかにピンとこない。

ただ頭の中に浮かんでいるのは私とあまり身長の変わらないあの青年のことだった。

年齢は、一応19歳ということだから私の一つ上だが、三年もの間寝ていたためか不

思議と年上だと感じない。

感じるも何も私は彼のことを——古木暦のことを知らない。

もつとも大赦が得た情報をひなたから聞いたからそういう意味では知っているとも

言えるのかもしれない。

しかし、どうしても実感が湧かなかった。

又聞きだからだろうか？

そもそも暦自身とまともに話したのが今日が初めてだったからだろうか？

理由はいくつか思い浮かぶが心にはまっぴりこない気がした。

なんだか気持ち悪い。鍛錬にも身が入らなかつたし、食事もあまり味を感じなかつた。

ふと気をぬくと自分が今何もしているのか忘れそうになる。

感情がごちゃまぜになって、はつきりしないものになっている。

はつきりとした考えがうまく浮かんでこない。

「なんで…」

天井を見上げながら呟く。

「あんなことを…」

『俺は勇者なんて存在じゃないよ』

わけも分からず若葉はこの言葉を脳裏で何度も繰り返した。

女神か天使か

夢を見ていた。

といつても特別変だったりおかしかったりすることはない。

なんて事のないごく普通の日常の夢。

ただそれがとても幸せだった。

ただあの時は俺はそれが何者にも変えがたい幸せだと気付いていなかった。
無くしたらもう同じものは取り返せない物だと。

「お前が読書なんてどうした？熱でもあんのか？冷えピタいるか？」

「普段めつたにされない心配をこんな不本意な形でされたくなかった！」

「いや、だって何事にも動き回ってないと落ち着かないようなお前が……なあ………？」

「そこを疑問形で返さないでよ!!?.....全く.....料理の本読んでたの」
「ふーん。なんで?」

「そりやくまあ、うん」

「?なんだよ?。そんな顔を赤くすることでもねーだろ」

「ふ、普通に少しぐらいは料理できるようになりたいなあ〜って思っただけ。うん。それだけ。本当に」

「別にわざわざお前ができるようにならなくても桜に作ってもらえばいいだろ?」

「たしかに桜の料理は美味しいけど.....たまにはお姉ちゃんとして代わりに料理ぐらいはさ。ほかの家事だって基本はあの子がやってくれてて、あたしは手伝いぐらいしかできなしいし.....」

「だったら俺が作ってもいいんだけどな」

「.....暦ってそういうこと平気で言ったりするよね」

「平気も何も、純粹に思ったことをそのまま口に出してただけだからなあ」

「それが恥ずかしくないのかって言ってるの。...まあいつか。ほら、勉強の邪魔だからあつちいってて。しっし」

「へいへい。...なんか作れるようになったら食わせろよ?実験台になってやるからさ」

「.....ありがとう」

深淵に深く沈んでいた意識がゆつくりと覚醒をし始めるのがなんとなくわかる。

それが妙にゆつくりなのは寸前まで見ていた夢のせいだろうか。

夢が後味を残しているだからなのだろうか。

その後味の残し方が良いものなのか、悪いものなのか、俺にもよくわからない。

体も動かさずそろりと瞼を開く。といっても一気に開くこともなく半分ほど開いただけの状態だが。

正直このまま二度寝をしたい気がしなくなかったが、まだあやふやな視界の中に違和を感じ、それを寸前で押しとどめる。

眠気に抵抗しながら徐々に瞼を全開まで開く。

若葉だった。

「……………」

あー昨日の今日でか。

…どうしよう。

ただでさえ昨日のあの子の会話は気まずいことこの上なかつたし後味も悪かつた。

だからもしかしたら若葉はこの病室にしばらく来なくなるんじゃないかとさえ多少思った。

しかし若葉は当たり前のように普通にそこにいた。

どんな題名のものかはわからないが本を読んでいた。真剣な眼差しで。没頭するよううに。

そのせいか、そのおかげか、若葉は暦が起きたことに気がついていなかった。

…まあ特に話しかける理由もないか。なんかすごい集中してるみたいだし。とりあえず若葉が気がつくまでそのまま傍観することを決めた。

くくく

「ふう……」

若葉が小さく息を吐いた。傍観を決め込んでから数分ほどして若葉は本を閉じた。

「面白かったぞ、杏」

そう一言つぶやいた。その表情はなにかを懐かしむような、そんな感じがした。

杏。おそらく勇者としてもに戦った伊予島杏のことだろう。

彼女からオススメされた本だったのだろうか。

「……ん……？」

そこで若葉が何か異変、というか違和感に気づいたのか、目線を逸らす。

「……………」

「……………」

傍観していた俺と目があつた。そのまま数秒間沈黙が互いの間に流れる。

ま、まずい。どうにかしないと……

あーえーつと。あー

「おはよう」

……間違いではないよな。

「あ、ああ。おはよう……」

「……………」

再度沈黙が流れる。おお……これはまずい。そもそも何故俺は若葉が俺に気づいた後の対処法を何も考えていなかったんだ。

バカなのか。バカなのだろう。

ほんの少しの希望として若葉の方から話し出してくれることを考えるが若葉は言葉が詰まって出てこない、あるいは出かけていてそれを寸前で止める。どちらにも見て取れるようだった。

しかしそれはテンパっているとか、焦っているというよりも、『不安』。そんな風に見えた。

結局程なくして入ってきた看護婦と入れ違いで若葉は帰っていった。

ろくに会話もしないまま。

ちなみに看護婦が来るよりも前に若葉が病室に入れた理由は聞かなかった。勇者特権とかだろうか。

はあ。

「っ……………」

思わずうめき声が出そうになるのを歯を食いしばって我慢する。

これは決して俺が新たな病気を発症して一人苦しんでいるとかじゃなくて、とどのつまりハビリをしている。

三年もの間意識を失っていたのだ。体はまだ動かすのに違和感を多く要する。

それを直していくためにはリハビリをするしかない。

「くそ……………想像以上に動かねえなあ…」

なかなか広いリハビリ室で一人悪態をつく。自分に対して。

ちなみに大赦は、というか病院側は看護婦をつけて俺のリハビリを手伝わせるみたいなことを言っていたが、それは俺の方から丁重にお断りしてした。

基本的に俺はあまり他人と関わりたくないのだろう。

今朝俺の病室で本を読んでいた若葉や、昨日初めて存在を認識した巫女のひなたや真

鈴はまた別だ。

彼女たちは事情を知っている。それは俺のことやこの限られた世界のことなどを含めて色々と。

それに若葉と同じようにあの二人も俺の見舞いに来てくれた。

自分でもめんどくさいやつだとは思う。いつからこんなめんどくさい性格になったのか。

両親が死んだ時からだろうか。それとも春や桜と出会ってからだろうか。

どちらにせよあえて直していこうとも特別思わないが。

「はあ……はあ……はあ……」

くそ、いかんせん体力がなさすぎる。必死に腕に力を込めたら足がぐらついて、足に入れたら腕がぐらつく。

しかもたいして動いてもいないのに肺がきつくなつて呼吸が荒くなる。

「っ……………」

バランスを崩してリハビリのポールから転んでしまう。

とつさに受け身をとったお陰で特に痛みはなかった。

ただポールとポールの隙間で仰向けになるといふなんともいえない体制になつてしまったが。

「先は長いな……」

先のことを思うと気を落としそうになるが、だからといってじゃあやめます。とはで
きない。

なんとか体制を起こそうと力を入れる。

「あの……大丈夫ですか……？」

ところが思うように起き上がれない。

「えっと、お医者さん……呼んできましようか……？」

とにかく上半身をなんとか起こしてそこからポールを掴んで足を……

「あ、あれ？聞こえてない……？」

ぐお……体半分さえも持ち上げるのが苦しいなんて……

「あの……！」

ん？

突然耳に聞きなれない声が入ってきた。

未だに仰向けに倒れた状態のまま顔だけ声がる方向に向けると

——女の子がいた。

小学生？中学生？

とりあえず女の子がいた。

「どうぞ？」

柔らかい微笑みを浮かべながらそつと手を差し伸べる。

女神様……つてのは流石に言い過ぎだが、天使だったら該当するかもしれない。

「あの……」

「あ、悪い天使様」

「……え………？」

やべ、口に出てたか。

「あー気にしないでくれ」

とりあえず差し出された手を掴む。

しかし、あれだ。

女の子の手というのは俺が思っていた以上に小さく繊細だったというのもあるし、等の俺がこんな情けない状況というのもあるのだろう。

「きゃ……」

「うお……」

加減が効かず強い強くその手を引いてしまった。それにより天使……じゃなくて女

の子は体制を崩してしまい俺の方に倒れて来る。

そして

そのままおでことおでこでござつんこを遂げたのだった。

恋愛小説

「うう……………」

「あたた……………」

多少顔を歪めながら声を漏らす。結構痛かった。無論今の俺のすぐ近くで少し涙目になりながら額をさすつている少女に罪はないのだが。

でも、まあとりあえず。

「えーつと、大丈夫か？」

「ふえ……？……………あ、す、すみません！」

痛がつていたのが嘘かのようにその場を離れる少女。

その瞬間柔らかな優しい香りを感じたのは死んでも口には出さない。

というかそんなことを口に出す勇氣はない。

「いや、いいんだ。うん」

「いやいや、私とんだ余計なお世話を」

「それは俺が加減も考えずに手を掴んだだけだから」

「で、でも……！」

「その代わりというのもただけだよ」

「私にできることならなんでも！」

うーん……年頃の女の子が声を大きくして言う事ではないなあ。

お兄さん心配しちゃうぞ。…気持ち悪。

「もっかい手貸してくんない？」

「ふえ？……あー！」

大変なことに気がついたかのようなテンションで再び駆け寄ってきて手を差し出す少女。今度は細心の注意を払ってゆつくりと起き上がる。

ちなみにその時にも優しい香りがした。でもそれはなんだろう……不純な気持ちになるというよりは、落ち着くような、そんな感じ。

それはそれでおかしいかも……

「つと、ありがとね」

「はい……えつとどこか体調が悪くなったとかでは……？」

「ううん。ちよつとバランス崩して転んだだけだよ」

「その割にはなんだか肩で息をしているような……」

「はあ……はあ……んなこと……つあ……ないよ……」

「そんなわかりやすく☒」

「冗談だよ」

「随分と迫真の演技でしたよ……」

「古木様！」

俺の名前を若干叫び気味にしながら看護婦が小走りで近づいてくる。

「ご無事ですか、どこかお怪我は？。やはりまだリハビリには早かったですでしょうか」

「ああーちよつとバランス崩してこけただけですからそんな気にしなくても」

「しかし方が一ということもあります。すぐに病室に戻りましょう」

看護婦二人が俺の両サイドをがっしり掴んで車椅子に座らせ、さっさとリハビリ室を後にしようとする。

「つたく……めんどくせえ。」

そう思わずにはいられなかったがこちらとしても一人でリハビリぐらいさせて欲しいと半ば無理に要求していたのだから、このぐらいのは仕方ないのかもしれない。

「あーでも。」

「ちよつと待つて。えーつと、改めてありがと。助かったよ」

お礼はしっかり言っておかなければならない。その時、その場所で。その人に言いたかったことをしっかり言う。

こんな俺が目標、いや……決め事になっている数少ないことだ。

車椅子に座らされながらというのがなんとも締まりが無いもので情けないのは置いておくとしてだ。

少女は改まってお礼を言われたのが気恥ずかしかったのか少し頬を赤く染めている。

「そんな、当たり前のことをしただけですから」

しかし笑顔でしつかりとそう言葉を返してくれたのだった。

それが嬉しくもあり、心の奥底で羨ましく感じてしまった俺は最低だ。

病室に戻ってみると景色の違和感に気がついた。本が一冊ほど置いてあるようだった。

不思議に思つて近づいてみる。車椅子の操作にはなかなか慣れない。

これ結構難しいぞ。

本の上に小さな置き書きがしてあった。

『気が向いたら読んでみてくれ。無論無理には言わない』とだけ書いてあった。

「若葉……だよな」

勇者や巫女でもない限りこの病室には入らないだろうし、ほとんど会話がなかったが（挨拶はちゃんとした。…挨拶が会話に入るのかどうかはまたどこかで議論するとして）若葉は今朝俺の見舞い？に来てくれていたしな。

車椅子に乗ったまま踏ん張って本を取ってみる。

表紙を取ってみると……ふむ……どうやら恋愛小説のようだ。

………え

「表紙を見ただけじゃわからないよな……」

あくまで表紙だけ見てなんとなくそうっぽいなと思っただけなのだから中身は全然関係ないものでしたという線も大いにある。

数分後

「うん」

これ恋愛小説だ。

…まじか。いや、まじかってのもおかしい…のか…？

ただの俺の勝手なイメージだからな。そりや実際は違いましたなんてことはたくさんあるだろう。

あくまで、あくまでその勝手なイメージではあるが——

「若葉……………恋愛小説読むのか…」

若葉は女性だ。それに年は俺の一つしたの18歳なのだ。そりや恋愛小説の一つや二つ読むだろうそうだろう。

そうだ。理屈はいくらでも思いつく。ただその出来上がっていった理屈をイメージがぶち壊していく。

なんか若葉はこう……………凜としてて……………堂々としてるからどうしてもそんなイメージが持てないのだ。誠に勝手ながらも。

てことは、今朝真剣な顔つきで読んでたのも恋愛小説だったり…？

……………人って本当にわからないもんだ。それが面白いのかもしれないが、めんどくさくもある。と思う。たぶん。

くくく

「……………」

無言で本を閉じる。なんとなく天井を見上げる。

「結構面白いな」

誰に向けてでもない感想だった。白状すると感想が思わず口から出てしまっただけではあるのだが。

まだだいたい三分の一程度しか読んでいないが予想以上に面白い。初めはなんとなくこの後特別することも無いと思つて表紙を開いて見たが、なかなかいいものだった。時計を見てみるともうもう昼前だった。それなりに時間が経過している。

俺の読書のスピードはお世辞にも早いとは言えない。でも読書は比較的好きだ。だから活字に対して嫌悪感とかそういうのはもともとないが、恋愛小説をちゃんと読んだのは初めてだった。

改めて再び表紙を見てみる。

「あれ、これ一巻か」

どうりで。読んでた最中も思ったからな。これ一巻で終わるのか？つて。

……もう少し読むか。

結局昼食が来るまで読んでいた。昼食後も読んでたけど。

日が沈みあたりが闇に包まれるころ。つまり夜。

少し早めの夕食を食べ終えた俺はぼーっとしていた。一応考え事もしているからぼーっとしているとは言えないかもしれないけど。

とりあえず今日の出来事を思い返していた。

朝っぱらから若葉と気まづくなって、リハビリしてたら優しい女の子に助けられて、若葉が置いておいてくれた本を読んで——もう夜。

医者の話だとそれなりに長い時間のリハビリが必要になるかもしれないらしいので、入院生活はもう少し続くだろう。ということとは必然的にヒマな時間が出て来るわけ。はじに置いてあった本を手取る。今日読み終わったばかりなので再び表紙を開くことはしない。

「面白かったよなあ」

しかしこれはあくまで一巻。つまりこの後には二巻、三巻と続くわけだ。

「……………」

俺は意を決して備え付けてあったペンと小さなメモ用紙を取り出した。

そのあとは時間が続く限りリハビリ室でリハビリをしていた。まだ結構きついがこれも慣れだろう。こういうのは長く続けていくことが大切だ。

程なくして消灯時間になり病室に連行された俺はリハビリで疲れたせいかすぐに眠りについた。

「よっす！タマの名前は土居球子だ。よろしくな！」

「もうタマツち先輩、初対面の人に対して失礼だよ。はじめまして、伊予島杏です」

気がつくとおかしなところにいた。

その意思

「あれ？反応がないぞ。どうした？」

「もう、タマっち先輩が突然驚かしたりするからだよ」

「いやーここはひとつ先輩勇者としてインパクトを与えておこうと思つてな」

「威厳とかならともかくインパクト与えてもしょうがないでしょ。というか年齢だったら古木さんのようが上なんだよ？」

「あ、そつか。じゃあ威厳を保ちつつ年上へのリスペクトを忘れない感じでいこう！」

「なんだか難しそうだね」

随分と刻みよく会話をしてくれるものだ。まるで熟年の夫婦かのよう。まあ目の前でそれを繰り広げているのはどちらも女の子なわけだけれど。

にしても、聞いていた通りだ。千景が教えてくれた通りのとても仲の良い子たちだ。

「それで、仲がいいのはとてもいいことだけど、状況も説明してくれたりするか？」

「当然だ！タマと杏は姉妹みたいなものだからな」

「返答になってないよ。それからーそうですね。説明しないと」

「てかよくそんな落ち着いていられるな。驚いてないのか？」

「まあ最近いろんなことが身の回りで起こりまくってるからな。多少は耐性もつく」

「そんなもんか？」

「そんなもん」

「絶対そんなもんじゃないです」

「え？」

「タマつち先輩まで反応しないですよ」

「いやあ〜」

「そこまで合わせなくていいから。あつて数分で打ち解けすぎですから」

それはたしかに。どこか惹かれ合うものを感じなくもない。同士よ。

「あと俺は古木暦。こんなサイズでも一応歳的には19らしい。よろしく。伊予島、土居」

「おう！よろしく。年上の後輩！」

不思議なフレーズだ。てか俺まじで三年寝てたからそんな感じ全然しないんだよな。未だに気分は中学生。ナウでヤングな。

「よろしくお願いします。：私たちのこと知ってるんですね」

伊予島が少し表情を曇らせる。ほんの少しだけ。

「そうだな。知ってるといえば知ってる」

「それは、どのような形で？」

「初めて知ったのは大赦からの説明を受けてだな。そこでお前らを含めた四国勇者五人のことを初めて知った」

「そう、ですか。あらがとうございます」

と言いつつもまだ何かを気にしている様子は見て取れた。人間つてのは生きてようが死んでようが顔にできるもんなんだな。

不思議と再会の約束をした彼女のことを思い出した。手首にはたしかに彼女からもらった？ 預かった？ 赤い髪留めがあった。あいつあんなところにいて困ってないだろうか。髪留めの変えなんてあるとは思えないが。

「それじゃタマたちがどうなったかも知ってるわけか。古木先輩」

「まな。ちなみに若葉を除く他二人の勇者たちのことも聞いてるぞ。土居後輩」

「よし、じゃあタマが古木先輩に説明しよう。ここはだな」

「うん」

「じゃかじゃかじゃかじゃか」

まさかのセルフドラマロール。久しぶりだな聞くの。

「じゃかん」

あ、終わった。

「神樹様の中だ!」

「……なるほど」

まあ大方そんな感じだとは思ってたけど、改めて言われてみるとなかなかにおかしいことだ。確証はないが千景と出会ったあの不思議空間そんな感じのやつなのだろう。

頻度多くね。

「驚かないんですか…?」

「驚いてはいるよ。多少は」

「多少ですか」

「なかなかいい根性した先輩だなー」

「千景とあったのもこんな感じの場所だったからな。雰囲気はだいぶ違うけど」

あつちにはもつと全体的に暗いというか黒いというか。でも不思議と嫌な感じはしなくて。なんかむずいな。

「……………」

「……………」

あれ。なんかおかしいなと言っちゃったか?

予想外の言葉だったのだろうか。二人揃って鳩が豆鉄砲を食らったような顔して。

「先輩千景にあったのか!!?」

「うお!びつくりした!」

「こっちのセリフだ!」

「どういうことなんですか!!?どこで千景さんと!」

土居と伊予島兩人に肩を掴まれ揺さぶられる。おいばかやめろ。俺は三半規管が比較的弱いんだ。酔うぞ。神樹の中で吐いたら流石に洒落にならんだろ。

「だー!落ち着け。落ち着け。話すから。えーつとだな。かくかくしかじかー!」

とりあえずなるべくわかりやすく簡略化して事の顛末を話した。気づいたら変なところにおいて千景にあつて自分が何者なのか、何をしてきたのかを思い出して、自暴自棄になりかけて、バトルになって、千景のおかげで踏みとどまれて、互いのことを多少話して、再会の約束をして、その時に髪留めを手渡されて

みたいな感じで説明した。

ちなみに全員途中から座っていた。なんかいつものまにかいい感じの椅子とか机とか用意されてたし。立ち話することでもないしな。

「ふへえ〜千景のやつがなあー」

「おかしいか?」

「うーん、正直タマが知ってる千景のイメージとは違うかな」

「そうなのか」

「でもよかったよ」

「……」

「本当に。うん」

いい友達がいるな、あいつには。

「ほんで、伊予島はどうしたんだ。なんかオロオロしてるけど」

「タマと同じ気持ちもあるんだろうけど、これはあれだな」

「あれ？」

「ときめいちゃってるな」

「なんで」

「分かん」

「ふうん」

「というかときめくと泣くの？そなの？」

「ほら泣きやめよ。杏。ほいハンカチ」

「ぐすつ……ありがと……つ……ぐすつ……千景さん、千景さん。よかった。よかったよお」

「どうどうわかったから、タマも嬉しいのは同じだから。な？今度はこつちからも色々説明しないとだろ？」

なんと。今度は見事に立ち位置が変わっているだと。あ、紅茶美味い。

「すみません。古木さん。お恥ずかしいところをお見せしました。ぐすつ…」
「気にするな」

現在進行形で見せてるからな。可愛いけどさ。

「仕方ないな。杏がこんな感じだし、タマが先輩に説明しよう」

「エ、土居が？」

「おいなんて不服そうなんだよ。タマジや不安だったのか？」

「よくわかってるじゃないか」

「わかりたくなかった！」

「じゃあ説明よろしく」

「おい！」

「いいツツコミだ。どつちかっていうとお前はポケ担当っぽいけどな」

「……」

「なんだ、説明してくれるんじゃないのか？」

ふむ。おしゃべりが楽しくてつい調子に乗ってしまった。

自分のことが一応は、一旦は解決したはずなのに今度は若葉と気まずい感じになってしまったからな。

こうやって特になにか気にすることもなく楽しく話せるのが楽しくのだ。神樹の中なんだからもうちよつとなんか考えた方がいいのかもしれないけど、あいにく俺はそんなやつじゃなかった。

特に信仰心とかないし。そもそも神樹の加護とか受けてなかったし。

「…ぷ」

「おい」

こいつ小さく吹き出しやがった。そして伊予島早く戻ってこい。

このままじゃ説明が進まん。主に俺のせいだ。

「先輩って面白いな。生きてるうちに会ってみたかったよ」

「……とんだブラックジョークだ。いい笑顔でしやがって。」

「つよし！切り替え切り替え。こっからは真剣モードでいくぞ。いいか先輩？」

「…おう」

「まず、ここは神樹様の中なのはさつきも言ったけど、そもそもなんで先輩は今ここにいると思う？」

「なんで、か。……………」

考えてみた。そもそも千景の時はどうして俺はあの世界にいたのだろうか。千景はその要因について語ることはなかった。

ただー可能性としては神樹の意思とかそんな感じだろうか。これでも一応勇者の力を受け継いでいる俺の存在は神樹からしたら無視できるものではないだろう。

しかしそんな俺は今もだが、ほんの少し前はより使い物にならない状態だった。その状態は千景と若葉のおかげで脱さられたのだが。

ではなぜ。神樹ではないとしたら、あるいは土居と伊予島の意味。

そんなこともありうるのだろうか。しかし理由がわからない。

「……悪い。わからないな」

「そか。まあだよな」

「教えてくれるか。その理由ってやつ」

「私たちの意思です」

唐突に挟まれる第三の声。まあ伊予島だけど。それにしても、そうか。そこは一応可能性として考えていた。だがそこじゃない。どうしてなのか。俺が知りたいのはその理由なのだ。神樹ならば俺を利用するため。そうして一応は解釈をつけられる。だがあくまで千景や土居、伊予島にはそれが無い。

どうして見ず知らずの俺に、それこそ四国における全ての戦いの途中参加どころか最後にすら参加できず、なんの役にも立たなかった俺に対して一体どうして。

それこそ、考えすぎと言われたらそれまでだが彼女たちは恨み言の一つや二つ言ってしまうてもいいのではないかとすら思える。

俺が戦いに参加できていれば自分は死ぬことはなかったかもしれない。友達を死なせてしまうことはなかったかもしれない。若葉だけを一人残して逝ってしまうことはなかったかもしれない。

彼女たちからすれば俺の立場など関係ないだろうし、たとえ神樹から俺のことを聞かされていたとしてもだからどうした。それで終わる話だ。

終わっていい話なのだ。

「どうして俺をここに連れてきた？神樹の意思ではなくこれがあくまでお前たちの意思なら、なぜだ。なぜ俺をここに」

こんな間違いと失敗を繰り返して今ここにいる俺を――なぜ。

「古木さん。それはあなたが頑張ったからです」

頑張った。頑張ったとはなんだ。伊予島はなにを言っている。

「あなたがずっとずっと……ずっと頑張ってきたからです」

友達はきつとまだ

どんな顔をしたらいいのかわからなくなるってのはまさにこういう状況の時にこそ使うべき言葉だと思った。

嬉しいでも悲しいでもない。良いわけでもないし嫌なわけでもない。

どう返せば良いのかもわからない。

言われている言葉がどんなものであるのかはわかるつもりだ。しかしその意図が——真意が俺にはわからない。

ただ

「なあ伊予島」

「……………」

伊予島は返事をしない。あくまでこのまま俺の言葉の続きを聞くつもりらしい。

「頑張ったならそれで良かったのか？」

「……………」

素直——自分の中ではそう定義付けているものが体の奥底から浮かんできた、そんな感じだった。

口からスツと溢れた言葉だった。

「——そうだな。そうだよな。俺、頑張ったよ」

「はい。頑張りました」

「でもさ……ダメだったんだよ」

この世の中は甘くない。それは何もこんな時代だからとかそんなじゃない。古来から世の中つてのは辛く厳しいものだった。

良い人がいい人生を送る。頑張った人が頑張った分報われる。苦しんだ人がその分見返りを受ける。無くしたくない、失いたくないと思つたものはずっと近くで守られる。

そんな、いい時代なんてひと時もなかった。

だから俺みたいなのは決して特別なわけじゃなく、ただ世の中のダメだった側の一例でしかない。

そりゃあ報われた人も成功した人も助かつた人もいる。

どちらか一方的なんてものは存在しない。

「頑張ったから、結果は望んでたものにはならなかったけど、きつとこれでいいんだ。それでいいとお前は思うのか？」

「……………」

おかしいことを聞いていることぐらい自分が一番よく分かっている。自分がどんな返事をして欲しいのかもわかっていない質問なんてするべきじゃない。

どうしたら納得できるのかなんてわからないのだから。

「古木さん」

伊予島の声は論すようにも叱りのようにも聞こえた。頭の片隅で仏様ってこんな感じなのかなって思ったりした。

こんなことが思えるならあの時ほど——千景と出会った時ほど重症ではないのだろう。あいつには改めて感謝しなくてはいけないな。

「顔を上げてください」

「……嫌って言ったら?」

「怒ります」

「カンカンに?」

「それはもう」

「俺一応歳上なんだけどなあ」

「私もう死んでるんでそういうの関係ないです」

「極論過ぎやしませんか?」

ええい、土居は一体何してるんだ。伊予島の方を見ないようにチラチラと辺りを見渡す。

「zzzzz……………」

ええー……………寝てるし。何あいつ。結構真剣な話してる途中だったはずだよね？

まあ茶化してるのは俺なんだけど。自分のことながらうざいことしてるなあつて思う。自分で書いときながら相手の返答を聞くのを躊躇してるんだからお笑いものだ。

「ちやんと目を見て話をしましょう。大事なことです」

「……もつとも」

恐る恐る伊予島に顔を向ける。

「……………」

思わず黙ってしまった。きつと今の俺はきよとんとした顔をしているに違いない。

どんな神妙な表情をしているのかと思ったら優しく笑っているとは予想などできまい。

なんだかさつきまでの自分がよりバカらしくなってきた。

なんか……かなわねえな……

「いいなんて思いません。私はそうは思いません」

「…だよな」

当然の答えだ。分かっている。わかりきっている。

「結果じゃなくてあくまで過程が大事なんだとか、ダメだったからこそ見えてくることもあるとかそんな凶々しいこと知っているからこそ私は言えませんが」

多くの人は言う。過程こそが大事なのだ。

でも俺はそんなこと言うのはそれで成功してるやつだけだと捻くれてしまう。だから伊予島の言っていることはよく分かった。

ダメだったやつには、失敗してしまったやつには。

失ってしまったやつには結局かける言葉なんて存在しないし、きつとそれでいいんだろう。

何事もいい方にいい方に持って行く必要はない。そんなのいいわけにすらならない。自己弁護ですらない。

「結局俺はめちやくちや考えて頑張つて行動したけど、ダメだった。——でもいいんだ。もう俺はそれを否定しようとは思わない」

千景が俺の目を覚まさせてくれた。俺は大切な人たちを守れなかった現実を全部背負いこんでそれでもなお生きると約束した。幸せになつてみせると言った。

後悔もあるし辛いことだし苦しいこともある。でもそれを忘れることはしない。

今はまだ自分の幸せとか生き方とか、そういうのはわからない。

でも、少なくともこれから恩返ししていきたい人やまた会いたい人が俺にはいる。そう思うだけで救われる。まだ頑張れるかもしれないと思える。

生きようとする理由がある。今はまだそれでいい。

「古木さんの言っていることはわかります。でも……不幸でいつづけることは怠慢だし、幸せになろうとしないことは卑怯です」

伊予島の表情が少し悲しいものになった。

…なるほど。なんとなく分かった。

つまり——伊予島は言い方やニュアンスは違って千景と似たようなことを言いたいのだろう。……にしてもすごいな勇者ってやつは。なんでこういう奴ばかりなんだ。

「ありがとな」

不思議と口元が少し緩んだ。肩に入っていた力が抜けていく感覚がよく分かった。

ああ…よかった。またちゃんとお礼を言うことができた。

しかし等の伊予島は状況がよく分かっていないようだった。

「お前の言う通りだよ。それだけじゃダメだ。否定しないで受け入れるだけじゃダメだよな。うん——俺自身が幸せってやつを探して見つけなきゃだよな」

素直って言葉が俺は最近変に難しく感じてしまうことが多いのだが、今はきつと素直に笑えているんじゃないかと思う。

「なんか…夜余計なお世話だったみたいですね……千景さんですか？」

「よくわかるな 俺あいつとどんな話したかなんて言っていないよね？」

「結構わかるもんですよ」

「そゆもんか」

「そゆもんです」

伊予島がニコツと微笑む。美少女ってのはこんな奴のことを言うんだろうなあ。

「さて、そろそろ向こうの世界に帰ってください」

「なんだよ、唐突だな」

「そんな長居するところでもないですよ？」

「そうか？お前らとお喋るするのは楽しいけどな」

「……どうも」

「照れんなよ」

「照れてないです」

「えー」

「照れてないです」

「はいはい」

「こういうのが楽しいんだよなあ。まあこれ言うともためんどくさくなりそうだから言わないけど。」

「古木さんがそんな風に言ってくれるのは嬉しいですよ。でも生きてるんですから……生きてる人に優しくしてあげてください。たくさんお話ししてあげてください」

「…努力するよ」

「大丈夫ですよ。古木さんとお話しするの楽しいですから」

「大丈夫だとはなかなか思えないけどなあ」

「それでも、絶対大丈夫です」

「お前それ根拠ないだろ」

「誰かが誰かに大丈夫って言う時に根拠がある場合の方がむしろ少ないと思いませんか」

？」

「それはそうかわ」

ん？なんか上手いこと丸め込まれてないか？まあいいか…こいつらとだってもう会えないわけじゃないだろうし。

「よし、帰るよ。またな」

「はい、絶対若葉さんのこと幸せにしてくださいね」

「……………なんか返事しにくいんだけど」

「恩人なんですよね？」

「それはもちろん」

「じゃあいいじゃないですか」

「言い方つてもんがあるだろ」

こいつさては恋愛脳だな。なんとなくだけど。

「タマからも言つとくぞ！絶対若葉を幸せにしろよな！」

「お前いつ起きたんだよ」

「？今起きたばつかだぞ」

寝起きめつちやいいじゃん。ショートスリーパーなの？あれあんま体に良くないって話聞くけどな。

「土居までなんだよ、俺と若葉が結婚するってわけでもあるまい」

そもそも若葉は俺の恩人なわけで。これから俺が恩返ししていかなきゃいけない人なわけで。

「じゃあ言い方を変えますね」

「そうしてくれ」

「んーそだな。若葉のこと頼んだぞ！。こんな感じか？」

「そうだね、じゃあひとまずそれで」

「ひとまずねえ…」

なんだかそれはそれで納得してなさそうなんだけど…

「古木さん。若葉さんのこと頼みます。本当に…本当にいい人ですから」

「泣かせたりしたらタマがぶっ飛ばしてやるからな。覚悟しておけよ！」

………若葉は本当に慕われてるな。

「あいつにはいい友達がいるな」

「何言ってるんだよ。古木先輩ももうタマたちと友達だろ？」

「そうですよ。おしゃべり友達です」

…やっぱり俺は勇者にはなれないな。俺はこんな風にはできない。こんないい人間

じゃない。

「わかったよ。…また来ていいか？」

「どうせなら何か話の種持つてきてくださいね？」

「お土産も頼む〜」

「ああ、——またな」

全く……また増えちまったなあ。生きる理由。幸せになる理由。

友達に土産話持ち帰れるぐらいは幸せにならなきゃな。

ちっぽけな意地

「…………おはよう」

「おはよう…」

目を覚ますと若葉がいた。…今度は前よりはまともに話せるだろうか？

「…よく眠れたか？」

読んでいたであろう本を閉じつつ言葉をかける若葉。俺が寝起きだからだろうか。それとも早朝だからか。なんだか妙に温かさを感じた。

自分でもよくわからない温かさが胸の中にじんわりと広がっていった、そんな気がした。

「……………」

「？」

そんな俺を見て不思議そうに首をかしげる若葉。それが不思議と面白くてクスツと笑ってしまった。

「お、おい。なぜ笑う？」

「いや、いいんだ。——うん、気にしないでくれ」

「そう……か？」

朝っぱらから不審がられてちやかなわないな。

「にしても、若葉つて早起きだよな。昨日もこんぐらいの時間に来てくれてたと思うけど」

「んーまあ慣れてるからな」

「鍛錬のため、とかか？」

「そうだな。毎朝の鍛錬はもちろんのこと立場上色々とすることも多い」

「……だよな」

『だったらなんでわざわざ病室まで来てくれるんだ？』

そんな言葉が口から出かかって引つ込めた。今はまだこうして会いに来てくれるだけで十分有難い。それを感謝することが精一杯だった。

「……………」

俺は二日前に若葉と気まずい雰囲気になってしまった。昨日なんかは挨拶以外は一言も会話をすることはなかった。

でも今はそれなりに普通に話せている。それが今、この瞬間『不思議』などと感じた。言ってしまうえば人間関係なんてそんなもんである程度時間が経てば水に流れるこ

との方がずっと多いのかもしれない。だからこれもそうなだけ。

誰かがそう言えばもしかしたら俺は納得するだろう。

でも、水に流しているものが決して流してはいけないものかもしれない。そう考えるとどうしようもない不安感が突如として押し寄せてくるようで怖かった。

情緒不安定つてのはこんな状態を言うんだろ？とぼんやり考えた。そもそも目覚めてから情緒が安定していた時なんて今のところないのだが。

「おい、……大丈夫か？」

「んあ……あ、悪い。まだ寝ぼけてるかも」

若葉が心配そうな顔で問いかける。俺は多分笑って答えられていない。

こんなんじや伊予島と土居になんて言われるかわかったもんじやないな……そもそもなんで俺はあいつらに何か言われることを想像しているんだ？友達だから？去り際に変なこと言われたから？

『絶対若葉さんのこと幸せにしてくださいね』

……変なこと言われたからだな。間違いない。

「すまない、流石に二日連続でこんな早い時間に来られては迷惑だったな」

「いやそうじゃなくてだな、うん、来てくれるのは嬉しいんだぞ。本当に」

「だが私が早い時間に来るせいでお前が早く起きなければならぬという強迫観念に苛

まれている可能性も……」

「いや考えすぎだから!？」

「む、ここは病院だぞ。静かにしなくてはダメじゃないか」

「え?今の俺が悪いの?」

「いや——悪いのは私だ。ふふ、冗談だよ」

「っ……………」

「ん?」

冗談だよって言った時の若葉のしてやったりみたいな顔がはつきり言うどめちやくちや可愛くて危なかった。気持ち悪い反応するところだった。とっさに顔を晒して正解だったぜ。

今絶対ニヤついてるもん。

「?」

しかも本人絶対わかってないで無意識にやってるんだらうから余計にタチが悪い。別に若葉には一切非はないがそれでもこれはタチが悪い。

春のことを思い出して二重の意味でクリティカルヒットだ。あいつもよく俺に対してイタズラしてはしてやったりみたいな顔をしていた。基本的にどれも成功してなくて勝手にそんな顔してるだけだったのが逆に面白かったのを覚えている。

「暦？なぜ目をそらす」

「そういう気分なんだろうなああって感じじゃないかな？」

「自分のことなのに『じゃないかな？』なのか」

「なんだよ」

「ふむ。そういうものか」

納得しやがった。こいつ天然だぞ！絶対！

「そうだ。暦に渡したいものがあるんだった」

「へ、へえくなに？」

「この置き手紙を見る限りおもしろいと思ってくれたようで何よりだ。持ってきて正解だったな」

そう言つて若葉はそれなりの量の本を取り出した。

「ちよつとした暇つぶしにでもなればと思つてな。いくつか持つてきたんだが……」

それを手にとつて確認してみる。どうやら昨日置いていつてくれた恋愛小説の続刊のようだった。これは素直に嬉しい。

「あの小説面白かったから嬉しいよ」

「そうだろう！そうだろう！あれは私がこれまで読んだ中でもかなりオススメのやつだな！」

「む、ここは病院だぞ若葉。静かにしような？」

「ぐぬ…先ほどのお返しというわけか」

どこか悔しそうに目を細めら若葉。

「恋愛小説以外のもあるんだな」

見てみるとアウトドア関連の本が何冊もあった。

「こういうの好きなのか？」

「ああそれはだな——元々私の仲間が好きだったんだ。それで色々話を聞いていくうちに私もおもしろいと思ったりしてな」

…土居のことか。多分だけど。

「まあわかるよ。俺もキャンプとか結構小さい頃してたからな」

「それを聞いたらきつと喜んで私の仲間も誘っただろうな」

脳裏にチラチラと浮かぶかつての光景。活発な春とそれに何だかんだニコニコしながらついていく桜、釣りをしたり山菜を採ったり料理をしたりして楽しんでいるあいつらを見るのが好きだった。

「懐かしいな」

ダメだな、つい感慨深くなってしまふ。

「…恋愛小説も元々興味なんてさらさらなかったんだ」

「…それも仲間か？」

「ああ、今の私があるのは仲間たちのおかげだ」

そう——はつきりと断言する若葉の横顔はとても凛々しく言ってしまったえばカツコよかった。女の子に対してそう思うのはどうかとも思うには思ったが思ってしまったのだから致し方ない。

でも本当にそう思ったのだ。こんな人だからが勇者になるんだな、こんな人だからみんなの尊敬を集めているんだなって。

でもそれと同時にかすかな嫌悪感——これは明らかに言い方が悪かった。でもそれと似たようなものではあるのだ。自分にはできないことが、若葉にはやれる。

勇者として人間としての差を見せつけられるようで何だか嫌な気持ちが湧いて出てくるようだった。

そしてそんな自分に対して自己嫌悪が生まれる。

——千景が話していたことが痛いほどにわかった気がした。彼女はずっと——
——ずっとこの気持ちに囚われ続けていたのだろうか——

「ありがとな。大切に読ませてもらうよ」

かといって若葉の前でそれは絶対に出したくない。いわば意地みたいなものだ。

「そうしてくれ」

それに

わざわざこの笑顔を曇らせるような真似はあまりしたくない。

こんな休憩

「はあ…っ…疲れた…」

「お疲れ様です。はい、どうぞ」

柔らかな笑みから差し出されるのは綾鷹。やはり選ばれたのは綾鷹だったか…：…個人的には十六茶とかも好き。もちろん綾鷹も好きだよ。

「病人に勝手に飲ませたりして大丈夫なのか？」

「私はそれが許されている立場ですから♪」

「いい笑顔で怖いこと言うっすね…」

若葉との朝の邂逅を無事終え、何だかんだやる気も出ていたので今日も今日とてリハビリ室でのリハビリに励んでいたところ上里ひなたに遭遇した。

ちなみに若葉は去り際に『見舞い品だ。口に会えばいいのだが』と言ってうどん味の飴をくれた。…とりあえず外見は白かった。

『うどんの良さが凝縮された見事な一品だ。ぜひ食べてみてほしい』

なぜかドヤ顔で自信満々に言われたからまあ多分美味しいのだろう。そうであつてくれ。じゃないと今度感想言うとか困るから。

…まあそれは置いてくとして

自分でも知らないうちについて熱中していたのかさつきから全然休憩をしていないということですか一時休憩。今はベンチに腰掛けてひなたと二人座っている。

「で、今日はどういう要件？」

『上里ひなた』

俺が目覚ましてから会うのは何気にまだ二回目なので彼女自身のことを俺が詳しく知っていると到底言えないが、大赦の話を聞くにはかなりの重要人物らしい。神樹様の神託を聞く存在である巫女のトップに立つ人物ってことだけど…

まあなんか若葉とはまた違ったオーラあるしな。正直ちよつと緊張する。

「要件…ですか？」

意味がわからないというような表情のひなた。長い髪がサラツと揺れてなんだかい香りがした。メリツト…ではないですよねはい。

病院の消毒液の匂いに慣れてきた俺からしたらいささか刺激が強かった。若葉と話してる時とかはあんまり感じなかったんだけどなあ。

まあこればかりは男としての本能みたいなものだから致し方ないよね。

「えーつと、何か要件があるわけじゃないの？」

冗談抜きで人類のトップに立つ人物の一人なわけでそんな人が要件もなしに俺なん

かを訪ねてくるとは思えないけど。いきなり拘束されたりしない？

でもその考え方だと若葉も当てはまるよな……あいつ相手だと緊張とかより落ち着くとかの方が先に来る、みたいなことでもあるのか？

「普通にお見舞いですよ？」

「あ、そうでしたか……」

考えすぎてたみたいだ……恥ずかし。

「ふふふ♪」

「……なんか面白かった……？」

「いえいえ、それよりリハビリの方はどうですか？」

ものすごくはぐらかされた感じが強いけど……

「まだ始めたばかりだからね。なんともいえないかな。早く良くなつてはほしいけどね」

「すぐ良くなりますよ」

「はは、そうだといいけどね」

「お医者様もそうおっしゃっていましたしね」

「……俺そんな話初耳なんだけど」

「あら、そうでしたか？」

「……………」

…やっぱりなんかやりづらい。これって完全に向こうに話の主導権握られてるよなあ。

今隣にいる子が何日前に初対面で（意識覚醒後）涙を流していたあの子とはなんですか思えなかった。今はずっとニコニコしてるし。

しかもニコニコつてのも何という…気味が悪いみたいな感じじゃなくておっとりおしとやかみたいなんだけど…それが逆にちよつと怖いみたいな。

「若葉ちゃんとはどうでした？」

「どうって…何が？」

貰ったお茶を一口飲みつつ返答する。疲れた体に緑茶の旨味が広がった。

「ちゃんとお話しできましたか？」

「まあ、うん。できてると——思うよ？」

「疑問形ですか？」

「えつとなんというかき、自分でもよくわからないんだよね」

「曆はいい人だ」

「……………」

ついなかなかリアクションを取ってしまった。ひなたは何を言ってるんだ？

「根拠はないが、私はそう思う。——若葉ちゃんはそう言っていましたよ」

「———何か」

「ええ」

「……………」

なんとなくお茶をまた一口飲む。今度は先ほどよりさらに染み込んできた気がした。味は変わっていないはずなのに——何も変わっていないはずなのに。

「———飴、食べませんか？」

「もらおうかな」

サラッとそう答えていた。いきなりなんだよとも思ったけどそれより先にそう答えていた。

「はい、どうぞ。オススメですよ」

「へえーどんな……………」

うどん味の飴だった。初めて食べた味だけど結構美味しかった。

香川県———通称うどん県おそるべし。

てか若葉にもらったやつより先に食べちゃったよ。

「これ美味しいね…」

「それを聞いたら若葉ちゃん喜びますよ。『同士をここに見つけた！』って」

「これそんな人気なかったり？」

「ハマる人にはハマるし、ハマらない人にはハマらないと言ったところでしょうか」

「人気ないんですね」

「絶対に若葉ちゃんに言っではいけませんよ？」

「了解。てか俺は普通に美味しいと思うけどね。ひなたはそうでもなかったり？」

「私も美味しいと思いますよ。というか…」

「というか？」

「若葉ちゃんが好きなものを私が嫌いなわけないじゃないですか！」

「あ、はい」

今日一の音量だった。周りに人がいないのが幸いだったけど。……てかこのリハビ

り室昨日も俺以外誰も使つてなかつたんだけど…はは…まさかね…

「てかやつぱり若葉つてうどん好きなのな」

「もちろんです」

「もちろんなんだ…」

まああんな飽お見舞い品としてくれるぐらいなんだからそうなんだろうけどさ。

「ひなたも好きなのは、なんか…ちよつと意外な感じするけどね」

別に深い意味はない。単にパスタとかの方が好きそうだなあつて。

「私と若葉ちゃんが生粋の香川っ子ですからね」

なんでちよつとドヤ顔気味なの？若葉もだつたけど。

「うどんか…俺も麺類の中では一番好きだから気持ちはわかるけどね」

「それを聞いたら若葉ちゃん『違うだろ！全食べ物の中で一番の間違いだ！』なんていい

そうです」

「愛が重ない？」

「香川県民ですから」

「もうそれだけで片付いちやうんだね」

どうやら恐るべしなのはうどん県だけではなくうどんそのものようだ。

世界を救った初代勇者にして、勇者唯一の生き残り、四国に住む人々にとっては現人

神にも等しいであろうあの乃木若葉にここまで寵愛を注いでもらっているなんて——
——うどんもさぞ鼻が高かろうに。

「俺も食べてみたいな」

そこまで美味しいならそりや食べてみたくもなる。本能だもの。

「では行きましようか」

「うん、決定早いね」

「善は急げ、ですよ」

「でも俺一応入院してる患者な訳でしょ？しかも足も十分に使えないような」

あと腕とか指にも力入りにくいも足しておこう。まだ足よりはましだけど。

「病院側にしつかり許可を取れば問題ありませんよ。古木さんは外見はヒョロヒョロですが中身は普通に健康ですから」

「ふうーん。そうなんだ」

自分のことながらイマイチよくわからないな…体の感覚がまだ自分で取り戻せていないから仕方ないのかな。

「……………えつと、ひなた」

「どうしました？」

「もしよければだけど、若葉も誘わない…………？」

ここまでの会話で若葉が大のうどん好きなのはよくわかった。俺も好きだし、そしてひなたも好き。だったらみんなで食べたいと思うのが当たり前——かどうかは知らない。

「若葉、オススメの店とかあるかな？」

「——もちろんですよ。ふふ♪楽しみですね」

なんとなく若葉も一緒だったらどうかな。って思っただけだ。楽しいかもなって。

てか若葉自身の了々としてないし勝手に言ってるだけだけど。

「あ、だったらですね」

あの笑顔が見れるかもって思ったら——

「古木さんから若葉ちゃんに伝えてくれませんか？」

主人公スキル

「相談がある」

「……は……?」

「可及的速やかに解決したいんだ。ぜひ相談に乗って欲しい」

「めんどくさいわ」

「ええー。——じゃあ帰ろっかなあ…」

「…別に嫌だなんて言っていないわよ」

「うわ、めんどくさ」

「で、なんなの。相談って」

「若葉をどうやってうどんに誘うべきだろうか」

「………はあああ?」

というわけで千景のところに来ているわけだが、——さっきも言ったがこれは可及的速やかに解決しなければならない問題だ。

いや、前回あんだだけ感傷的に別れて再会したと思つたらこれかよつて思われるかもしれないけど、まあ——これでいいと俺は思う。

むしろこのぐらい気軽に会えなきや友達じゃないしな。

「てな訳でそろそろ相談に乗つて欲しいんだけど」

「……あ……」

なんか今ボソツと聞こえてきたんだけど。もしかして忘れてたりしてましたかね。

「もしかして忘れてたりした？」

「……ええ、忘れてたわよ。それが何？」

「開き直りやがった！」

「だいたいあなたが弱すぎるから相談されたことも忘れちゃうのよ。きつと」

「全然関係ないしちやつかり酷いこと言ってる！」

というか千景ゲーム強すぎないか。俺もだいたいぶ久しぶりだし腕か鈍ってる分もあると思うけどにしたつて連続10連敗はちよつと酷い。

これいけるかも……！みたいなことすら起きないという……

「ゲーム…好きなんだな」

真剣な表情で画面を見つめる千景に対して俺も画面を見たまま問いかける。

少しでも視線を外そうものなら速攻でボコされるし…

「……そうね。唯一の趣味といってもいいわね」

「この様子だとかかなりの、いや重度のゲーマーっぽいな」

「そうかしら、自分ではよくわからないけど」

「ガチ勢は大抵皆そう言うんだよ。俺のようなせいぜいエンジョイ勢からしたらこんだけその世界に入り込んでる時点でガチもガチだよ」

こいつ全然コントローラー見ないし。もしかして行動パターンとか完璧に把握してる感じなのだろうか。

「…たしかに生き甲斐ではあるわね。もう死んでるけど」

「いやブラックジョーク」

「ふふふ…まさに命を刈り取る死神ってところかしらね」

「ヤバ、患っちゃってるじゃん。気持ちが変わらなくもないけど」

「わ、私の場合は過去にこじらせてた経験があるだけよ…」

「武器が大鎌で切り札が分身ってもう…ねえ」

「な、なによ。いいじゃない…かっこいいと思ったんだから…」

そんなことをボソツと言って千景はちよつと落ち込んだような顔をする。ただコントローラーを動かす指先の動きに迷いや油断はない。

まるで神経が分断されているかのようだ。：ちよつとシユールだなんて。

「気持ちわかるよ。たしかにかっこいいよな」

俺はどちらかといえは千景側の方なのだった。

『うわあ』よりも『いかすう!』の方なのだ。

「——以外ね」

「そうか? 別にかっこいいものはかっこいいと思うよ。というか切り札使った時のお前のあの白いフードみたいなのがかっこいいよな! 全身にまとってるやつ!」

「へえ…なかなかわかってるじゃない。いい目の付け所だわ」

「服装と大鎌とのコントラストが絶妙というさ。いいバランスなんだよな」

そもそも七人同時に全て倒さないと何度でも蘇るっていう能力がもうカッコいい。なにそれチートやんって。

「だかそれがいい!」

「あなたの片手剣もなかなかいいと思うわよ」

「だろ。わかってんな」

「ええ、下手に装飾のない漆黒の剣って感じがいいわね」

「それを聞いたらあの剣も喜ぶよ。本当の持ち主じゃない俺に散々に使われてうんざりしてるだろうからな」

「——人が剣を選ぶんじゃない。剣が人を選ぶ」

「カツコいいセリフだな」

「そんなこと言ったりするでしょ。そういうことよ」

決まったとばかりにキメ顔な千景。きつと無意識のうちにやっていることだろう。

「なんか説明足りなくない？」

「あら、伝わらなかつたかしら」

「……いや、まあなんとなくわかったよ」

「でしょ」

「ありがとな」

「ええ」

千景が言わんとすることはだいたい想像がついた。おそろくだけどこれは千景なりに気を使ってくれたんだと思う。

俺の勝手な勘違いってことも大いに可能性としてはあるけど、物事は基本的にいいようにとっておけばいいものだ。

そこをわざわざ言及しようとはしない。

というかそんなことをゲームしながらできない。

「つてかやつぱり強すぎるだろ。あーまた負けたー」

「これで1-1連敗ね。つくつく……」

不気味だけど可愛い気もする笑い方をする千景。キモカワならぬブキカワを感じた。

「つたく、なんか無性に悔しいな」

「悔しいつてことはそれだけ本気だったつてことよ。ま、精々精進しなさい」

「いちいち嫌味っぽく言つてきやがる……!」

「ほら、1-2連敗目に向けて準備しなさい」

「負けることは確定ですか!やつぱ悔しいわ!」

そんなこんなで1-2連敗目……じゃなくて悲願の初勝利に向けて再戦をする。

「俺もバカじゃないからな。度重なる敗北によって一つ一つ小さくではあるが成長し続

けてるんだ。ここで一発ビシツと……！」

「とかなんとか言いながら負けてるじゃない」

「フラグですらなかつたか……」

「13連敗ね」

「……よし！休憩しよう！」

「突然何よ？」

「ずっとこうやって負けを重ねながらやっていくのはあんまり良くないと思ってな。一度ここで休憩を挟んで頭の中を整理させようってわけだ」

「そ、好きにすれば」

「よし。つはあああ〜〜」

力なく仰向けになって寝転がる。別に寝ようってわけじゃなくてなんとなく体を思いつきり伸ばしたくなっただけ。

散々ゲームはしたから今度は体を使った遊びをしたくなった子供の心情に多少似ていると思う。…俺一応19歳なんだけどね。

「子供みたいね」

「なんならそういうことにしといてくれ」

「あなた19歳でしょ。あと一年で法律上も大人じゃない」

「つても散々寝てたわけだし、心も体も15の時から成長してないからなあ。なんとも言えん」

「そういうものかしらね」

興味なさそうに言いつつ千景も座る体勢を崩して一息つく。絶妙な距離に座る千景に一瞥をくれていると幸か不幸か目があった。

「…なに？」

「いんや別に」

そこからどちらがなにをするでもなく沈黙の時間が流れる。気まずいタイプのやつじゃないから落ち着かないみたいなのもない。むしろ程よい沈黙は心に安らぎを与えてくれる。

するとなんだか安らぎ以上の心地よさみたいなのを感じていた。さつき寝ようとしてわけじゃないって言いつつ眠気と言う名の逆らうのが非常に難しい三大欲求の一角を担う恐ろしい怪物が俺の心を蝕み始めていたのだ。

このまま沈黙が続いていたら夢の世界にお邪魔することになってしまう。何か会話をしなければ……

「…ちゃんと持つてるのね。それ」

どこからともなくというか隣から千景（女神）による救いが与えられたのだった。神樹様はあんま信仰してないけど千景様は今後信仰することにします。

「んあ……なんのこと？」

もう半分以上落ちかけていたせいかめちやくちや寝ぼけてる人みたいな返答になつてしまった。

「だから……えつと……」

「？」

妙に言いづらそうだけど、持つてるもの？

「あ、これのことか」

仰向けの体勢から上半身を起こして千景に腕を差し出す。差し出した腕の手首あたりには赤色の小さめのリボンが結ばれていた。

「ええ……というかなんで手首に巻いてるの」

「変態を見る目で俺を見るな。いつのまにかこうなつてたんだよ」

「そう。……まあいいけど」

「いいって思つてるようには見えないんだけど」

「私がいいって言ってるからいいのよ。うっさいわね」

「なんで最後そんなぶつきらぼうなんだよ」

「気のせいよ。…もうとっくに捨てられてるものだと思つてたわ」

「貰い物をそんな簡単に捨てるかよ。しかも友達にもらつたやつをさ」

そんな非常識というか、人情が無い人間にはなりたくない。俺が今こうして生きて千景と話しているのは人情あつての賜物なのだ。

「友達……」

ポツンととても小声だが千景が呟いたのが聞こえた。

「友達だろ」

「……」

全てを失つて、自分すらも失つて、バラバラになつた自分をもう一度集め直して再スタートを切つたちっぽけな俺の確かなものは、友達ぐらいなものだった。

ぐらいと言つてもそれはかけがえのないもので、絶対に無くしてしまいたくないもので。

大切なものを失うのはもうこりこりなのだ。

「こういう時は難聴でも発揮しておきなさいよ。…バカ」

「へいへい。ついでに鈍感スキルも持つておいた方がいいか？」

「うるさい。死ね」

「死んでるのはお前だけだな」

「あなたが将来死んだ時は私が地獄までエスコートしてあげるわ」

「ま、こうやって神樹のところまで第2の生を得るみたいなのが出来るタマじやないかな。それもいいかも」

「楽しみにしておくことね……ふふふふ……」

「やっぱお前笑い方こえーよ」

苦惱と悪夢

『タマたち、ほとんど姉妹みたいなもんだしなっ！』

『えへへ』

『もし杏とタマが姉妹だったら、タマがお姉さんだな』

『えー、そうかなあ？タマっち先輩よりも私の方が背が高いし、私の方がお姉さんかも』
『何をーっ！タマの方が先輩だし、お姉さんだろ！』

『歳は同じ年だよ』

『いいや、でもタマの方がお姉さんっぽいんだっ！あんずは妹！』

自分が姉だと言いながら、言動も子供っぽい球子に、杏がクスクスと笑う。杏も、本気で自身を姉側だとは思っていない。

『うん、そうだね。私も、私は妹だと思う。タマっち先輩の方が、お姉さん』

『そうだろ、そうだろっ！よーし、じゃあ本当の姉妹になっちゃうか』

球子が杏を抱きしめる。杏もぎゅっと抱きしめ返した。

『あはは、そうだね。きつと仲良し姉妹になれるね』

『ああ、世界一の仲良しだ』

血が溢れ出す、目や耳や鼻からも。毒の影響か、ただ体を貫かれたただけでは起こり得ない異様な症状。他緩した杏の体も、穴という穴から流血していた。

『次に生まれてくる時も、杏と一緒にいたい。本当の姉妹だったらいいな……』
『もし生まれ変わっても、球子と一緒にありますように。今度はきつと姉妹だったらいい』

いな……………」

そして——二人の手から力が抜けた。

絶望と苦しみと悲しみと悔しさと後悔と憎悪と嫌悪と恐怖と無念と——

「っ!？」

なんだ。何がどうなってる。俺は何をしている。いや、俺は俺は俺は——なん

だ。ここはどこで俺は誰でなんで生きて、生きて、生きて……いる……。

「おいつ！大丈夫か?!」

だって、あんなに苦しくて悲しくてたまらないのに、あいつらは友達を——大切は人を守るために死んでいったはずなのに——なんでそんなことを——勇者だから——俺は勇者じゃない——あれは借り物で——ただ一人の女の子を守りたくて——

——なんで俺なんか生きていてあんな奴らが死ななきゃならない——どうして俺はあんな風になれない——だったら——俺も死ねば——

「暦っ!!!」

「!!」

「わか……………ば……………」

「ああ、そうだ。若葉だ。乃木若葉だ」

ぐちゃぐちゃでぐちゃぐちゃで何が何だかわからない頭が——それでも一つの対象を認識した。

「ははっ…悪い…」

「気にするな」

「えっと…おはよう」

「おはよう」

「今日も早いな」

「言っただろう。早起きは得意だ」

「っ、…だったな」

自分でも脈絡のない会話をしていることぐらいわかる。しかし何か喋っておかないと落ち着かなくて仕方がない。若葉の前で吐かなかったことが不幸中の幸いだった。

見せるだけ無様なところはもう見せてきてる。もう十分だ。

彼女は十分苦しんできてる、これ以上余計な重荷を俺の手によって背負わせたくはない。それだけは——してはならない。

「……」
「……！」

氷のように冷たく、未だに感覚が麻痺している手に柔らかな暖かさが重ねられた。
「私には……これぐらいしかしてやれない」

そう言う若葉の顔は伏せられていて俺にはよく見えなかった。

私は、どうしてやればよかったのだろうか。

あの場で彼に——ただ一人残された勇者だと思つていた私の最期の仲間であるはずの古木曆に。

ただ少しでも何か助けになりたいと思つた。そう思つた結果がああの行動だった。

他にはどんな言葉をかけてやればよかつたのか、どんな顔をしていればよかつたのかわんて皆目見当がつかない。私は他人の心を察するのが昔から、未だに苦手だ。

特別それに対して何か思つてきたことはあまりなかつた。だがこんな時はその能力が自分に足りないのが本当に惜しまれる。

思えば皆——かつての勇者の仲間たちは皆他人の心を察して思いやり行動できる者たちだった。友奈も千景も球子も杏も——何度もその思いやりには私は助けられて、未だにその記憶と思い出に助けられ日々を生きている。

しかしその経験を生かすことが私にはできていない。

曆が目をさましてから何度か対面で話をし、どこか少しずつでも彼のことをわかつていた氣でいた。でもそうじゃなかつた。

どこか千景の時と似ている——そうも思つた。

私は千景の——勇者としての千景も仲間としての千景のこともどちらも理解してやることができなかつた。

「若葉ちゃん終わりましたよ。ほら反対になってください」

「あ……ああ」

ふとした時間や空いた時間にこうしてひなたに耳かきをしてもらうのはある意味日課のようになっていた。明確にいつしてもらおうと決めているわけじゃなく、なんとなくでやっている。

「どうですか？最近イヤーサロンのお店をお伺いしていくつかコツを教えてくださいませんか？」

「イヤーサロン？そんなものがあるのか？」

「なんでも最近密かに流行りだとか。どうです、今度行ってみませんか？」

「興味はあるが……私が行くと色々と迷惑だろう」

立场上私の顔は四国中に知れ渡っておりそうやすやすと外出してどこかをぶらりと訪れたりはできない。騒ぎを起こしてしまうと一般の方々にも大赦にも面倒をかけてしまう。

「んーそうですね。残念です」

「どうかそれは耳鼻科とかまた違うのか？」

「似て非なるものだと思えますよ」

「そうなのか」

「イヤーサロンはあくまでエステ、リラクゼーションのお店ですから」

「リラク？ゼーション？」

「休養、息抜き、気晴らしみたいな意味らしいですよ」

「へえ…それにしてもひなた。お前はなんでも知ってるな」

「なんでもは知りませんよ。知ってることだけです♪」

「なんだか名言みたいだな」

しかしまた腕を上げたと思つたら道理で。さすがひなただ。

幼少期の頃からひなたの耳かきには世話になつてゐるがひなた自身の成長とともに耳かきの技術すらも成長させていくとはすごいやつだ。

——ひなたは本当にすごい。こうして普段通りに話しているだけで今朝のことを少し考えずに済む。これがただ目をそらしているだけなのはわかつてゐる。逃げ得ることも。

乃木家の人間として、勇者としてふさわしくないことも。

でもひなたと二人つきりである時ぐらい、せめてそれぐらいは…

ひどいものを見せられたと思う。いや、見せられているのか、俺が自分で見ていたのか……そうは思いたくないが。

正直あんなものを見て平常でいられるやつの方が頭どうかしてるんじゃないかとすら思えてくる。

誰だって友達が死んでいくところなんて見たいはずがないのだ。

「サイテーな気分……」

そう呟いた。心の内を少しでも言葉にしておいた方が気が楽になるから。

「ありやあんまり落ち着かなかったかな？」

「……………」

「ごめんね。うーん、まだまだヒナちゃんみたいにはできないなあ」

「……………」

「あ、自己紹介まだだった！初めまして、高嶋友奈です！「友奈」って呼んでくださいね

「！」

「……………やっぱ神樹ってクソだわ」

「ええ!?!いきなり神樹様の悪口?」

「いきなりというか俺はそもそも神樹様なんて別に信仰しちやいなんだけどな」

「あーそつか。それなら納得!」

「納得しちゃうんだ…」

「あれ?おかしかつたかな?」

「純粹無垢が俺には眩しいよ…えつと…高嶋……だっけ」

「正解!でもできれば友奈って呼んでほしいな」

「なんで?」

「名字で呼ばれるのってなんだか変なムズムズしちゃう感じがあるんだ。…変かな?」

「別に変じゃないよ。でも千景にはそう呼ばれてたんだろ」

「うん。でもまあ…ぐんちゃんは特別だから」

「…お熱いこった」

「えへへ」

しかもそれを否定しないというね、土居や伊予島。若葉にひなた。そして千景と…友奈か。なんかそういうカップリングみたいだな、ここまできると。

「それでそんな友奈は俺になんの用だ？」

「お話してみたかったんだ。暦くんと」

「…そんだけか」

「そんだけだよ？」

「そんだけかあ」

「あれ!?!もしかして何かがつかりさせちゃった？」

「いや、嬉しいよ。話には聞いていた勇者『高嶋友奈』とこうやって話せるなんてさ」

彼女の名前は四国の多くの人々が知っている名前である。あの『乃木若葉』に並び立つ存在として。

「私なんか全然だよ!」

こうやって自分のことを前面に出したがるらないのも若葉や千景から聞いている。と
いうか自分のことはあまり話さなかったみたいだ。

「私なんてまだまだまだヒナちゃんの膝枕の足元にも及ばないもん!」

「そこじゃねえよ!というかなんで俺膝枕されてんの!?!」

「えーつとね、気持ちいいかなあって思ったんだ」

「お前は初対面の見知らぬ男に対して気持ち良さそうだから膝枕するのか?やめとけやめとけ。千景が悲しむぞ」

「初対面だけど…もう友達だよ？」

「……………」

本当に勇者ってのはおかしな連中だ。なんで揃いも揃ってこんなにいい奴らなんだか。勇者だからいい奴らなのか、いい奴らだから勇者なのか。

あんな嫌なもの見た後ってのも相まっていつも以上の自己嫌悪のスパイラルに陥りそう…

…どつちにしろそんな人の良い彼女たちに背負わせるには荷が重すぎるだろうが。神樹様よ。

「あれ？聞こえてなかったかな？」

「聞こえてたよ。ちゃんと聞こえてたからいちいち顔を覗き込もうとするのをやめなさい」

「？はい」

おそらくだけど無意識でこういうことをやっているのだからタチが悪いし、心臓に悪い。普通に恥ずかしいわ。

「とうかたとえ友達だとしても普通膝枕なんてしないとと思うんだが」

「えーそうかなー」

『よくわかんないや』とでも言いたげに首をかしげる友奈。

少々呆れざるを得ないが逆にこれが彼女の魅力なのかもしれない。男とか、女とか関係ない、みたいなの。

「えへへ……私にできることってこんなことぐらいしかないんだ。————ごめんね」

……そんな聖母みたいな笑みを浮かべられたらなにも言えなくなっちゃうだろうが……

「……サンキュな。友奈」